志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)

県営特殊農地保全整備事業（十文字・大川内地区）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

倉園A遺跡
土光遺跡
風穴遺跡

1985.3

鹿児島県曽於郡志布志町教育委員会

序にかえて

大川内遺跡発掘（確認）調査事業は本町が推進している農業基盤整備の一環である特殊農地保全整備事業十文字地区の事業実施に伴うもので，地区内にある倉園A，土光A，B，風穴の四遺跡の埋蔵文化財発掘（確認）調査事業を総称したものであります。

この事業は，国，県の補助を得て県文化課の指導を受けながら志布志町が主体となって発掘調査を実施したものです。

ここにその調査結果を報告書として発行いたしますが，この報告書が文化財の保護と学術研究のため広く活用されることを願っております。

発刊にあたり調査員をはじめ指導者，作業協力者及び協力を頂いた土地所有者の方々に厚くお礼申し上げます。

尚，本町においては埋蔵文化財包含地が各地に散在し，このような土地改良事業実施に伴う遺跡調査は更に続けなければならない事情にありますので，今後ともご協力下さいますようお願いいたします。

昭和６０年３月

志布志町教育委員会

例　言

1．本報告書は，志布志町教育委員会が，国及び鹿児島県の補助を得て，昭和59年度に実施した十文字，大川内地区の発掘調査報告書である。

2．本書の執筆は次の通りである。

第Ⅰ章．第Ⅱ章

第Ⅲ章倉園Ａ遺跡……新東

第Ⅳ章土光遺跡……宮田

第Ⅴ章風穴遺跡

編集は新東・宮田でおこなった。

3．本書で用いたレベル数値は海抜絶対高である。

4．遺物番号は各遺跡ごとに通し番号とした。

5．出土資料は，志布志町教育委員会で保管している。

目　　次

序
例　言

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1
第1節　調査に至るまでの経過 …… 1
第2節　調査の組織 …… 1
第3節　調査の経過と概要 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 5

第Ⅲ章　倉園A遺跡 …… 2

第Ⅳ章　土光遺跡 …… 36

第Ⅴ章　風穴遺跡 …… 50

挿図目次

第1図　志布志町前川・森山川流域における遺跡分布図 …… 3～4
第2図　倉園A遺跡トレンチ配置図 …… 1
第3図　遺跡の層序 …… 2
第4図　第1トレンチ土層断面図 …… 3
第5図　第2トレンチ土層断面図・平面図 …… 4
第6図　第2Aトレンチ出土土器 …… 5
第7図　第2Aトレンチ出土土器 …… 6
第8図　第2Aトレンチ出土遺物 …… 6
第9図　第2Bトレンチ出土土器 …… 7
第10図　第2Bトレンチ出土土器 …… 8
第11図　第2Bトレンチ出土遺物 …… 9
第12図　第3トレンチ土層断面図・平面図 …… 10
第13図　第3Aトレンチ出土土器 …… 11
第14図　第3Aトレンチ出土土器 …… 12

第15図　第３Ａトレンチ出土遺物 …… 13
第16図　第３Ｂトレンチ出土土器 …… 14
第17図　第３Ｂトレンチ出土土器 …… 15
第18図　第３Ｂトレンチ出土遺物 …… 16
第19図　第４トレンチ土層断面図・平面図 …… 17
第20図　第４Ａトレンチ出土土器 …… 18
第21図　第４Ａトレンチ出土土器 …… 19
第22図　第４Ａトレンチ出土遺物 …… 20
第23図　第４Ｂトレンチ出土土器 …… 21
第24図　第４Ｂトレンチ出土遺物 …… 22
第25図　第５トレンチ土層断面図・平面図 …… 23
第26図　第５Ａトレンチ出土土器 …… 24
第27図　第５Ａトレンチ出土土器 …… 25
第28図　第５Ａトレンチ出土遺物 …… 26
第29図　第５Ｂトレンチ出土土器 …… 27
第30図　第６トレンチ土層断面図・平面図 …… 29
第31図　第６Ａトレンチ出土土器 …… 30
第32図　第７トレンチ土層断面図・平面図 …… 31
第33図　第７トレンチ出土土器 …… 31
第35図　土光遺跡トレンチ配置図 …… 35
第36図　土光遺跡基本土層図 …… 36
第37図　第１～５トレンチ平・断面図 …… 37
第38図　第６・７トレンチ平・断面図 …… 38
第39図　第８～10トレンチ平・断面図 …… 39
第40図　第11・12トレンチ平・断面図 …… 40
第41図　第13・14トレンチ平・断面図 …… 41
第42図　第15トレンチ平・断面図 …… 42
第43図　第６・９・10トレンチ出土土器 …… 43
第44図　第11トレンチ出土土器 …… 44
第45図　第11・12トレンチ出土土器 …… 45
第46図　第12～15トレンチ出土土器 …… 46
第47図　各トレンチ出土石鏃等 …… 47
第48図　各トレンチ出土磨石・石皿 …… 48
第49図　風穴遺跡トレンチ配置図 …… 49

第50図　第１～３トレンチ平・断面図 …… 51
第51図　第４・５トレンチ平・断面図 …… 52
第52図　風穴遺跡出土土器 …… 53
第53図　風穴遺跡出土磨石・石皿 …… 53

図　版　目　次

図版１　1.倉園Ａ遺跡遠景（南から）　2.倉園Ａ遺跡近景（南から）　3.遺跡近景（西から）… 54
図版２　1.第２Ｂトレンチ（南から）　2.第３Ａトレンチ（南から）　3.第３トレンチ（南から）… 55
図版３　1.第３Ａトレンチ（西から）　2.第４Ｂトレンチ（南から）…… 56
図版４　1.第５トレンチ（南から）　2.第５Ｂトレンチ（西から）　3.第５Ｂトレンチ（南から）… 57
図版５　1.第６トレンチ（南から）　2.第７トレンチ（南から）…… 58
図版６　1.第２Ａトレンチ出土遺物　2.第２Ａトレンチ出土遺物　3.第２Ｂトレンチ出土遺物
4.第２Ｂトレンチ出土遺物　5.第２Ｂトレンチ出土遺物　6.第２Ｂトレンチ出土石器… 59
図版７　1.第３Ａトレンチ出土遺物　2.第３Ａトレンチ出土遺物　3.第３Ａトレンチ出土遺物
4.第３Ａトレンチ出土石器 …… 60
図版８　1.第３Ｂトレンチ出土土器　2.第３Ｂトレンチ出土土器　3.第３Ｂトレンチ出土石器
4.第３Ｂトレンチ出土石器　5.第４Ａトレンチ出土土器　6.第４Ａトレンチ出土土器
7.第４Ａトレンチ出土土器　8.第４Ａトレンチ出土石器 …… 61
図版９　1.第４Ｂトレンチ出土土器　2.第４Ｂトレンチ出土土器　3.第５Ａトレンチ出土土器
4.第５Ａトレンチ出土土器　5.第５Ａトレンチ出土石器 …… 62
図版10　1.第５Ｂトレンチ出土土器　2.第５Ｂトレンチ出土土器　3.第６トレンチ出土土器
4.第６トレンチ出土土器　5.第７トレンチ出土土器 …… 63

図版11　各トレンチ土層（上…第３トレンチ）（中…第12トレンチ）（下…第13トレンチ）…… 64
図版12　検出遺構　（上…溝状遺構第４トレンチ）（下…性格不明遺構第14トレンチ）…… 65
図版13　出土土器　（№１～25）…… 66
図版14　出土遺物　（№26～41）…… 67
図版15　出土石器　（№42～50）…… 68
図版16　風穴遺跡近景 …… 69
図版17　第１・３トレンチ土層 …… 70
図版18　出土遺物 …… 71

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

鹿児島県は曾於郡志布志町十文字・大川内地区において，県営特殊農地保全整備事業（十文字・大川内地区）を計画したところ，当該地区内に倉園Ａ遺跡・土光遺跡・風穴遺跡の周知の遺跡が所在していることが判明した。

そこで鹿児島県農政部農地防災課，大隅耕地事務所，鹿児島県教育委員会文化課と協議を重ねた結果，埋蔵文化財の保護・活用と，事業の調整を図るため，昭和59年度に，国及び県の補助を得て，志布志町教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は志布志町教育委員会が主体者となり，調査及び調査報告書を鹿児島県教育委員会文化課に依頼した。

発掘調査は昭和59年９月17日から10月26日まで実施し，その後整理報告書作成作業を行った。

なお，事業区が広いため，発掘調査前は十文字・大川内遺跡としたが，周知の遺跡として知られる各名称の倉園Ａ，土光，風穴遺跡とした。

第２節　調査の組織

調査主体者	志布志町教育委員会	教育長	川之上　俊　一
	〃	社会教育課長	加　藤　光二郎（～S，59.　　）
	〃	社会教育課長	山　角　利　行（S，59.　　～）
	〃	社会教育課長補佐	邦加野　久　廣
	〃	主　査	畦　地　正　昭
	〃	主　事	東　迫　光　博
	〃	主　事	米　元　史　郎
調査担当者	鹿児島県教育委員会文化課	主　査	新　東　晃　一
		主　事	宮　田　栄　二

なお，調査企画において，県教育委員会文化課長桑原一廣，同課長補佐本田武郎，同坂口肇同主幹中村文夫，同主任文化財研究員諏訪昭千代，同向山勝貞の各氏のほか，同管理係の指導助言を得た。

発掘調査においては，志布志町文化財審議委員瀬戸口望氏の協力，指導を得た。

第３節　調査の経過と概要

発掘調査は，昭和59年９月17日から10月26日まで実施した。その間の調査の経過と概要については，発掘調査の日誌抄をもってかえる。

第3節　調査の経過

発掘調査は，9月17日から10月6日の間でおこなった。調査の経過については日誌抄で補う。

9月17日(月)発掘調査開始。対象区全体の草払い。調査区西端にシラスの急壁があり，ここを基点に1T～7Tを設定。瀬戸口望氏より遺跡の説明を受ける。3T～5Tの堀り下げ開始。農道両側に設定したため2AT，2BTとする。

9月19日(火) 3T～6T堀り下げ続行。AT側は，壁面のため進行が早く，遺物包含層に達する。平板測量後，遺物取り上げ作業。

9月25日(火) 3ABT，4AT，5ABTの3層遺物包含層堀り下げ続行。実側後，遺物取り上げ。2ABT，6AT設定堀り下げ開始。6ATより大平式出土。

9月27日(木) 1T堀り下げ開始。断面実測。1T，2Tの配置図測量。7AT堀り下げ。2ABT，3ABT，4BT堀り下げ継続。

10月 1日(月) 3AT，4ABT，5AT堀り下げ継続。4BT取り下げ終了。4BT西・南断面図作成，7AT西・南断面図作成。

10月 3日(水) 2ABT，3ABT，5BT堀り下げ継続。3BT終了。3BT西・南断面図作成。3T～4TにかけてのⅢ層包含層は1.5mの厚い層である。

10月 5日(金) 4AT，5AT堀り下げ継続。3AT断面図作成。大川内地区にトレンチ設定。草払い後，1T設定，堀り下げ。瀬戸口望氏来援。

10月 9日(火) 4AT，5AT堀り下げ継続。ほぼ終了。4ATの断面実測。大川内遺跡へ荷物運般。土光遺跡（大川内）1・2T堀り下げ継続。2Tの耕土層より石斧。

10月11日(水) 1T～4T堀り下げ作業。1T終了。薩摩火山灰層確認。倉園A遺跡の3AT～5AT埋め戻し作業終了。

10月15日(月) 2T，～6T堀り下げ続行。1Tの写真撮影・断面実測。7T～9Tのトレンチ配置図作成。

10月16日(火) 4T，8T～10T堀り下げ続行。7Tの断面写真撮影・実測。11Tトレンチ配置図作成。

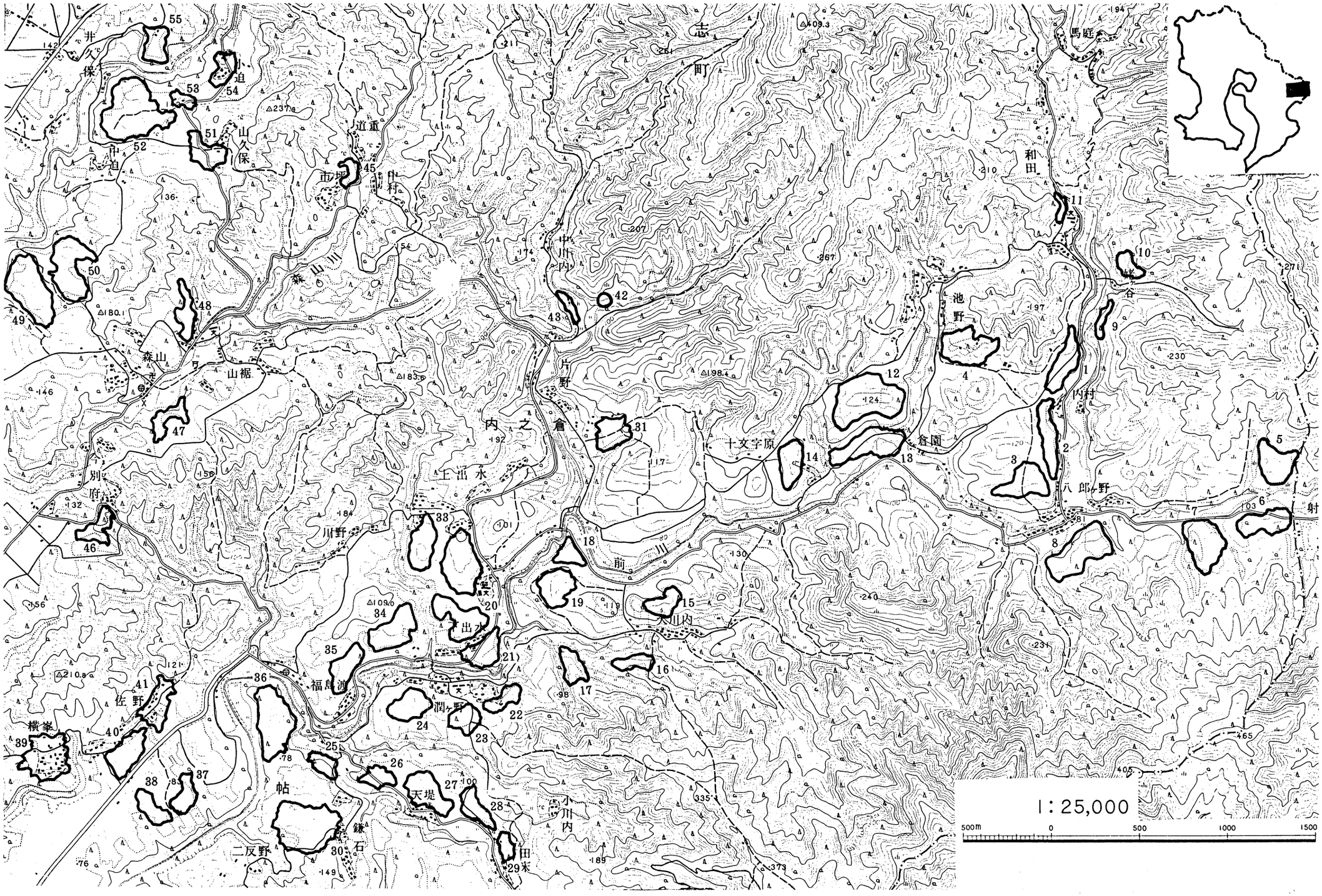
10月19日(金) 10～15T堀り下げ続行。11T・12T・15T遺物平板実測。10Tトレンチ堀り下げ終了。

10月22日(月) 4T，6T堀り下げ終了。12T，13T堀り下げ続行。遺物平板実測。10Tの南側断面清掃，写真撮影，断面実測。

10月23日(火) 4Tの北西断面清掃，写真撮影，断面実測。6T北東断面清掃，写真撮影，断面面実測。風穴遺跡に移動。1T，2T設定，堀り下げ開始。

10月24日(水)土光遺跡埋戻し作業継続。風穴遺跡3T～5T設定。1T～5T堀り下げ作業。土光遺跡，平板実測，断面実測終了。

10月26日(金)風穴遺跡，トレンチ堀り下げ終了。断面実測終了。風穴遺跡の埋戻し作業終了。倉園A遺跡，土光遺跡，風穴遺跡の確認調査終了。機材運搬。



第1図　志布志町前川・森山川流域における遺跡分布図

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

倉園Ａ遺跡・土光遺跡・風穴遺跡は，鹿児島県曽於郡志布志町大字内之倉に所在する。

志布志町は，鹿児島県の最東部で，大隅半島の東海岸，曽於郡の最南端に位置し，北東から南側を宮崎県都城市および串間市と接して県境をなし，北西から西側は末吉町・松山町・有明町と接し，南は志布志湾に望んでいる。南面する海岸線は約１０㎞あり，内陸部にむかって約２４㎞ほど細長く伸びる釣鐘形の地形をなしている。

地形は，北部の山岳地帯から緩やかに海岸線へ伸びていく闊達な丘陵地形をなしており，その間を安楽川，前川などの大小河川が，活発な侵倉作用をおこない大小幾多の狭長な独立台地や沖積地を形成している。

このように，山・川・海の自然の好条件に恵まれた志布志地域の埋蔵文化財は，他の地域に比較すると圧到的に多い。旧石器時代から古墳時代へと万遍なく続くが，なかでも志布志町の縄文時代は「縄文銀座」と称されるほど縄文遺跡の多い地方である。

倉園Ａ遺跡は，前川の活発な侵食活動によって形成された池野台地の南端傾斜面に位置せる。

土光遺遺跡・風穴遺跡は，前川によって同じように形成された対岸の大川内台地の北西傾斜面に位置している。

前川は，御在所岳山地に源を発し，志布志町の東南部を南西に流れ南流して志布志湾に注ぐ延長約１４.５㎞の比較的短い河川である。

今回調査の３遺跡は，いずれも前川流域の台地縁辺に位置するが，このほかにも前川流域の縄文遺跡の分布は多い。昭和５７年から５８年に発堀調査された縄文時代早期の倉園Ｂ遺跡や縄文後期の十文字遺跡は，同じ台地の台地上及び西端に位置している。また，同台地の東端には，昭和５８年に発堀調査された縄文時代早期の井手平遺跡や池野遺跡，八郎ケ野Ａ・Ｂ遺跡が所在している。上流には，旧石器時代の貯蔵穴が発見された東黒土田遺跡がある。本遺跡の下流近辺には，縄文前期の洞穴遺跡で著明な片野洞穴や縄文早期から前期の鎌石橋遺跡・鎌石遺跡や縄文後期の柳井谷遺跡など，いずれも前川流域およびその支流域に展開する重要な遺跡が所在している。

倉園Ａ遺跡は，瀬戸口望氏の絶え間ない踏査によってその重要性が指摘され，河口貞徳氏によって松山式土器の出自の問題を提示された土器群を出土することで再評価された遺跡でもある。

(1)志布志町教育委員会で発堀調査された遺跡。志布志町埋蔵文化財発堀調査報告書(5)(7)(8)

(2)瀬戸口　望

河口　貞徳

志布志町教育委員会　１９８４　柳井谷遺跡　志布志町埋蔵文化財発堀調査報告書(6)

(3)瀬戸口　望　１９７４　「倉園遺跡採集の指宿式土器と其の他について」「鹿児島考古」第10号

(4)河口　貞徳　１９８１　「市来式土器の祖形と南島先中文化への影響」「鹿児島考古」第15号

第1表　志布志町　前川・森山川流域における遺跡地名表

番号	遺跡名	遺跡所在地	時代	備考
1	井手平遺跡	志布志町内之倉井手平	旧石器一(細石核) 縄文早期一(前平式・集石遺構)	鹿児島考古第9号 1974年
2	八郎ヶ野B遺跡	〃　内之倉八郎ヶ野	縄文・晩期	志布志町埋蔵文化財調査報告書(8)
3	八郎ヶ野A遺跡	〃　内之倉八郎ヶ野	縄文・晩期	〃
4	池野遺跡	〃　内之倉池野	縄文・後期	〃
5	東黒土田遺跡(A, B)	〃　内之倉黒土田	旧石器・草創期 縄文・早期・前期	鹿児島考古第15号 1982年
6	東黒土田遺跡(C)	〃　内之倉黒土田	縄文・弥生	
7	東黒土田遺跡(D)	〃　内之倉黒土田	縄文(後期)	
8	八郎ヶ野遺跡	〃　内之倉八郎ヶ野	縄文	
9	姥ヶ谷A遺跡	〃　内之倉姥ヶ谷5,546	縄文・弥生	
10	姥ヶ谷B遺跡	〃　内之倉姥ヶ谷	弥生	
11	和田遺跡	〃　内之倉和田	弥生	
12	倉園B遺跡	〃　内之倉池野	旧石器(細石核) 縄文(早期<石坂式・前平>), 前期・晩期 住居址, 集石, 土坑	志布志町埋蔵文化財調査報告書(7)
13	倉園A遺跡	〃　内之倉池野	縄文後期	本報告書
14	十文字遺跡	〃　内之倉十文字原4,081	縄文(後期), 指宿式	志布志町埋蔵文化財調査報告書(5) 1983年
15		〃　内之倉大川内	縄文	
16	平原遺跡	〃　内之倉平原	縄文	
17	東原遺跡	〃　帖東原	縄文	
18	風穴遺跡	〃　内之倉土光	縄文	本報告書
19	土光遺跡	〃　内之倉土光	縄文	本報告書
20	上原(下出水)遺跡	〃　内之倉上原	縄文	
21	上原(下出水)遺跡	〃　内之倉上原	旧石器(集石) 縄文(早・前期)	
22	出口A遺跡	〃　内之倉出口	縄文・弥生	
23	出口B遺跡	〃　内之倉出ノ口	縄文	
24	立花迫遺跡	〃　内之倉立花迫	縄文	
25	鎌石橋遺跡	〃　帖鎌石	旧石器(ナイフ・細石器)集石 縄文(早・前・晩期)	鹿児島考古第16号 1982年
26	松崎遺跡	〃　帖松崎家野	縄文	
27	家野遺跡	〃　帖松崎 10,767 10,290	縄文・弥生	
28	天提遺跡	〃　帖家野	縄文	

番号	遺跡名	遺跡所在地	時代	備考
29	堂ノ下遺跡	志布志町帖堂ノ下	縄文	
30	鎌石遺跡	〃 帖鎌石	縄文・弥生	
31	浜場遺跡	〃 内之倉片野	縄文	
32	上出水遺跡	〃 内之倉前畑	縄文(早期・石坂式住居址)	鹿児島考古第16号 1982年
33	出水遺跡	〃 内之倉前畑2,928	縄文	
34	出口C遺跡	〃 内之倉出口	縄文(早期)	
35	中須遺跡	〃 内之倉中須	縄文	
36	二反野遺跡	〃 帖二反野	縄文	
37	牧遺跡	〃 帖牧	縄文・弥生	
38	川平遺跡	〃 帖川平	縄文	
39	横峯遺跡	〃 帖横峯	縄文・弥生	
40	上佐野遺跡	〃 帖上佐野原	弥生	
41	佐野遺跡	〃 帖佐野	弥生	
42	片野洞穴	〃 内之倉片野	縄文(前期),弥生	志布志町郷土誌 上巻
43	片野遺跡	〃 内之倉片野	縄文(前期・中・後・晩)	
44	欠番			
45	道重遺跡	〃 内之倉弓場迫2,280	縄文	
46	今別府遺跡	〃 内之倉今別府	縄文	
47	山裾遺跡	〃 内之倉山裾	縄文	
48	森山遺跡	〃 内之倉森山	弥生	
49	西中畑遺跡	〃 内之倉西中畑	縄文	
50	中迫遺跡	〃 田之浦中迫	縄文	
51	山久保A遺跡	〃 田之浦山久保	縄文	
52	蔵園遺跡	〃 田之浦蔵園	縄文(住居址)	
53	山久保B遺跡	〃 田之浦山久保	縄文	
54	小迫遺跡	〃 田之浦小迫	縄文・弥生	
55	小牧A遺跡	〃 田之浦小牧	縄文	

倉園A遺跡

第2図　倉園A遺跡トレンチ配置図

第Ⅲ章　倉園A遺跡

第1節　調査の概要

倉園遺跡は，志布志町内之倉小字大原4648，4649番地に所在する。

倉園遺跡は，日向山系に源を発し志布志湾に流出する全長約20Kmの前川の中流に位置し，市街地より直線で約10Km，県道八野線の約12Kmの行程にあたる十文字（池野）台地の南側末端に立地している。

後背の十文字台地は，標高124mの広大な台地で県営特殊農地保全整備事業（十文字地区）に伴って昭和57年と昭和58年にかけて発掘調査された縄文時代早期の倉園B遺跡や縄文時代中期末から後期の十文字遺跡が所在する。

遺跡は，標高約80mの傾斜地に位置し，下端は前川流域の沖積地に接する。前川との比高は約10mである。遺跡の中央を切断する形で農道が十文字台地に沿って通っている。

遺跡は、昭和39年に発見され，その後，瀬戸口望氏の採集調査によって縄文時代後期の重要な遺跡であることが指摘されている周知の遺跡である（瀬戸口望 1974 鹿児島考古10号）。

県営特殊農地保全整備事業（十文字地区）に伴って農道拡幅の計画が進められ，協議の結果遺跡周辺の確認調査を実施することになった。

農道の北側は，約2.5mの急傾斜面をもって高くなり，畑地になっている。農道の南側は，2m～5m程度の荒地を残して急傾斜し，前川の沖積地に至る。

確認調査は，この農道の北と南にそれぞれトレンチを設定し掘り下げた。遺物が発見された場所を中心に東から西へ約100mの間に，7ケ所（11個）のトレンチを設定し，東から第1トレンチ～第7トレンチとし，農道の北側をAトレンチ，南側をBトレンチと呼称した。

その調査結果についてトレンチ別に述べていきたい。

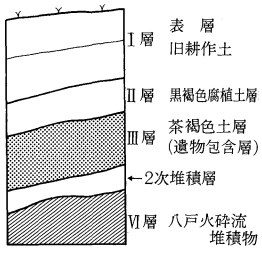
なお，遺跡の基本的層序は，傾斜面に所在するため比較的単純な層序を呈している。

Ⅰ層は，表層であり，近年の造成土も含まれる。

Ⅱ層は，黒色の腐植土層である。その下層のⅢ層との境に部分的に入戸火砕流堆積物（シラス）の2次堆積層が確認される。傾斜地のため，上手の侵食作用による堆積物と考えられる。

Ⅲ層は，茶褐色の遺物包含層である。農道の北側で1.5m程度を計る厚い包含層である。この包含層間にもところどころにシラスのブロックや線が入り，2次的な堆積があった部分も確認される。

Ⅳ層は，基盤層で入戸水砕流堆積物（シラス）である。傾斜地のため，基盤層にも傾斜があり，侵食作用による凹凸が確認される。



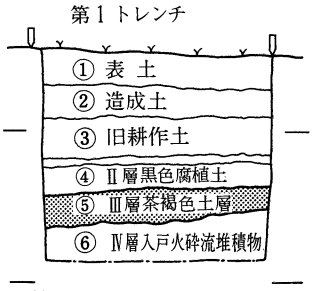
第3図　遺跡の層序

第2節　第1トレンチ（第4図）

第1トレンチは，遺跡の東限を確認するためのトレンチで，倉橋常雄氏宅の私道脇に設定した。包含層の有無を確認するだけの調査のため，倉橋氏の畑の畔部分に幅1 *m*のトレンチを入れた。

層図は，第4図のとおりであり，茶褐色の遺物包含層にあたるⅢ層が約20*cm*の厚さで確認されたが遺物は出土していない。

Ⅱ層の黒色腐植土層とⅢ層の茶褐色包含層の間に火山灰状の砂粒の堆積が確認された。



第4図　第1トレンチ 土層断面図

第3節　第2トレンチ（第5図）

第2トレンチは，道路の北側を第2Aトレンチ，南側を第2Bトレンチとした。

第2Aトレンチは，南北1.5 *m*，東西1.5 *m*を設定した。

Ⅰ層は耕作土であり，約20*cm*～25*cm*の厚さである。

Ⅱ層は，黒色腐植土層で1.9 *m*程度の厚い堆積層である。次のⅢ層との間に，20 *cm*～30*cm*の厚さで，入戸火砕流堆積物（シラス）の2次堆積物が確認される。

Ⅲ層は，茶褐色土層の遺物包含層であり，1.5 *m*～1.6 *m*の厚さがみられる。Ⅲ層には，上から約30*cm*のところに入戸火砕流堆積物の混入層が確認されるのと約1 *m*のところでも色調が若干異っている。上部は，2次堆積した可能性がある。包含層は，東から西への傾斜も確認され，下面では基盤層の入戸火砕流堆積物が侵食を受けてできた凹面の中にもⅢ層は堆積している。

Ⅳ層は，基盤の入戸火砕流堆積物（シラス）である。

第2Bトレンチは，南北1 *m*，東西1.5 *m*で第2Aトレンチに並列して設定した。

Ⅰ層にあたる部分は，道路工事の時の造成土である。

Ⅱ層は，黒色腐植土層で約20*cm*～30*cm*の堆積がみられる。

Ⅲ層は，遺物包含層の茶褐色腐植土層であり，約60*cm*の厚さまで確認したが，南端が崖で危険を伴うため，それ以上の掘り下げを中止した。

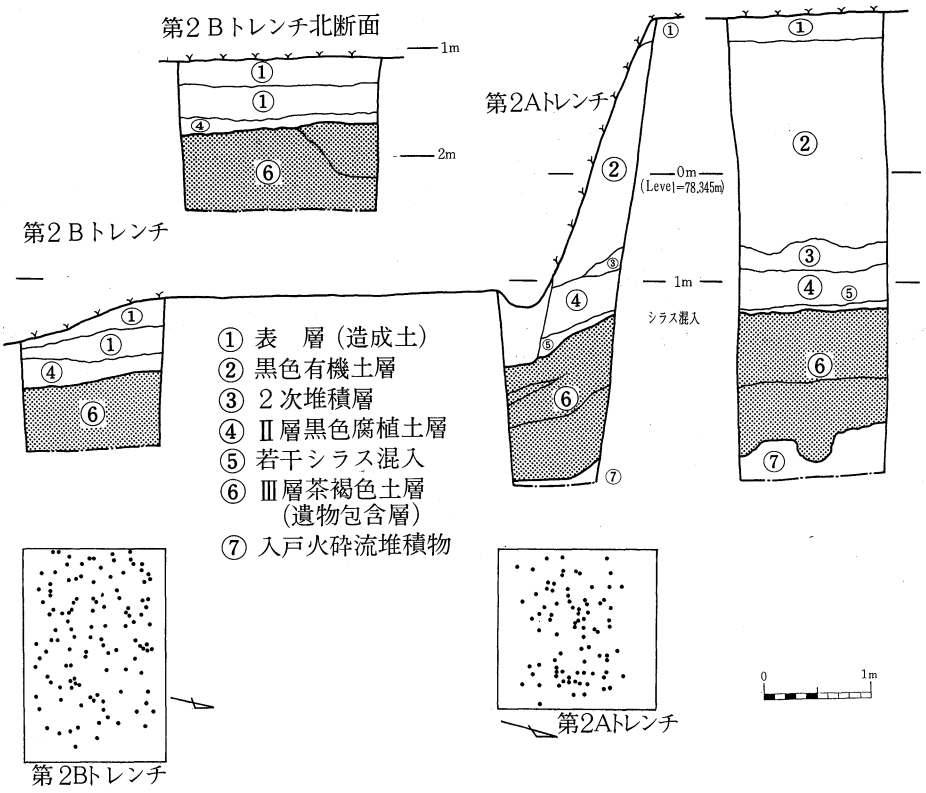
第2Aトレンチから第2Bトレンチの断面を観察すると，第2Aトレンチでは農道によってⅢ層包含層はわずかに削平されているが，農道下面はほとんど残存していることが判明した。

第2Aトレンチの出土遺物

遺物はすべてⅢ層から出土した。Ⅲ層の上部から下部まで平均して出土する。

2）土器　（第6図・第7図）

1～13は，口縁部に貝殻刺突文やヘラ状刺突文を巡らせ，その下方は，細形の凹線文を施すものである。9，10は，ヘラ状刺突文である。貝殻刺突文やヘラ状刺突文は，口縁部の口唇部近くに施すものと，10，13のように頸部近くに施すものがある。内外面とも条痕文が残る。12は，波状口縁の隆起部で内面に4条の貝殻刺突文を施している。14は，細形の凹線文だけで文様を作るものであり，15は，胴部破片である。平行線だけでなく直線を屈曲させた文様構成がみられる。いずれも，内外面とも地文の強い条痕が残る。色調は，暗褐色を呈し，長石・石英



第5図　第2トレンチ土層断面図・平面図

粒・曇母を胎土に含む。12～20は，凹線文間を貝殻刺突文で埋める擬縄文土器である。17や18には渦文状の文様が施されている。明るい褐色の色調を呈し，長石・石英・曇母を含む。19は土製加工品の加能性が強い。21・22は，磨消縄文土器である。23～27は，底部破片である。網代底と木葉底（25）と上げ底（27）が出土している。27は，磨消縄文土器と同じ研磨状の仕上げであり，磨消縄文に伴ことが考えられる。

2）土製加工品と石器　（第8図）

28,29は土器片を加工して作った円板状の土製加工品である。無文のものを使用している。

30は，磨石である。表裏は研磨されているが，側面も円周に敲打痕が確認され，敲石としても使用されている。

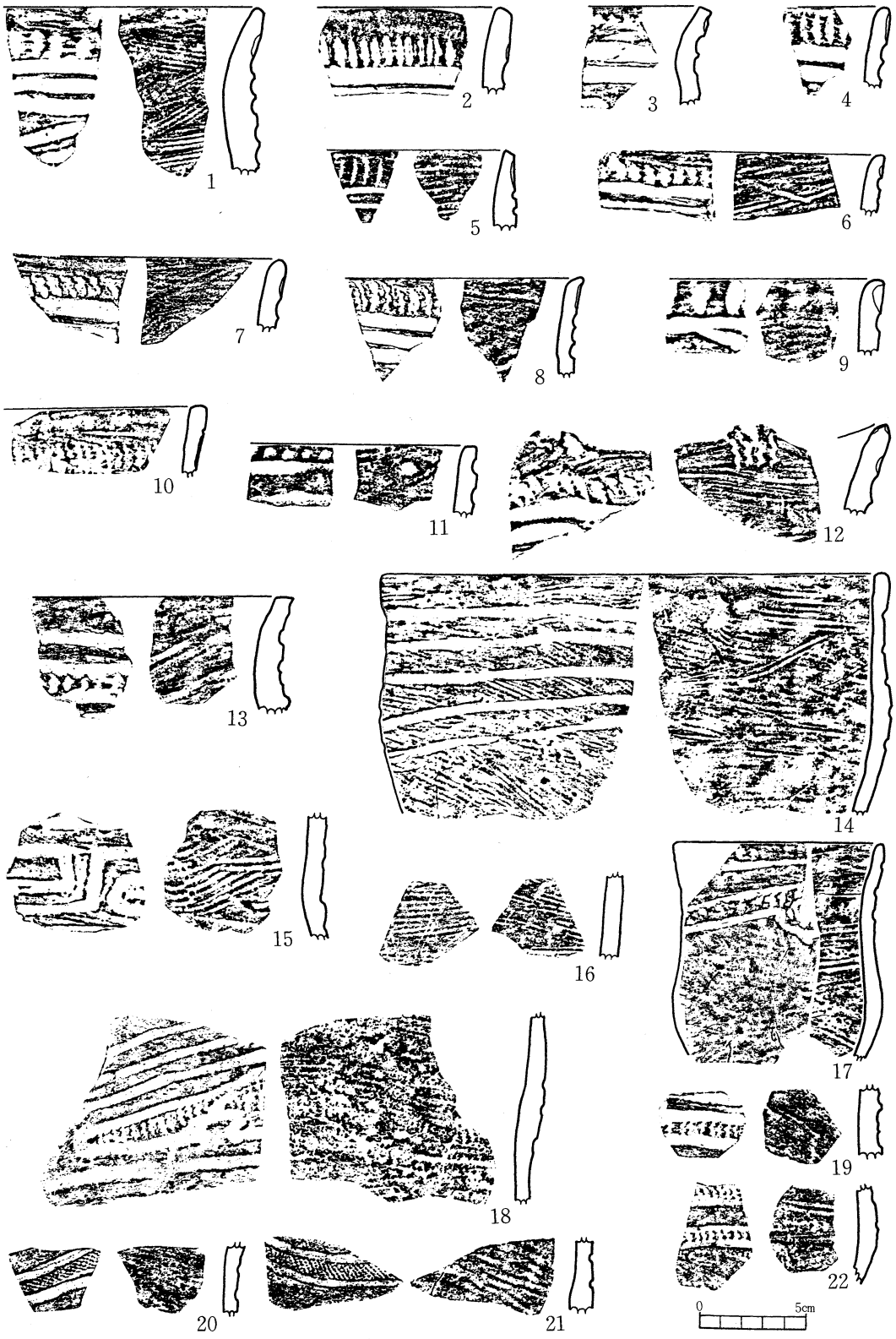
第2Bトレンチ出土の遺物

遺物は，すべてⅢ層から出土している。

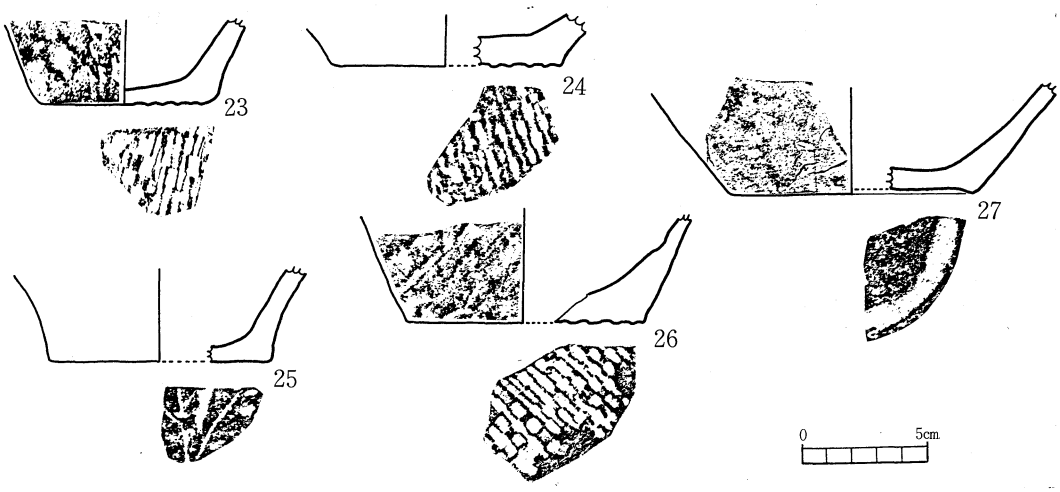
1)土器　（第9図，第10図）

31～51にかけては，口縁外面と口唇端部に近いところに貝殻刺突文及び亥目文を施し，それ以下胴部にかけては，太形及び細形の凹線を施文する土器である。これらは，いくつかのタイプに細分される。

まず，31～35は，貝殻刺突文と指頭大の太めの凹線文を施したものである。器面調整は良好



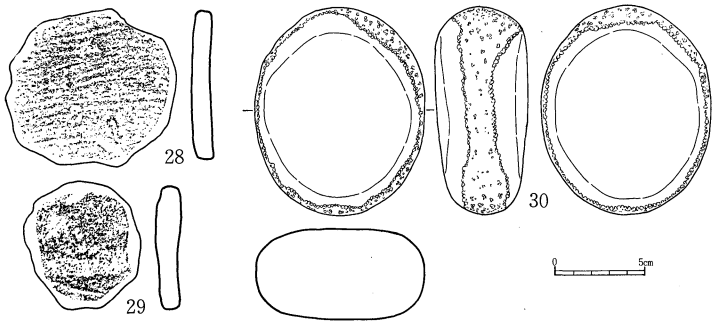
第6図　第2Aトレンチ出土土器



第７図　第２Ａトレンチ出土土器

でナデ状の整形である。色調は褐色を呈する。長石・石英粒を含む。

30，40は，貝殻刺突文に細形の凹線文を施文するタイプである。器内面にはわずかに条痕が残る。色調は暗褐色を呈する。長石・石英粒を含む。



第８図　第２Ａトレンチ出土遺物

43～50は，細形の２本平行凹線文である。46，47，50などには鉤手状つなぎ文や渦文が描かれている。

53は，若干内弯する器形をもち櫛描文で綾杉状の文様を描くものである。

54，56，57は，擬縄文土器である。55は，磨消縄文である。58は，口唇部の平担面に凹線文を巡らすものである。

底部は，網代底（60）と木葉底（59）などが出土している。

２）土製加工品（第11図）

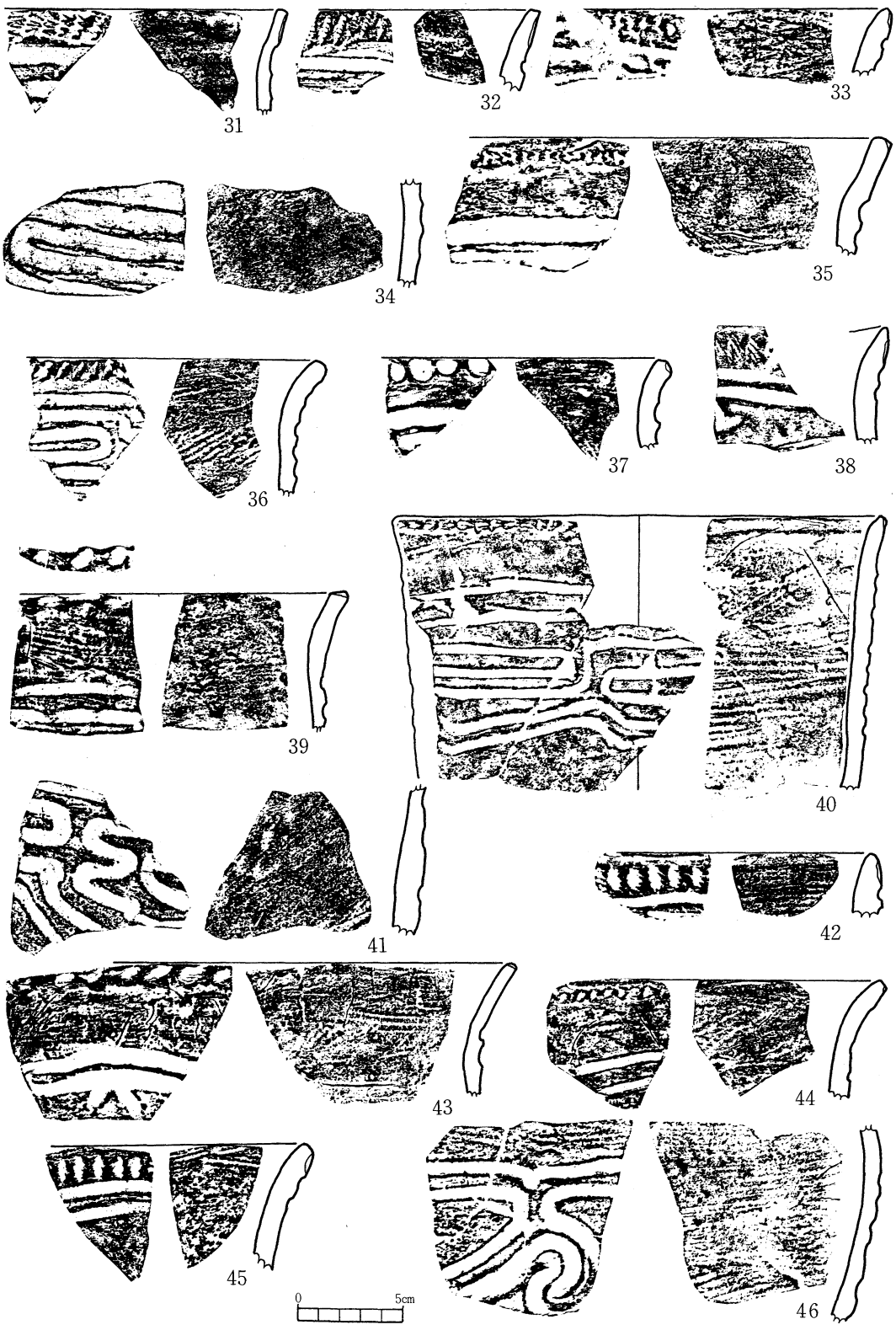
63～68は，土製加工品である。63は，やや太めの凹線文土器片を使用している。66，67は，２本平行凹線文土器の破片である。67には，鉤手状つなぎ文の文様がみられる。

３）石器（第11図）

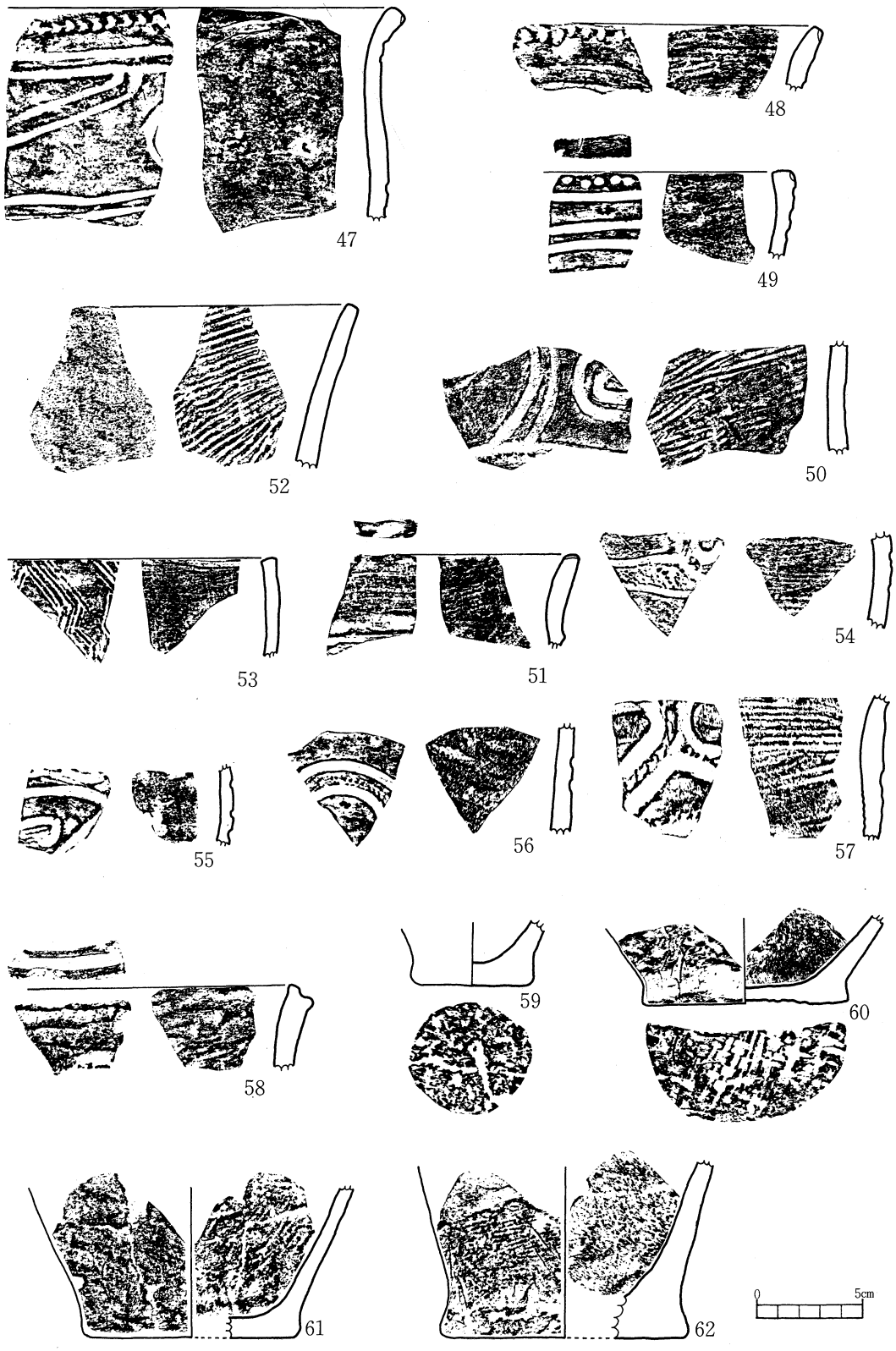
石器は，石斧片と磨石が出土した。

63は，乳棒状の石斧片であり，刃部が欠損している。石材は砂岩である。70も石斧と考えられるが，基部，刃部とも欠損している。

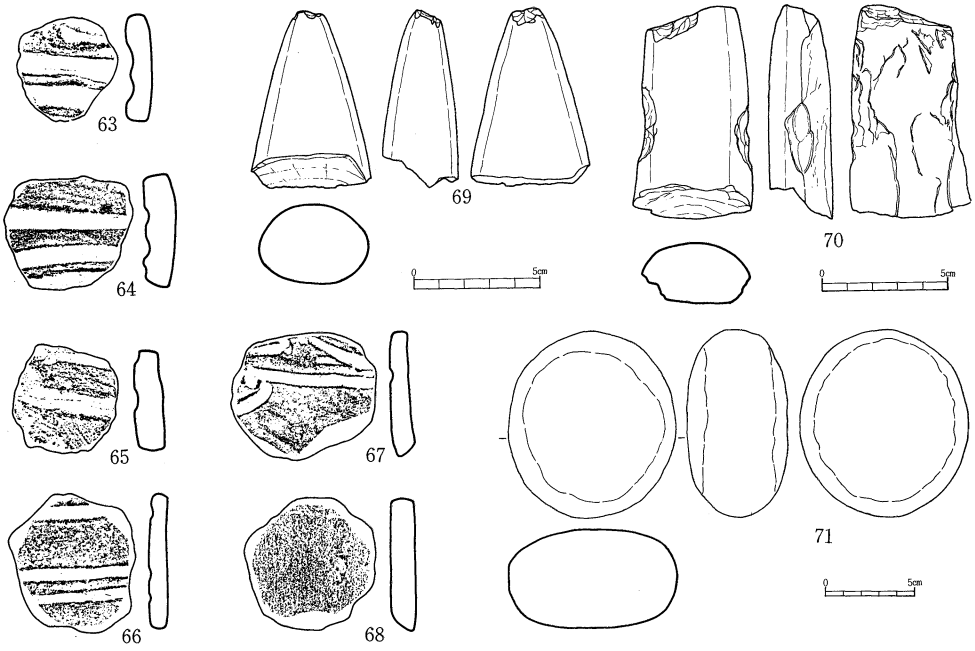
71は，磨石である。



第9図　第2Bトレンチ出土土器



第１０図　第２Ｂトレンチ出土土器



第１１図　第２Ｂトレンチ出土遺物

第４節　第３トレンチ

第３トレンチは，第２トレンチより農道に沿って22*m*の位置に設定した。農道の北側を第３Ａトレンチ，南側を第３Ｂトレンチとした。

第３Ａトレンチは，南北2.2 *m*，東西1.5 *m*に設定した。

Ⅰ層は，畑地を平担にした時の造成土であり，現在，畑である。厚さは80*cm*～90*cm*を計る。下面には，若干砂層が確認される。

Ⅱ層は，黒色腐植土層で 160*cm*～170 *cm*の厚い堆積がみられる。

Ⅲ層は，遺物包含層の茶褐色土層であるが，斜位に大きく乱れている。Ⅲ層の下面には，乳白色の浸透層がみられる。２次堆積層であろう。

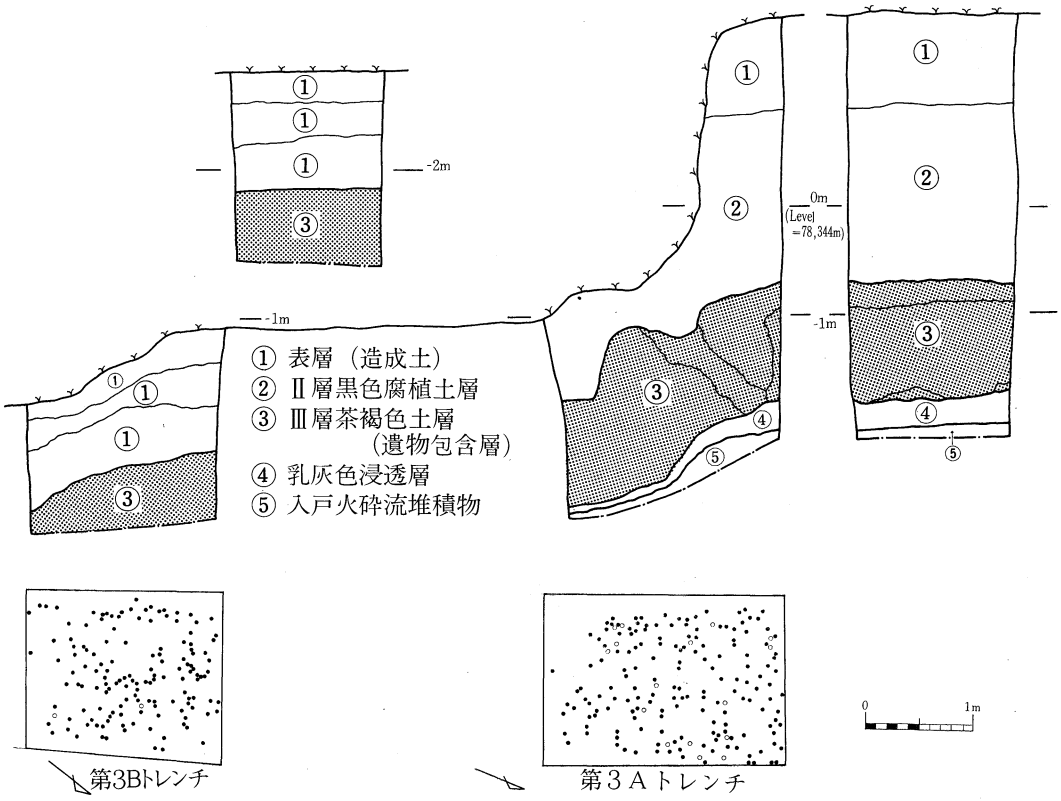
基盤層の入戸火砕流堆積層は，南へ大きく傾斜している。

第３Ｂトレンチは，南北２*m*，東西1.5 *m*を設定した。

Ⅲ層にあたる茶褐色包含層の上面まで造成土が確認される。この造成土には，砂礫や白砂が層を作っており，農道工事に関係する造成土と考えられる。この造成土は，深さ1.1 *m*もあり，その直下はⅢ層遺物包含層となっている。

Ⅲ層は，約60*cm*堀り下げて確認調査を終了した。

第３Ａトレンチから第３Ｂトレンチの断面を観察すると，第３Ａトレンチ付近では，農道工事の折，Ⅲ層遺物包含層の上面を約60*cm*程度削平しているが，農道下面には，まだ，遺物包含層は残存していることが確認される。



第１２図　第３トレンチ土層断面図・平面図

第３Ａトレンチの出土遺物

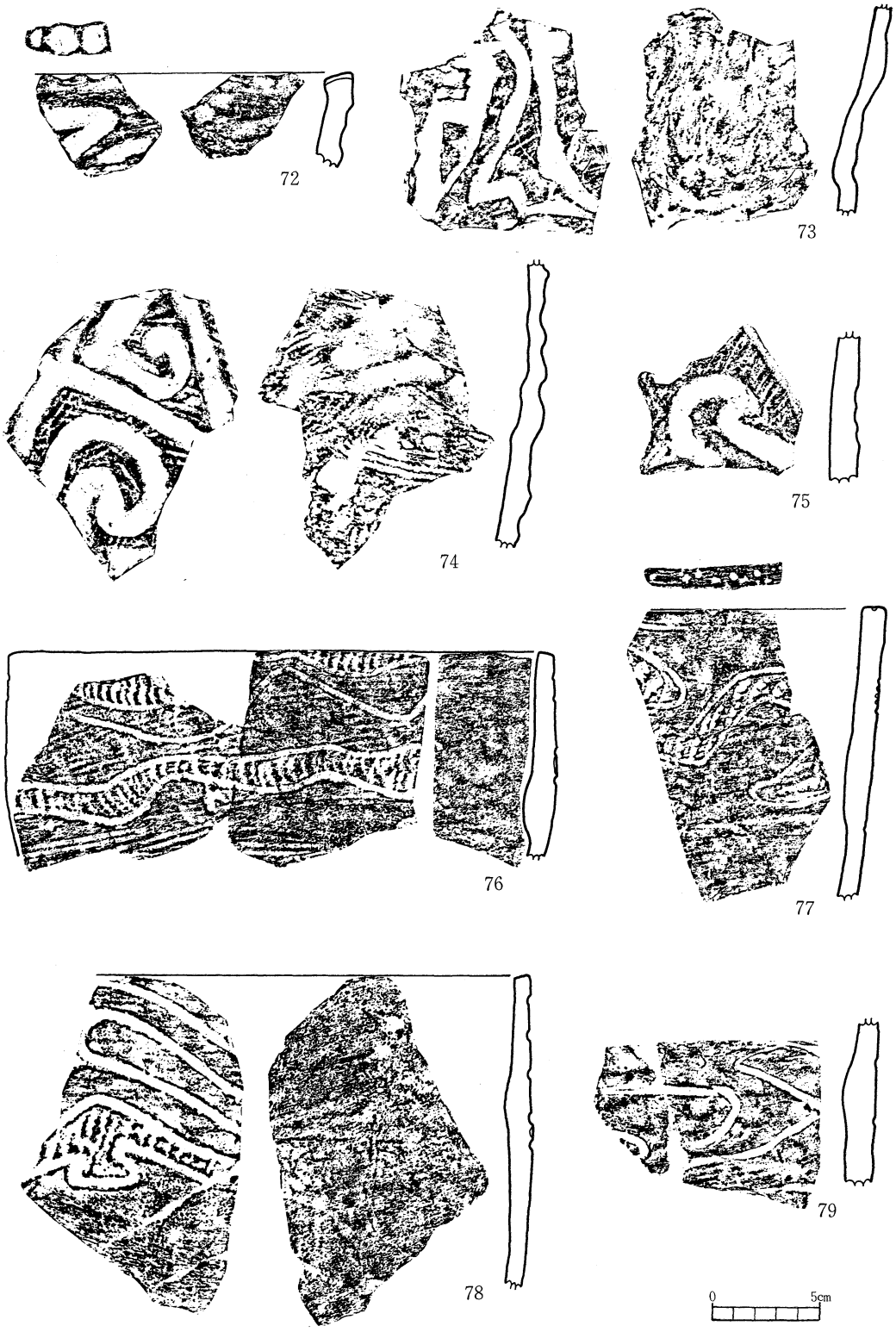
第３Ａトレンチからは土器と石器が出土している。

1)土器　（第14図，第15図）

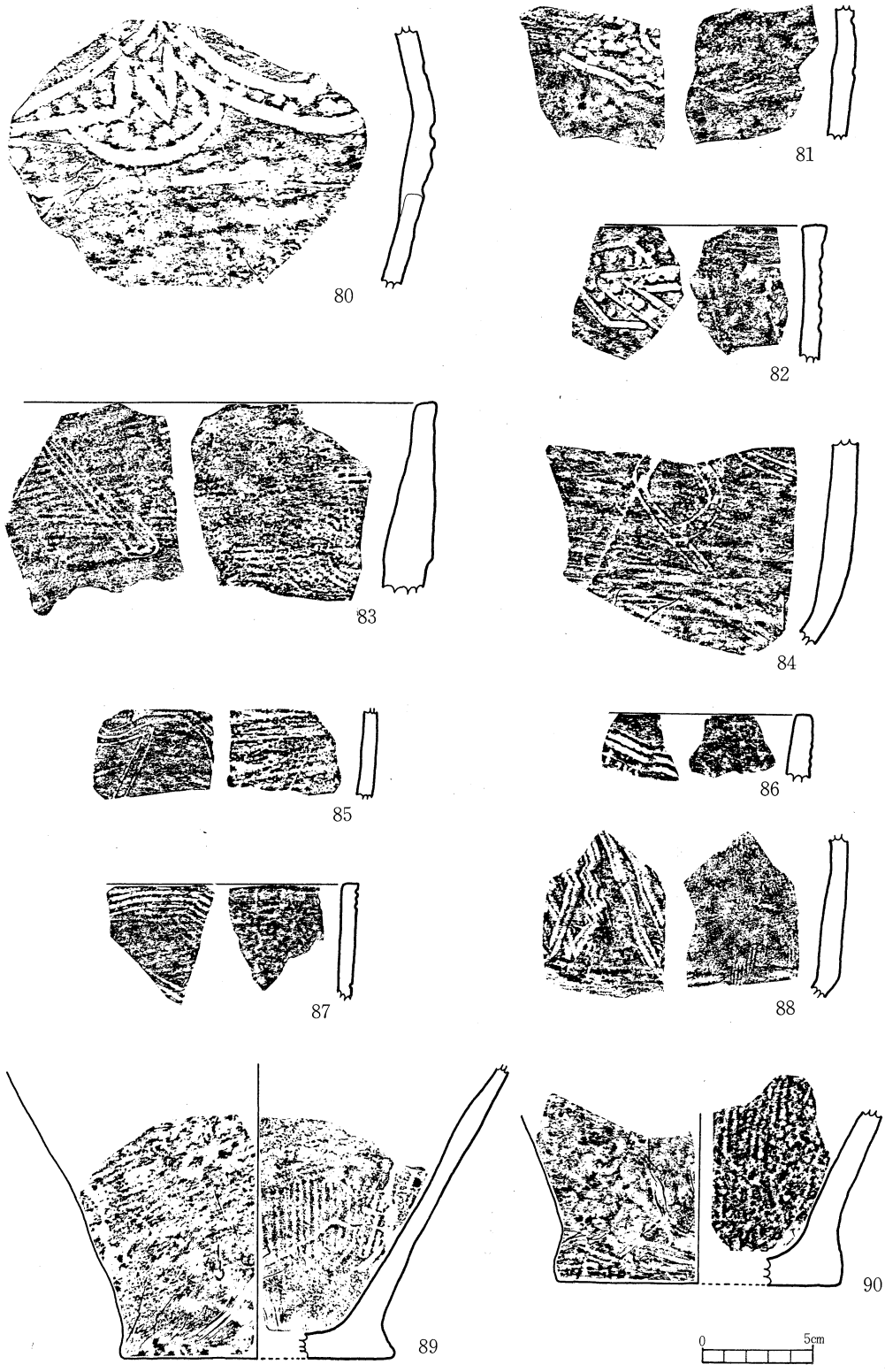
72～75は，指頭大の凹線文を施すもので，鉤手状つなぎ文や渦文などの複雑な曲線文を施文するものである。志布志町宮ノ前遺跡などで類例がみられる。凹線文と凹線文の間に条痕文が残されるのが特徴である。また，内面には，外面の凹線文の反作用で凹凸がみられる。72は，口縁部片で，口唇部には刻目が施される。色調は，全体に黒褐色を呈し，胎土には，長石，石英粒を含んでいる。

76～82は，凹線文間に，貝殻刺突文や棒状施文具の刺突文を施文する。刺突文の施文される２本平行線文は，曲線や三角文・渦文などを自由な形に描いている。断面を観察すると頸部付近で内面が肥厚する特徴がみられる。80～82の刺突文は，凹線文を施した施文具で施文している。

83～88は，櫛歯状施文具やヘラで沈線文を描くものである。83，86～88は，櫛歯状施文具で流水状に鋸歯状の文様を描いている。器形は，頸部が屈曲して若干肥厚し，口縁部は内弯気味に直口する。この口縁部に文様が施文されている。色調は，赤褐色を呈し，胎土には，長石，石英，曇母を含む。



第１３図　第３Ａトレンチ出土土器



第１４図　第３Ａトレンチ出土土器

89，90は，無文の底部である。

2） 石器 （第15図）

石器は，3点出土した。

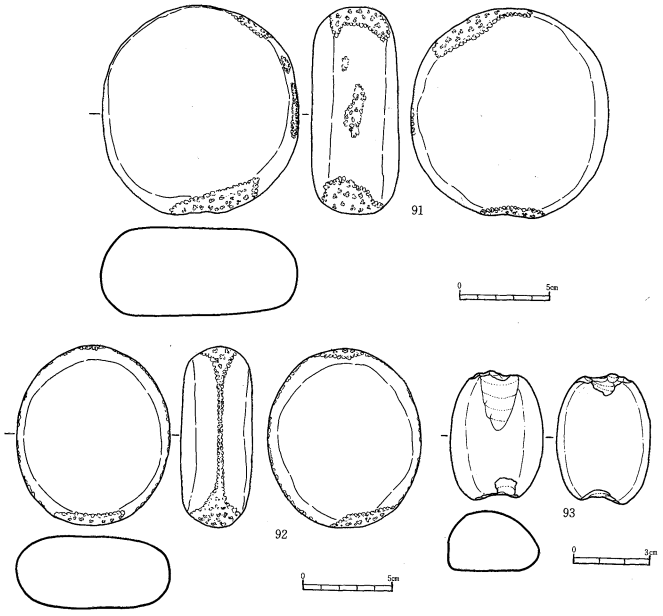
91，92は，磨石である。91は，表裏に研磨痕がみられ磨石として使用されているが，側面には，上下に敲打痕が確認され，敲石としても使用されている。92も同様である。石材は花崗岩である。

93は，石錘である。

第3Bトレンチの出土遺物

第3Bトレンチからは，土器と土製加工品・石器が出土している。

1） 土器（第16図，第17図）



第15図 第3Aトレンチ出土遺物

94～105は，口縁部や口唇端部に貝殻刺突文やヘラ状刺突文を施文し，頸部から胴部にかけては細形の凹線文を施すものである。95は，波状口縁で環状の隆起部をもち，その頂部にも貝殻刺突文を施す。94，99，103などのように，文様は長方形状に結んだり直角に屈曲したりする直線的文様が施文されている。

器面は，ナデ状のていねいな整形がみられるが，内面には条痕文を残す。104，105は，器内外面とも条痕文が強く，刺突文もヘラ状施文具で施すものであり上記型態とは若干異るものである。色調は，赤褐色から褐色を呈し，胎土には，長石・石英・曇母を含んでいる。

110，113～115は，擬似縄文土器である。111は，磨消縄文土器であり，口唇部は肥厚しその平担面に太い凹線文を巡らし外側に縄文を施している。112，116も磨消縄文土器である。

107，108は，網代底の底部である。

2） 土製加工品 （第18図）

土製加工品は，17個出土した。2本平行凹線文を使用したものと無文部を使用したものがある。

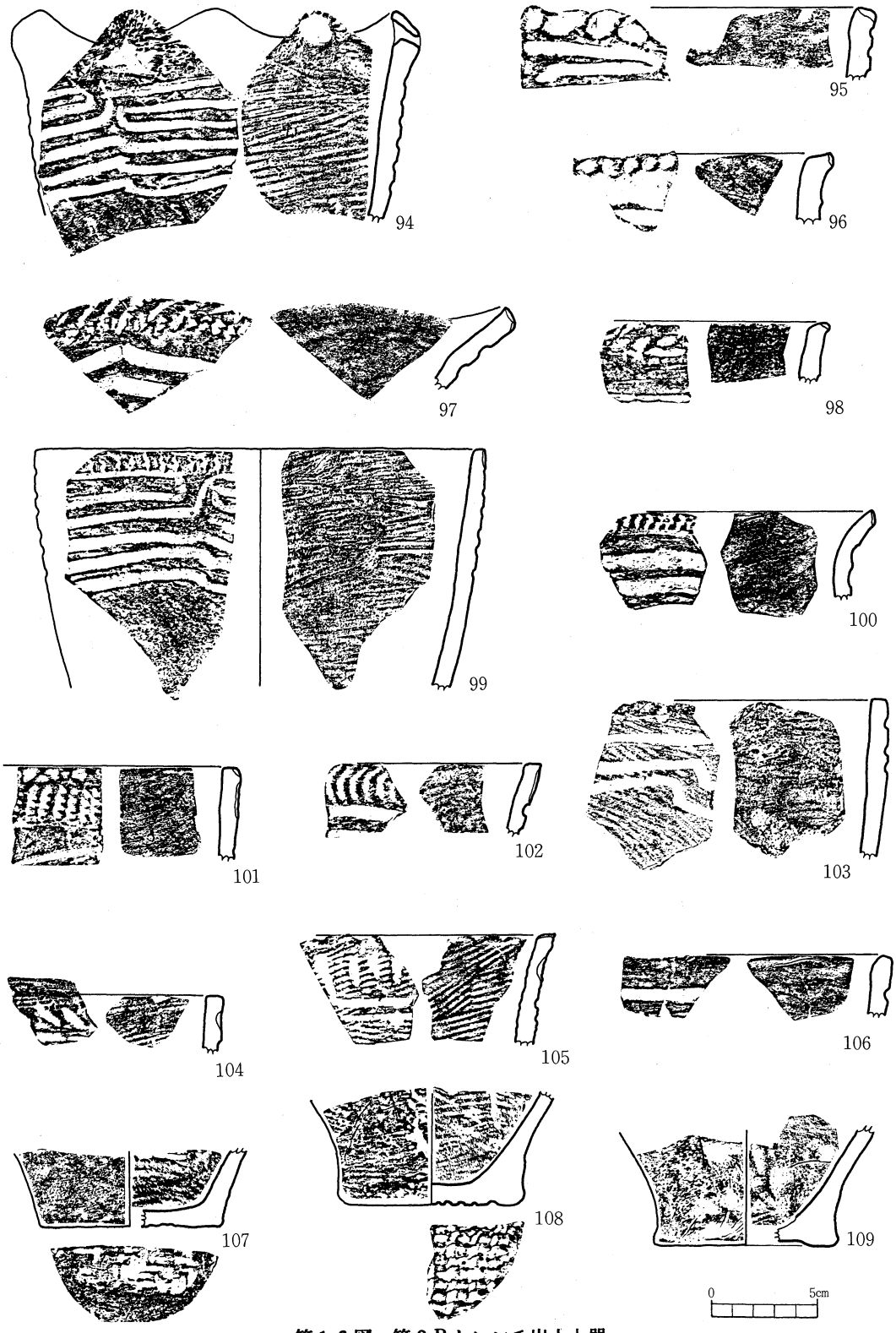
3） 石器 （第18図）

石器は，3点出土した。

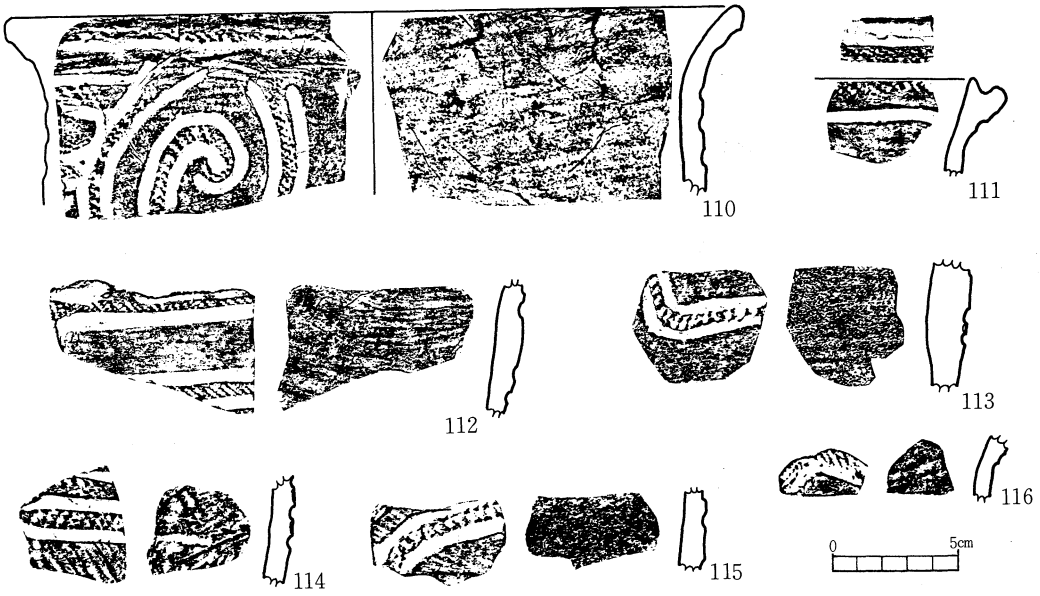
134は，石斧で基部は欠損している。刃部は，両面からていねいに研磨して刃を作り出している。蛤刃状の肉厚の石斧である。石材は砂岩である。

134は，中央に2例の凹面が確認される砥石状の石器である。上・下端部には敲打痕が確認され，敲石としても使用されている。

136は，中央部分が広く深く研磨された大型の石皿片である。石材は砂岩である。



第１６図　第３Ｂトレンチ出土土器



第１７図　第３Ｂトレンチ出土土器

第５節　第４トレンチ　（第19図）

第４トレンチは，第３トレンチより西へ17*m*のところに設定した。農道の北側を第４Ａトレンチ，南側を第４Ｂトレンチとした。

第４Ａトレンチ

第４Ａトレンチは，南北方向４*m*，東西方向1.5*m*の南北に長いトレンチを設定した。

表層は，約75*cm*の厚さの造成土である。表層とⅡ層の間に厚さ約2.5*m*の新しい層が確認された。色調は灰黒色を呈し，Ⅱ層に類似する成分であり旧表層の可能性が強い。

Ⅱ層黒色土は，120*m*～125*m*と厚い。Ⅱ層の下部には，Ⅲ層と区別される黒褐色土層が確認される。その成分は，ほぼⅢ層に類似するものでⅢ層の２次堆積層と判断する。

Ⅲ層は，１*m*～1.2*m*の厚さの遺物包含層であり，南側へ大きく傾斜して堆積している。Ⅲ層の下面には，20*cm*から30*cm*の厚さの入戸火砕流堆積物（シラス）の粗粒とアカホヤ水山灰の粗粒を混じた２次堆積層が確認された。

基盤層は，入戸火砕流堆積物である。

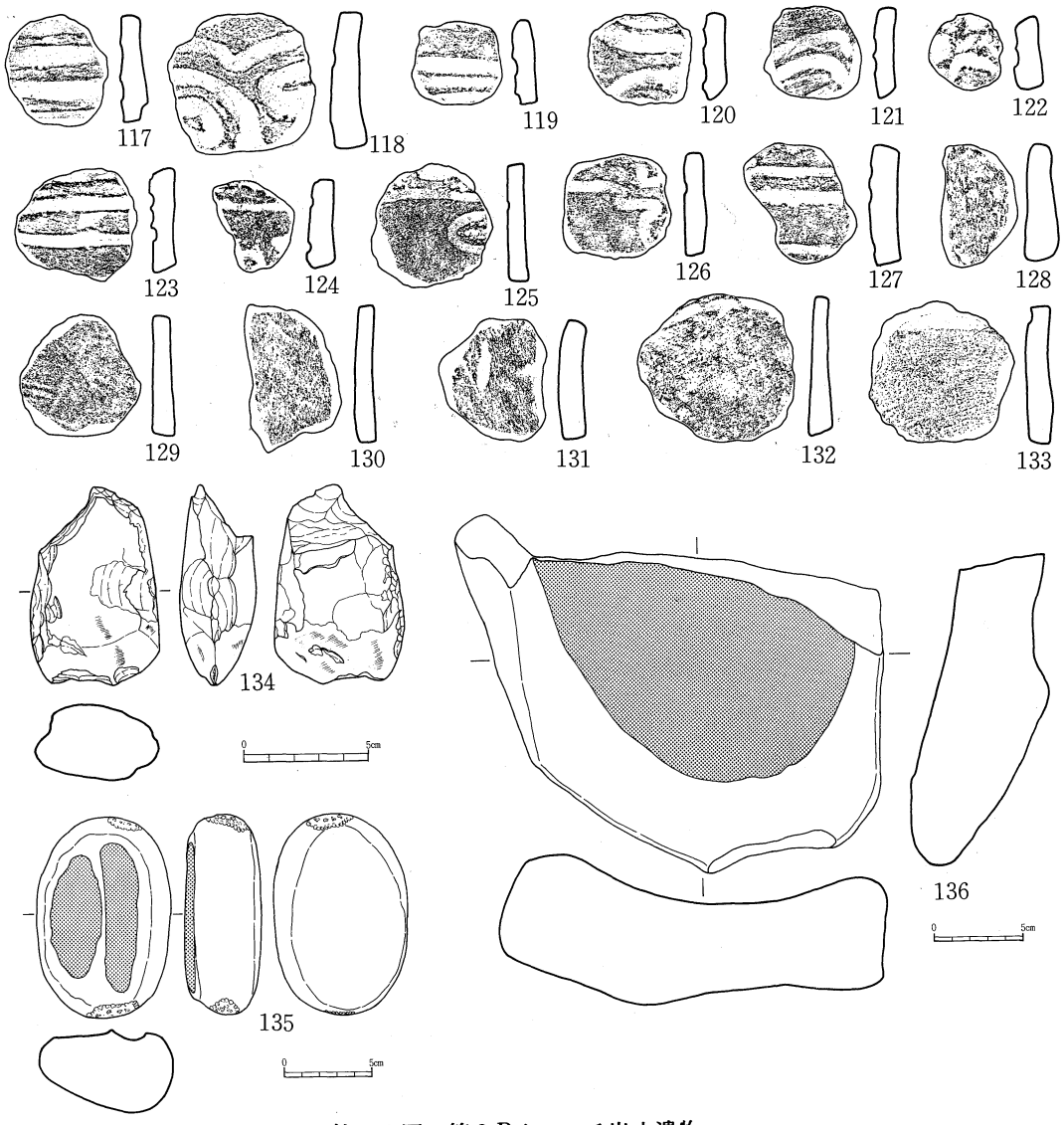
第４Ｂトレンチ

第４Ｂトレンチは，南北２*m*，東西２*m*の正方形のトレンチを設定した。

表層の下には，農道工事時の白砂の造成土が１*m*余りみられる。その下には，黒褐色土層が確認されるが，これは，第４Ａトレンチで確認されたⅢ層の２次堆積層と判断した。トレンチの北端で厚さ40*cm*を計り，南端では70*cm*と傾斜するにつれて厚くなる。

Ⅲ層は，この黒褐色層の下位に確認される。南側が崖のため，Ⅲ層は約60*cm*の深まで確認して終了した。

第４Ａトレンチから第４Ｂトレンチの断面を観察すると，農道工事によってⅢ層の上面は，



第１８図　第３Ｂトレンチ出土遺物

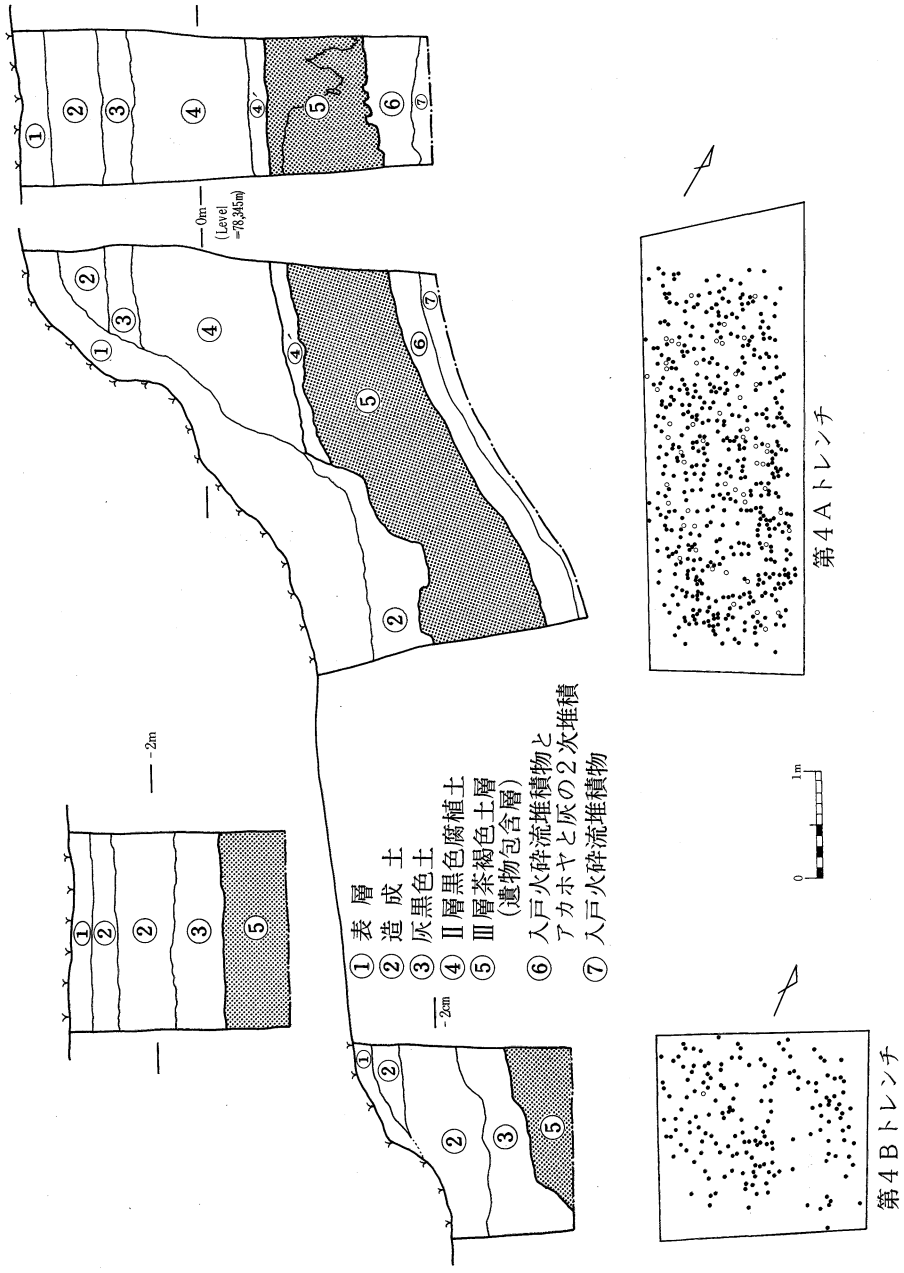
少々削平されているが，第４Ａトレンチの南端で農道の下に約１ｍ以上の残存が確認され，第４Ｂトレンチの層位と傾斜を考えれば，農道の下にはかなりの厚さのⅢ層包含層が残存していることが考えられる。

第４Ａトレンチの出土遺物

第４Ａトレンチでは，土器と土製加工品，石器が出土した。

1）土器　（第20図，第21図）

137～144は，指頭大の太形凹線文である。137は，志布志町宮ノ前遺跡で確認されたものと同じであるが，直口する口縁部の口唇部は内傾した平担面をもつものである。波状を呈する口縁部である。凹線文間や内面には，強い条痕がみられる。141，142や144は，その胴部片と考えられる。

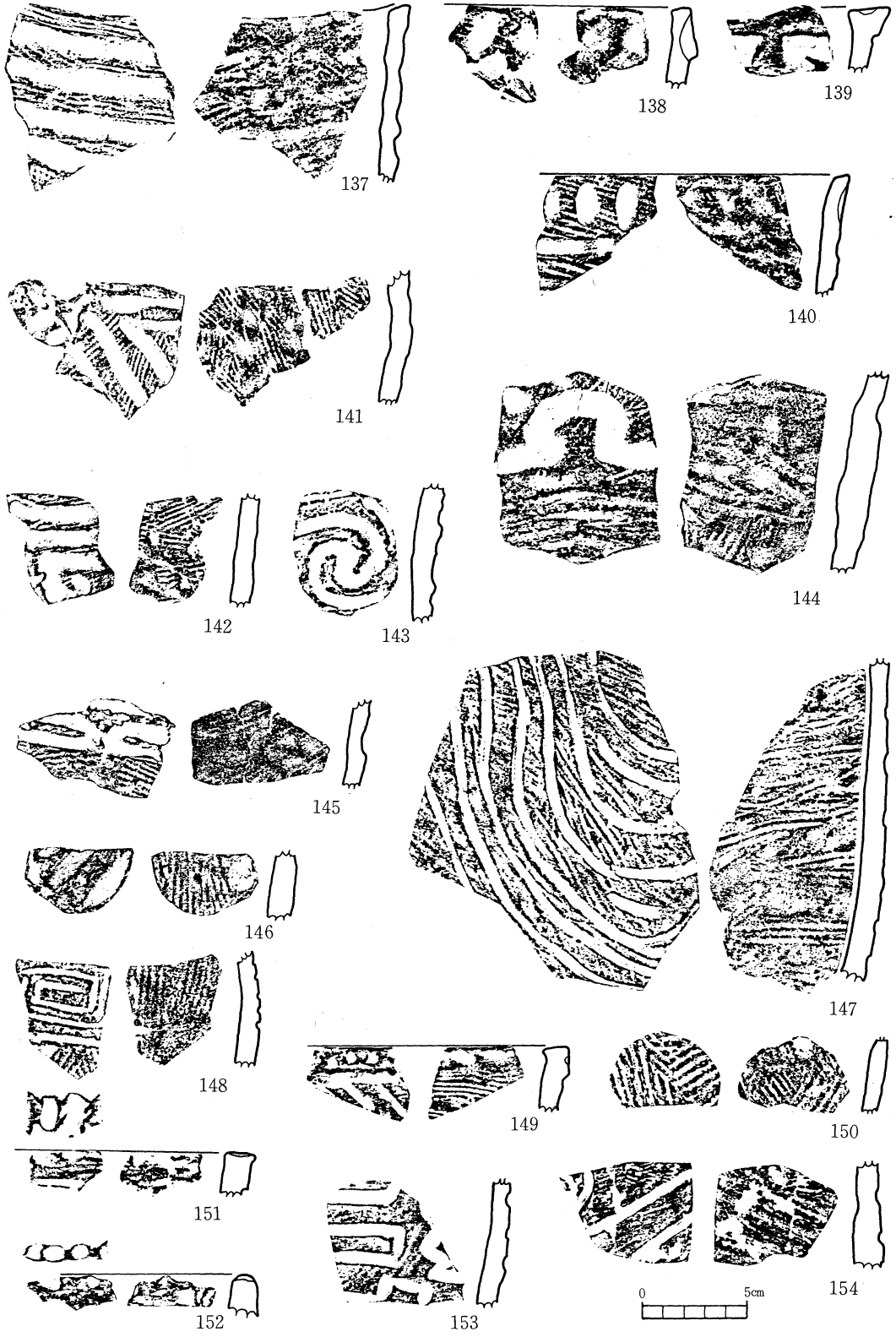


第19図　第4トレンチ土層断面図・平面図

138は，太形の凹点文を施すものである。頸部から胴部の文様は不明であるが，胎土や整形は137に類似する。

139は，口唇部を拡張し，その平担面に凹線文を施すものである。

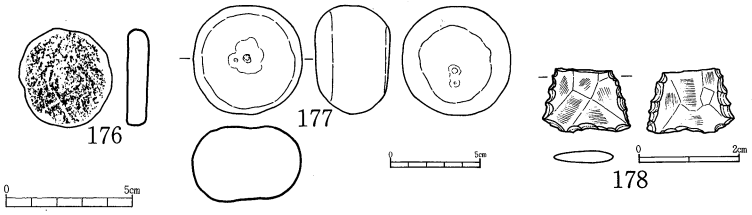
140は，太形の凹点文を口縁部に施すものであるが，頸部から胴部の凹線文は若干細くなるもので，器面には条痕が強く残る。



第２０図　第４Ａトレンチ出土土器

第２１図　第４Ａトレンチ出土土器

145，147は，比較的細形の凹線文が胴部に施されているのもある。内外面には強い条痕が残る。



第２２図　第４Ａトレンチ出土遺物

146は，太形凹線文の破片である。土製加工品の可能性もある。150も，条痕文の破片で土製加工品のようである。

147～149，153，154は，細形の凹線文で曲線や直線を屈曲させて文様を描くものである。149は，口縁部に刺突文が施される。151，152は口唇部に刻目文を施すものである。

155，156は，山形口縁で口縁部が肥厚し，その上に3例の刺突文を施す。器面は，条痕地文の上から細形の凹線文を施す。

157，158は，第３Ａトレンチの76～79に類似するもので自由な凹線文を施し，その中にその施文具で刺突文を施すものである。

159は，平口縁に山形の隆起部を付けたものである。器形は，胴部から外反したまま口縁部は開くものである。文様は，櫛状の施文具で，直線や曲線を描く。底部付近から胴部にかけては条痕文が残る。

160～164も，櫛状の施文具で鋸歯文や曲線文を描くものである。160は，頸部付近から口縁部へ肥厚し，その肥厚部分に文様が施されている。

168は，口縁部が肥厚し，口縁部に2条，口唇部に1条の凹線文が施文される。

169は，小破片であるが口唇端部に縄文が施された磨消縄文土器である。

166，170，171は，凹線文間に貝殻刺突文を施した擬縄文土器である。

底部は，175は網代底であるが他は無文である。

2）土製加工品　（第22図）

176が1個出土したが，無文の土製加工品で円板の周囲はていねいに面取りしたものである。

3）石器　（第22図）

177は，円形の凹石で表裏とも中央に凹面が確認される。砂岩である。

178は，石鏃である。周囲は交互剝離で調整され，表裏とも研磨仕上げがみられる。

第４Ｂトレンチの出土遺物

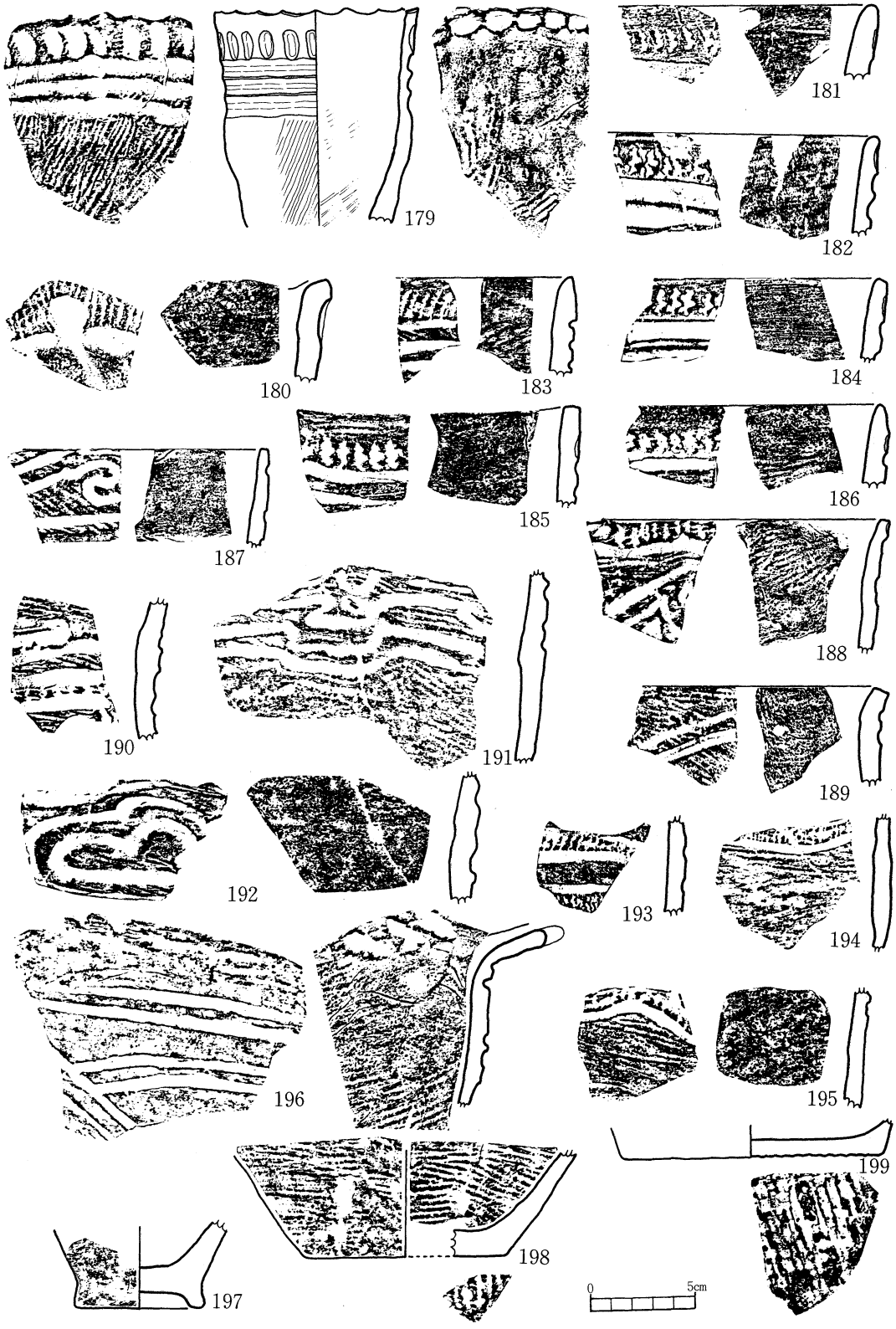
第４Ｂトレンチでは，土器と土製加工品が出土している。

1）土器　（第23図）

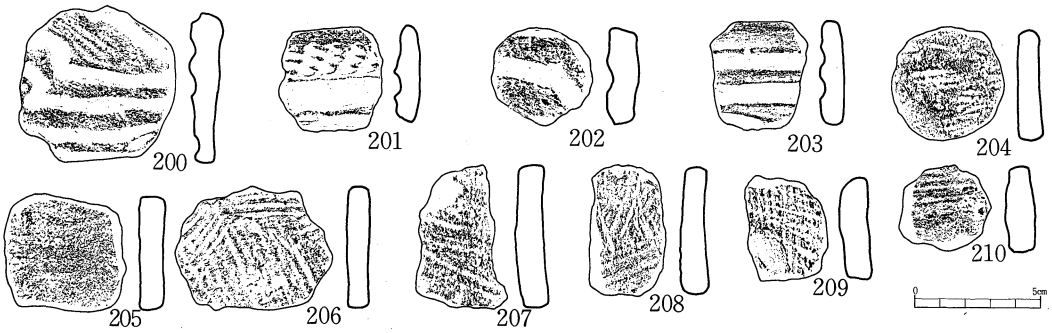
179は，小形の口縁が直口する深鉢である。口縁部に押圧状の刻目を入れ，口縁部には半月状の凹点文を施す。　の下位には，太形の凹線文が3条巡っている。器面には，強い条痕文が残る。

180は，山形隆起の口縁部であり，その口唇端部に貝殻刺突文を施している。文様は，太形の凹線文がみられる。

181～182は，口縁部に貝殻刺突文を巡らせ，その下位には太形の凹線文を施文するもので



第２３図　第４Ａトレンチ出土土器



第２４図　第４Ｂトレンチ出土遺物

ある。

183～192，196は，細形の凹線文土器である。183～186，188は，口縁部に貝殻刺突文が施される。187，189は，口縁端まで曲線文や斜向線文が描かれるものである。196は，波状口縁の内面に貝殻刺突文が施されている。

193～195は，擬縄文土器である。

底部は，197は上げ底で，198，199は網代底である。

2）土製加工品　（第24図）

土製加工品は，10個出土した。

200～203は，いずれも指頭大の太形凹線文土器の破片を使用している。201は，口縁部に貝殻刺突文を施文した口縁部片を使用している。204～210は無文部を使用したものである。

第6節　第5トレンチ

第5トレンチは，第4トレンチの西15*m*のところに設定した。農道の北側を第5Ａトレンチ南側を第5Ｂトレンチとした。

第5Ａトレンチ　（第25図）

第5Ａトレンチは，南北に4*m*，東西に1.5*m*の縦長のトレンチを設定した。さらに，この付近では，農道と北側の傾斜地の間に平担地が存在したため，平面の拡がりをつかむ目的で東側に1.5*m*拡大した。

表層は，約50*cm*の造成土である。その下には，第4トレンチでも確認された厚さ25*cm*程度の黒灰色土層が確認される。旧表層と考えられる。

Ⅱ層は，1.5*m*と厚い。Ⅱ層の下面はⅢ層であるが，漸移層で線引きが困難である。

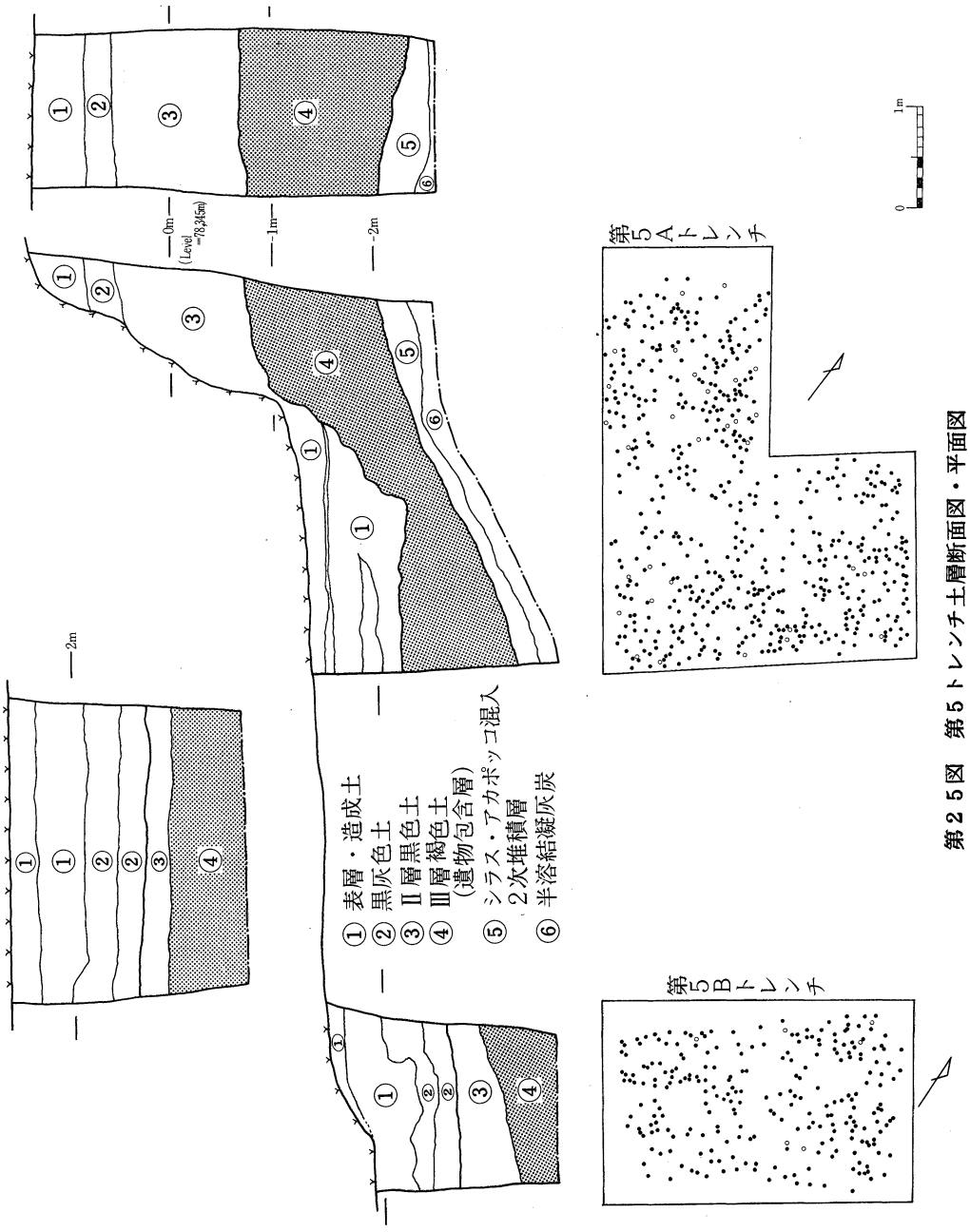
Ⅲ層は，厚さが西側で130*cm*，東側で165*cm*と厚くなり東側に傾斜している。3Ａトレンチでは，西側へ傾斜していたので，この地形の小谷は第4トレンチ付近が最も中心であり，包含層も厚いことが判明した。

第5Ｂトレンチ　（第25図）

第5Ｂトレンチは，東西に3*m*，南北に2*m*のトレンチを設定した。

表層は，農道工事の約50*cm*の厚さの砂礫や白砂の造成土である。その下面は，旧表土の灰黒色土である。

Ⅱ層は，60*cm*から80*cm*の厚さで残存しており，その下面にⅢ層が確認される。



第２５図　第５トレンチ土層断面図・平面図

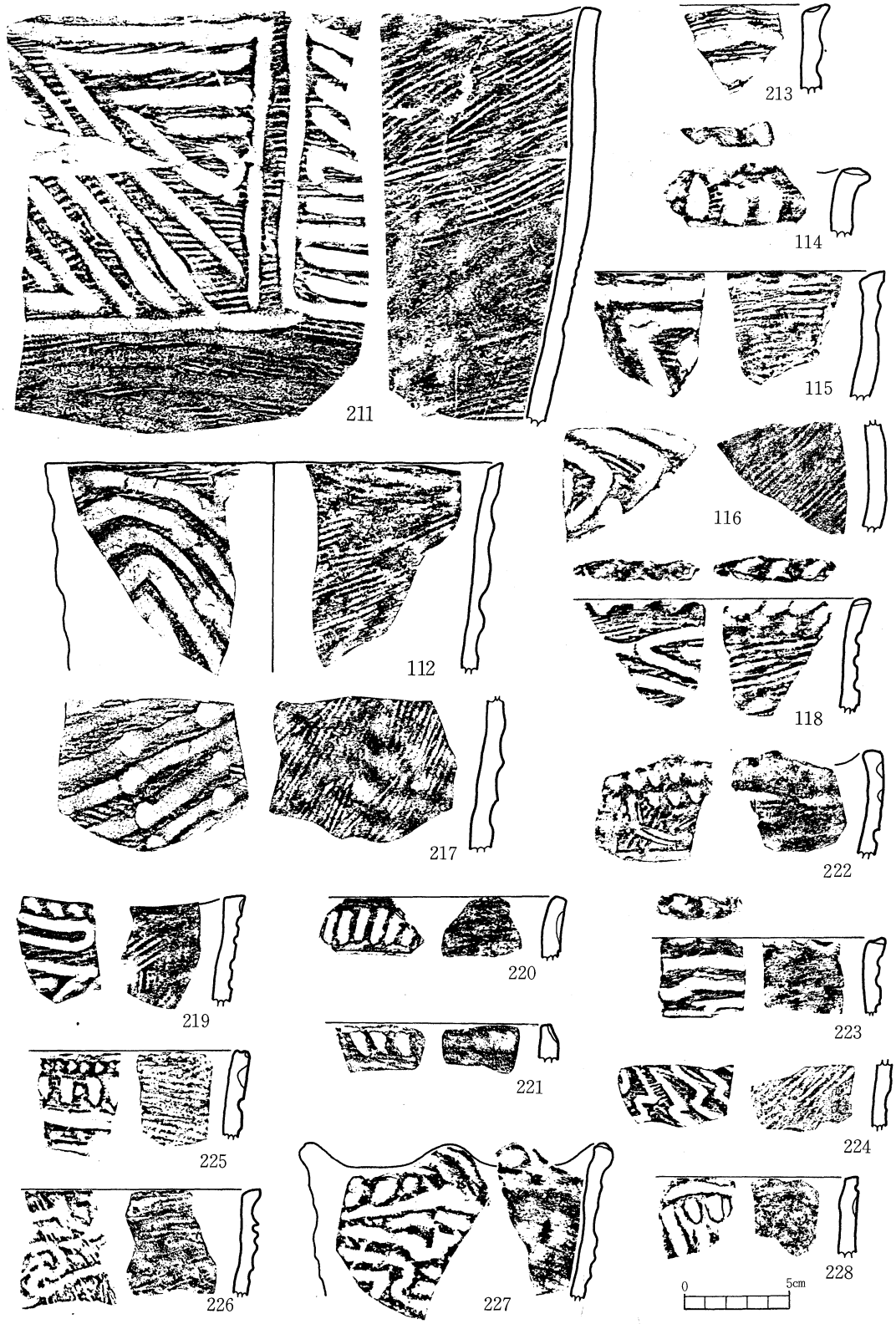
Ⅲ層は，70cmの深さまで掘り下げ確認調査を終了した。

第５Ａトレンチ出土の遺物

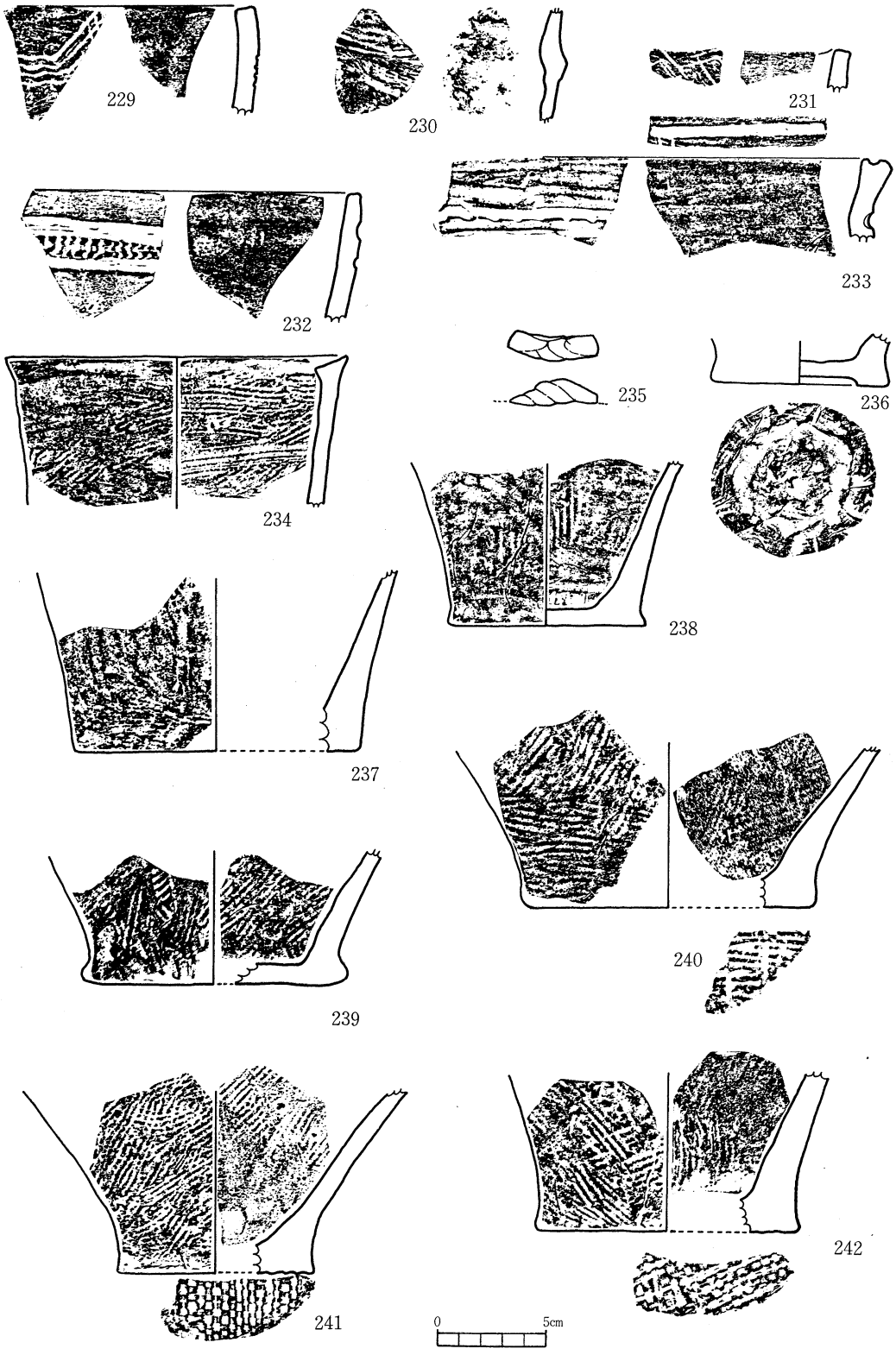
第５Ａトレンチでは，土器，土製品，石器が出土した。

1）土器　（第26，第27図）

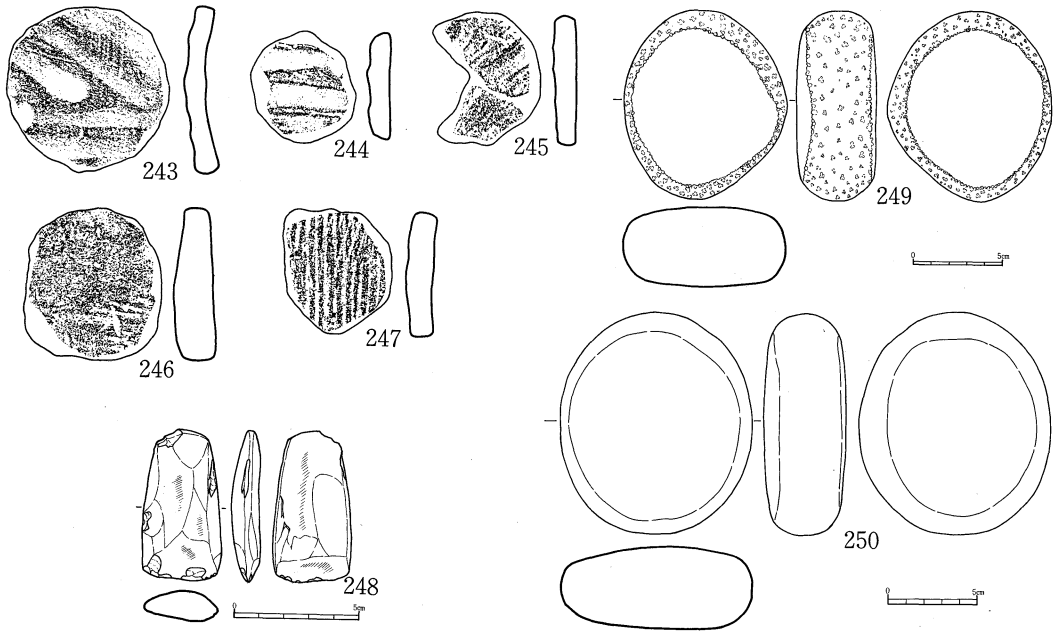
211～217は，指頭大の太形凹線文土器である。口縁部は若干波状を呈し，口唇部は内傾する平担面をもつが，213，214のように，押圧状の刻目をもつものでもる。直線文，曲線文で



第２６図　第５Ａトレンチ出土土器



第２７図　第５Ａトレンチ出土土器



第２８図　第５Ａトレンチ出土遺物

力量のある文様を描く。217のように，凹線文の途中に押圧のアクセントをつける。また，外面の凹線文の反作用で，内面には凹凸が確認される。色調は赤褐色を呈し，長石，石英，曇母を含む。

218～228は，細形の凹線文土器である。口縁部は，平縁口縁と波状口縁のものがある。218や223のように，口唇部に刻目を入れるものや口縁端部に刺突文を施すものや，単線文（220，225）を施すものがある。色調の暗褐色で長石，石英粒を含む。

229～231は，口縁部が肥厚し内弯する口縁部をもつ器形であり，櫛状施文具で3～4条の沈線を施すものである。色調は，黄褐色を呈する。

232は，擬縄文土器である。233は，口唇部平担面に凹線文を巡らすものである。いずれも研磨状のナデ整形で精緻である。

234は，無文土器である。口縁部は直口し，口唇部は内外に拡張し内傾する。

235は，口縁部の突起の一部で粘土ひもを絢って文様効果を高めている。

底部は，上げ底と平底が出土している。平底には，網代底が確認される。

2）土製加工品　（第28図）

土製加工品は，5個出土した。

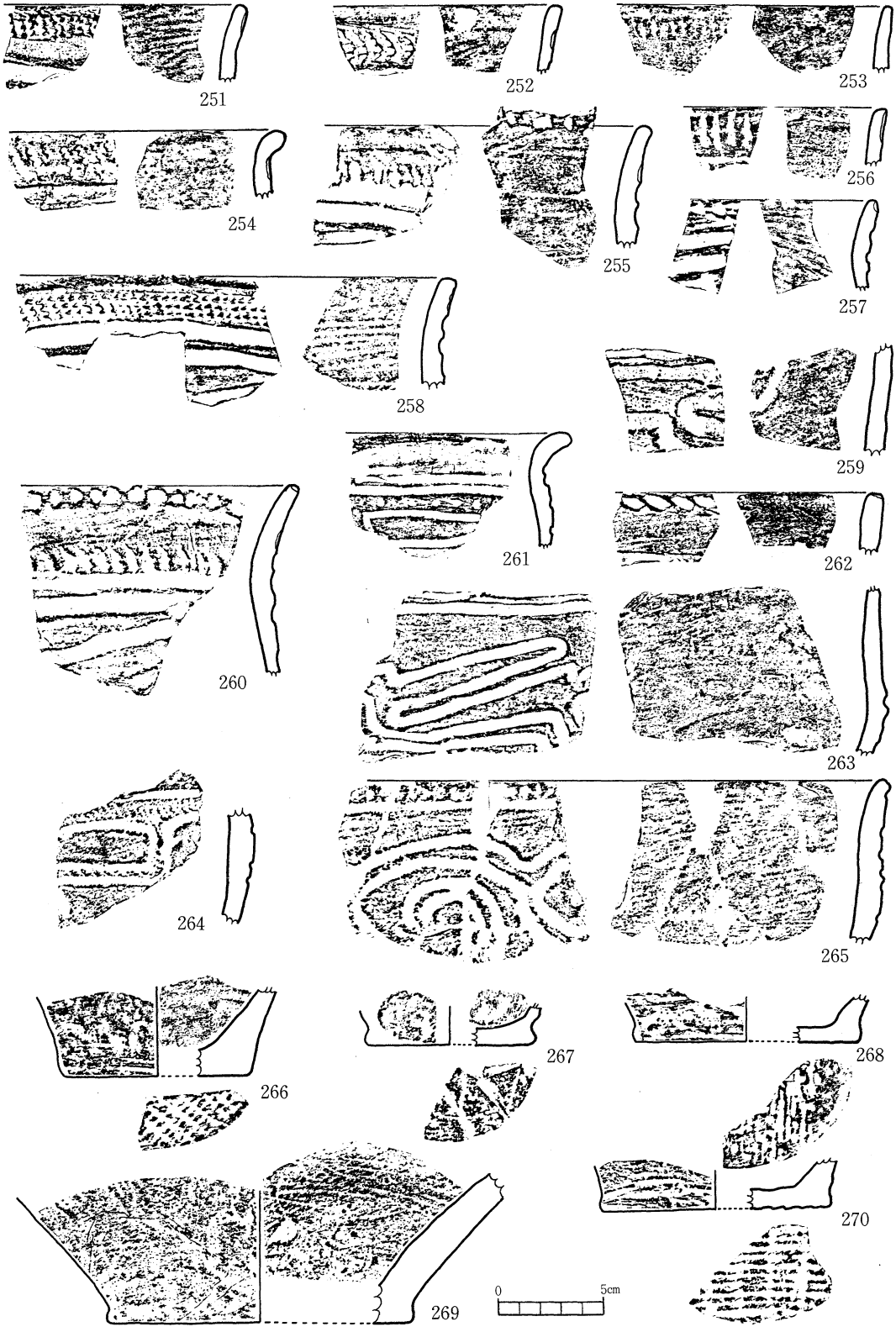
248は，直径8cmの大型の円板で，円板の周囲もきれいに面取りされた真円形のものである。

243，244は，指頭大の凹線文土器の破片を使用している。他は無文である。

3）石器　（第28図）

石器は，石斧と磨石2個が出土した。

248は，完形の石斧で長さ7cm刃部幅3cmを計る。やや刃部はノミ状に研磨され，器面も全



第２９図　第５Ｂトレンチ出土土器

体に研磨して整形している。

249と250は，磨石である。いずれも砂岩である。249は，側面全体に敲打痕が確認される。

第5Bトレンチ出土の遺物

第5Bトレンチからは，土器が出土している。

1）土器　（第29図）

251～258は，口縁部に貝殻刺突文を巡らし，その下位に凹線を施文する土器である。太形の凹線文と細形の凹線文がある。259は，その胴部破片である。255は，口唇部に刻目文が施文されている。色調は，全体に茶褐色であり，長石，石英粒を胎土に含む。

260は，頸部に貝殻刺突文を施し，口唇部にはヘラ状の施具で刻目文を施文している。上記土器と関連するものであろう。

261は，2本平行線の凹線文間に連点刺突文が施文されるものである。

263は，2本凹線文の胴部である。鉤手状のつなぎ文もみられる。

264は，擬似縄文土器である。

265は，口縁端部に刻目文を施し，胴部には2本平行凹線文で大きな渦文を描いている。

266～270は，底部片である。網代底と木葉底（267）がみられる。

第7節　第6トレンチ　（第30図）

第6トレンチは，第5トレンチの西側17mに設定した。南側のトレンチは，農道南側が急傾斜のため設定することができず，北側にだけ設定した。

第6トレンチは，南北に5m，東西に1.5mの長方形のトレンチである。

表層は，60cm程度の厚さの造成土である。その下面には，約1m程度の旧表土が存在している。これは，Ⅱ層黒色有幾土層の2次堆積層でもある。

Ⅱ層の黒色有幾土層は，約30cm～50cmの厚さで残存している。

その下層には，明褐色の新しい遺物包含層が確認された。20cmから厚いところで50cmを計るが，トレンチの中央付近では，Ⅱ層によって切られている。これまでのⅢ層に対比されるものである。

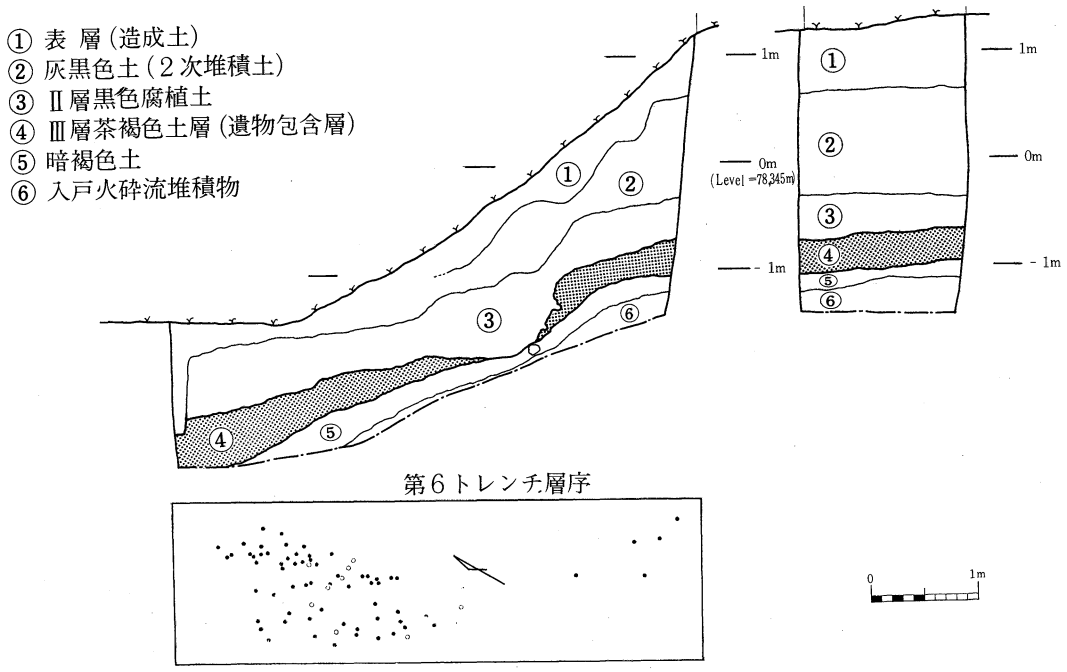
その下面には，暗褐色土層が堆積している。この層には遺物は含まれない。さらに下面は，入戸火砕流堆積物が礫を混じて2次堆積し，基盤層の入戸火砕流堆積物へ続いている。

第6トレンチ出土の遺物　（第31図）

第6トレンチからは土器が出土している。第6トレンチ出土の土器は，胎土，焼成，文様などから同一型式のものと把握される。

271，272，276，280で，この型態の器形が把握される。底部は細長く立ち上り，整形も良好である。大きく外反して胴部にいたり，胴部中央で若干ふくらむ傾向をみせる。頸部付近でわずかに屈曲して外反しながら口縁部で内弯し，口唇部は平担に終る。口縁部は，若干肥厚するという特徴がみられる。文様は，内弯気味の口縁外側に施される。

文様は，それぞれ異っている。



第３０図　第６トレンチ土層断面図・平面図

271は，ヘラ施文具で鋸歯文を口縁部上，下から交互に描く。鋸歯文の中は，ヘラ沈線で格子を描き鋸歯文を埋めている。文様は，5*cm*程度空間をもってさらに始まるようである。内外面とも条痕地文を消したナデ状のていねいな整形である。色調は黒褐色で，胎土には石英，長石粒が含まれる。

272は，ヘラ状施文具を若干斜めにして施文し沈線の幅を広くみせている。2本線で山形の鋸歯文を大きく描き，その鋸歯文の中は，直線と小さな鋸歯文をくり返した線で菱形文を描いて埋める。鋸歯文と鋸歯文の間もこれで埋めている。色調は褐色で，胎土には長石・石英粒などが含まれる。整形は，ナデ状のていねいな調整がみられる。

273や275は，櫛状施文具で櫛描文を施している。

277は，頸部で大きく外反し，口縁部で垂直に立ち上がる器形の不明な口縁部である。

第８節　第７トレンチ　（第32図）

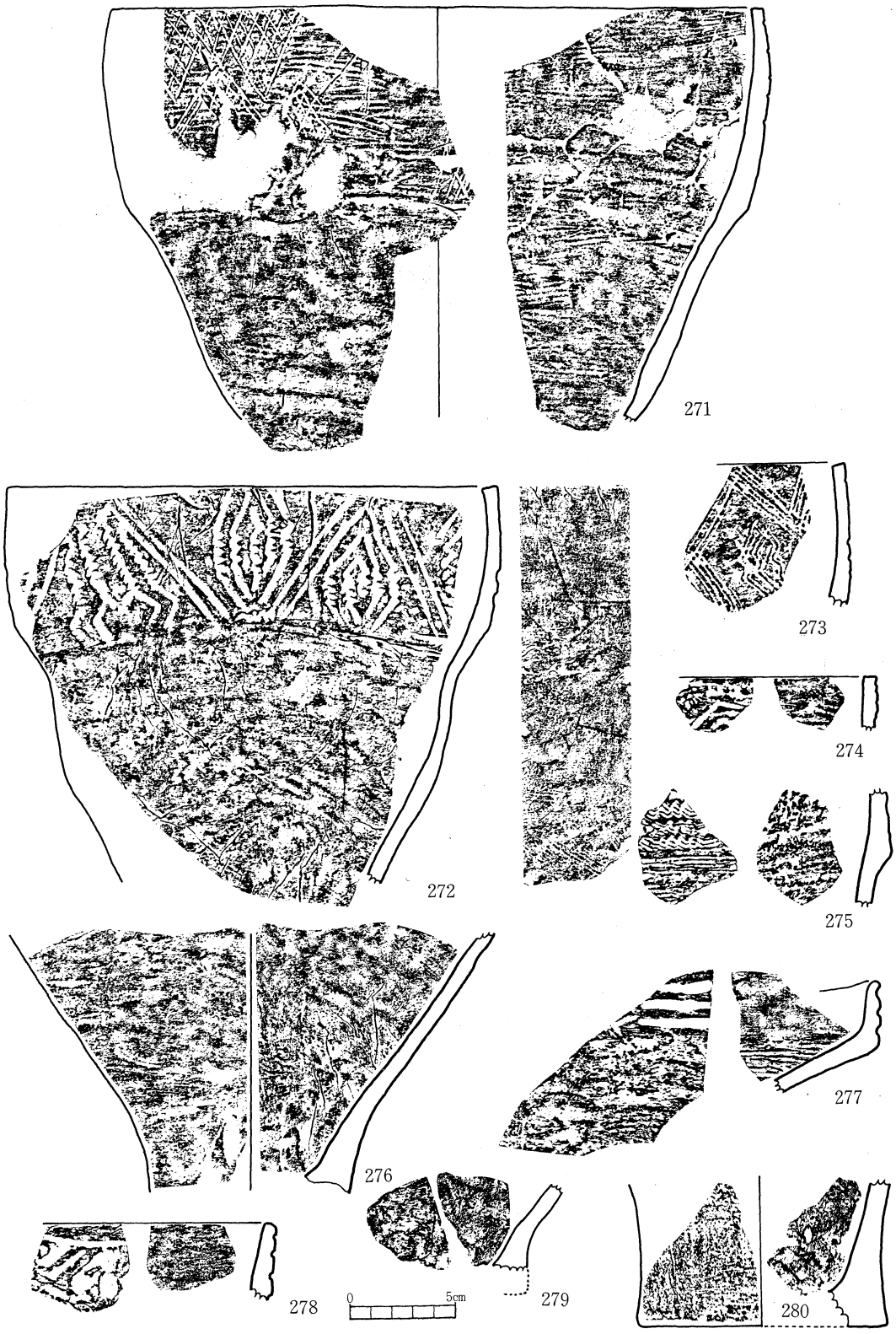
第７トレンチは，第６トレンチから西へ24*m*のところに設定した。これは，遺跡の西側の範囲を確認する目的であった。ここも，第６トレンチと同じく農道の南側は傾斜面であり，トレンチは設定することはできなかった。

トレンチは，農道の北側に，南北3.3 *m*，東西1.5 *m*を設定した。

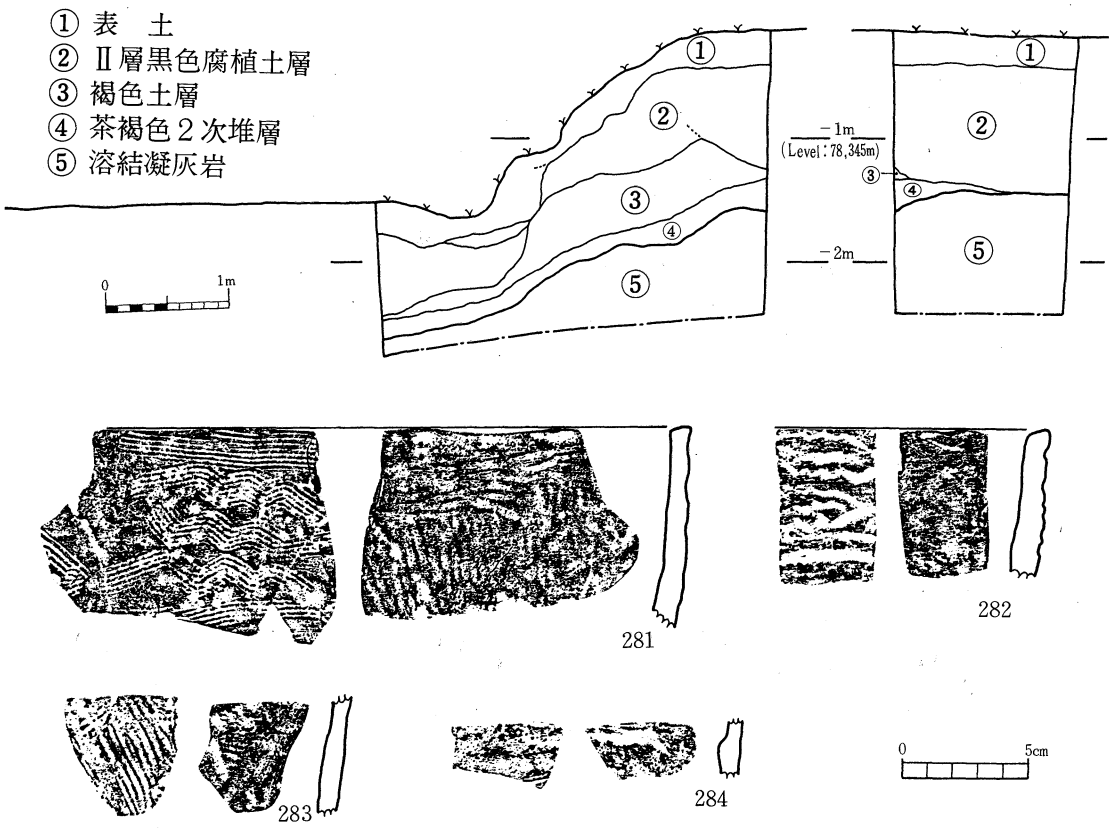
表土は，約25*cm*の厚さで，平担面は耕作土である。

Ⅱ層は，黒色土である。その下面には，旧道の肩の部分が確認される。その下には褐色土層がみられる。層の形状からは，2次堆積層である。

さらに，その下は茶褐色の堆積層がみられ，基盤層の溶結擬灰岩へ続く。基盤層の溶結擬灰岩は，この第７トレンチで初めて確認された。



第３１図　第６Ａトレンチ出土土器



第３３図　第７トレンチ出土土器

第７トレンチ出土の遺物

第７トレンチの遺物は，土器片が４点出土した。いずれも第６トレンチのものと同類である。褐色土層の上面から出土している。

1）土器　（第33図）

281は，内弯気味の口縁部で，口唇部は内傾した平担面をもつ。文様は，櫛描文で波状文を描いている。

282は，第６トレンチ出土の272と同じように，ヘラ施文具で直線と小さな鋸歯文を組み合せた文様である。

283は，若干太い櫛描文が確認される。

第9節　小　　結

倉園A遺跡は，昭和３９年に倉橋常雄氏の畑地造成工事によって多数の土器片や石器が発見され，その後，昭和４１年の豪雨による崖崩壊で多量の遺物が発見され指宿式土器を主体とする縄文後期の周知の遺跡である。今回の調査は，遺跡の発見された上段の畑地と崖下の中傾斜面に階段状につけられた農道部分にあたり，遺物包含層の存在は最初から想定された。階段状の傾斜面部分の農道拡張工事に伴う確認調査であり，調査範囲も限定される困難な調査であった。調査の結果，狭い調査範囲と急傾斜地に立地するところから遺構は検出されなかったが，1.5mにも及ぶ厚い包含層が残存し多数の遺物が発見された。今回出土の遺物には，これまでの採集遺物と比較すると新知見も多くみられる。ここでは，出土遺物をまとめ小結としたい。

遺物は，7トレンチ（以下T）１１ケ所のうち１０ケ所から出土している。

各T出土の土器は，Tごと説明したが，各T内には異った型式が存在するようである。これらの土器型式を整理し，倉園A遺跡の土器型式のありかたをまとめてみたい。

今回出土の土器の口縁部を中心とした主文様の特徴を整理すると下表のような型態に分れる。大きく分けると凹線文系（A～P類），磨消縄文系（R～T類），櫛描文系（U・V類）となる。この中では，凹線文系に他の要素を加えたバリエーションが最も多い。

凹線文には，太形（0.8～1.2㎝大の指頭大）と細形（0.6㎝以下）と細形の２本平行線文の３種類に他の要素が加わって一つの型態を作っている。

A類は，太形凹線文だけの施文で凹線間の無文部に地文の条痕調整が文様を意匠して荒く残されている。口縁部の型態は，１３７や２１１などのように内傾する平担な口唇部をもち，ゆるやかな波状口縁を呈している。凹線文は途中で押圧のアクセントをつけた力量のあるもので裏面にも凹線文の反作用の凹凸がみられる。B類は，A類の口唇部に押圧状の太めの刻目と凹点文が加わったもので，A類のバリエーションと把握すべきであろう。この太形凹線文は，中九州の阿高式土器（中期）に源流が求められるが，滑石粒を含まず条痕地文を施すのが特徴である。志布志町宮ノ前遺跡①や末吉町宮之迫遺跡②に類例がある。

C～G類は，細形凹線文で幾何学文様を描くものに他の文様要素が加わるものである。口縁部に凹点文（C類）や口唇部から口縁端部に刺突文（D～F類）を施すものでB類に帰属することが考えられるが，C類やF類の２１８・２２３は岩崎式土器③に酷似するものである。細片のため平口縁を呈するが，２２７のような小さな隆起部や波状口縁を呈することが考られる。

H～K類は，２本平行の細形凹線文で構成するものであり，口唇部や口縁端部にヘラおよび棒状の施文具で連続刺突文を施すものである。従来，２本平行線文は指宿式土器の主文様でありこれに帰属するものと考えられる。J類は，肥厚した口縁部が山形の波状をなし，口縁部に刺突文を施す特異なものである。L・M類は細片のため胴部文様は不明であるが，口唇部に凹線文を巡らすこのタイプは本遺跡採集品④や志布志町中原遺跡⑤で大量に出土し指宿式の範ちゅうに属することが考えられる。

次に，N～P類のように，貝殻連続刺突文と凹線文を組み合せた文様パターンがある。N類

は，口縁部に貝殻刺突文を巡らせ胴部に指頭大の凹線文を施すものである。凹線文は，３４のように凹線間の幅（無文帯）は狭く，曲線などを加えて密に施文している。Ａ類に酷似する凹線であるが，凹線文間の幅は狭く器面調整も条痕をナデ消したていねいな仕上げで相違点が多い。Ａ類と同じく阿高式に源流が求められるが，Ａ類とは別系統に属することが考えられる。中原遺跡に多量に出土（中原ⅡＡ類）している。Ｏ類は，貝殻刺突文と細形凹線文の組み合せでありＮ類の発展過程が看取される。内面に若干条痕調整を残すものもあるが，ていねいな仕上げがみられる。Ｐ類は，貝殻連続刺突文に２本平行凹線文を施すものである。

Ｑ類は，平な凸帯文上に貝殻連続刺突文を施す胴部細片であるが，上屋久町一湊松山遺跡[6]に細片がみられるほかは類例がなく器形は不明である。

Ｒ類は，磨消縄文土器である。凹線文間や口縁端部に縄文が施されるもので４つのトレンチから出土している。いずれもシャープな凹線文であり，後期初頭に属する。

Ｓ，Ｔ類はいわゆる擬似縄文であるが，Ｓ類は幅広い不規則な凹線文間を貝殻刺突文で埋めるものであり，Ｔ類は幅狭な２本平行凹線文間に貝殻刺突文を施すものである。Ｓ類には８０のように棒状の刺突文を施すものもあり，Ｔ類とは系統および時期の違いが考えられる。

Ｕ・Ｖ類は，口縁部の文様帯が若干肥厚し内弯して終る独得の器形を呈する。櫛描文やヘラ描文で鋸歯文を基本とする文様を描く。宮崎県串間市大平遺跡出土の大平式に属するものである[7]。

以上，各トレンチ出土の型態上の特徴を類別したが，その結果と問題点を整理してみたい。

今回出土の土器型式で，Ａ・Ｂ類とＮ類の２系統の土器は中期後半の最も古い時期に位置づけられる。いずれも，胎土や器面調整に在地性がみられるが，阿高式の太形凹線文の影響を残している。そして，両系統とも細形凹線文土器から２本平行線土器へと発展するようである。文様構成をみると細形凹線文に幾何学的文様がみられ，すでに磨消縄文の影響を受けていることが看取される。さらに，２本平行線文にいたっては磨消縄文のイメージがなければ成立しない文様構成となっている。指宿式土器の成立に，在地で発展した阿高系の土器と磨消縄文の伝播の影響が強く関係していることが感じられる。

今回の調査の成果の一つに多量の大平式土器の発見があげられる。大平式土器は，本県では横川町中尾田遺跡[8]の阿高式土器包含層から出土しているが，この系統の土器も阿高式土器の影響が考えられ，大平式土器の型態の把握に好資料となった。

その他，各型式の出土位置が，わずか３m隔てた傾斜面上と下で異る結果が得られた。Ａ・Ｂ・Ｓ・Ｕ類は傾斜面上（ＡＴ）に，Ｋ・Ｎ・Ｏ・Ｐ類は傾斜面下（ＢＴ）から出土している。傾斜面の縦方向の出土位置が，土器型式の組み合せに関係があるのが興味深い。

その他の出土遺物では，狭い範囲のトレンチ調査ではあるが多くの土製加工品（メンコ）と大型の石皿の出土が特徴的である。そのほか，石斧・石鏃・石錘の出土もみられたが，傾斜地に所在する包含層で限られた面積の調査であり，土器型式との関係，時期の問題などその実態を把握することは困難であった。

倉園A遺跡出土土器細分表

類	主文様と他文様の組合せ	2AT	2BT	3AT	3BT	4AT	4BT	5AT	5BT	6 T	7 T	類似型式
A	太形凹線文＋条痕（地文）					137		211.212				宮ノ前タイプ
B	口唇部押圧文＋凹点文＋太形凹線文＋条痕（地文）			72		138.139	179	213.214				宮ノ前タイプ
C	凹点文＋細形凹線文＋条痕（地文）	9			105	140						岩崎下層式
D	ヘラ刺突文＋細形凹線文							227				
E	連点刺突文＋細形凹線文	11	37		95	149						
F	口唇部刻目＋細形凹線文		39					218.223				岩崎下層式
G	細形凹線文	14										
H	ヘラ刺突文＋2本平行線文		47						265			指宿式土器
I	連点刺突文＋2本平行線文							222	261			指宿式土器
J	山形肥厚口縁＋刺突文＋2本平行線文					155.156						指宿式土器
K	2本平行線文				106		189.196					指宿式土器
L	口唇部凹線文＋肥厚口縁					168						指宿式土器
M	口唇部凹線文	1	58					233				指宿式土器
N	貝殻刺突文＋太形凹線文		31.35				182.184		251.255			中原Ⅲ A類
O	貝殻刺突文＋細形凹線文		36.40	91	99		185					中原Ⅲ B類
P	貝殻刺突文＋2本平行線文	21.22	38.45				188		258			中原Ⅲ C類
Q	凸帯文＋貝殻刺突文	19.20				167						一湊松山第9類
R	磨消縄文	17.18	55		111.112	169						後期初頭
S	擬似縄文A			76.78		157						陵系統(?)
T	擬似縄文B		55.57		110	171	193.194	232	264			後期初頭
U	櫛描文		53	86.87		159.160		229.231		273.275	281.283	大平式土器
V	ヘラ描文			83						271.272	282	大平式土器
W	凹線文									277		大平式土器
X	無文		52			165		234				

引用文献

①酒匂義明　1975　宮ノ前遺跡・志布志町文化財発堀調査報告書

②長野真一・井ノ上秀文　1981　宮之迫遺跡・末吉町文化財調査報告書

③河口貞徳　1953　南九州における縄文文化の研究，鹿児島県考古学会紀要第3号

④瀬戸口　望　1974　倉園遺跡採集の指宿式土器と其の他について，鹿児島考古第10号

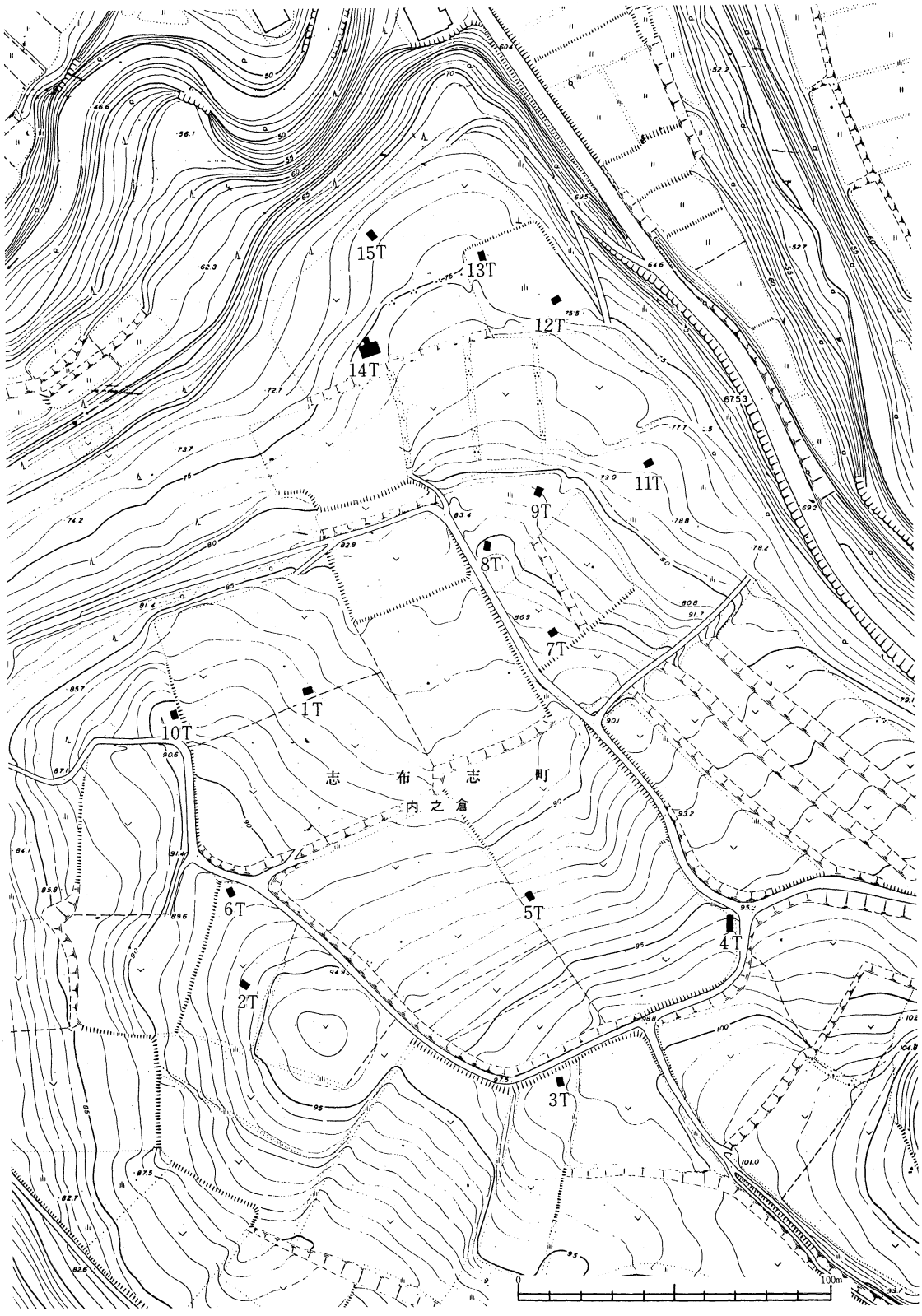
⑤昭和59年度発堀調査

⑥出口　浩・繁昌正幸　1981　一湊松山遺跡　上屋久町埋蔵文化財発堀調査報告書

⑦茂山　護　1957　串間市大平出土の縄文式土器　九州考古学　1

⑧新東晃一・井ノ上秀文　1981　中尾田遺跡　鹿児島県埋蔵文化財発堀調査報告書(15)

土　光　遺　跡



第３５図　土光遺跡トレンチ配置図

第Ⅳ章　土光遺跡

第１節　調査の概要

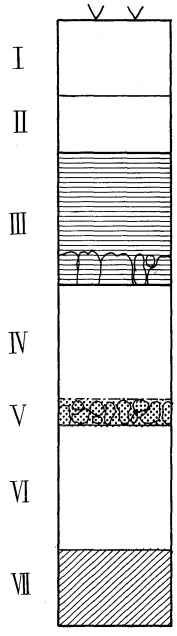
土光遺跡は北に向いた舌状台地に所在し，台地北半は，前川が西流し，台地をめぐるように南流している。台地の南側は標高約90m前後，北側は段差があり75m前後と標高差が明確で，南側から北に向かって傾斜している。北側平担地は土光Ａ遺跡，南側傾斜地を土光Ｂ遺跡として，以前から周知されているが，今回の確認調査では，両方まとめて土光遺跡として取り扱った。

試掘トレンチは２×３ｍの広さを基本とし，地形等を充分考慮して任意に設定した。調査は台地の南側から順次進め，次に北側の低い部分に移り，計15ヶ所の調査を行なった。

各トレンチの調査により，多くの遺物を検出することができた。遺物は，縄文時代早期から前期までの各種の土器片や，石鏃・磨石・石皿等の石器が出土した。また，溝状遺構をはじめ，焼土を伴なう性格不明の遺構も検出することができた。

第２節　土層

前川流域の各台地は，シラスが基盤となっており，火山灰等をはじめ各土層の堆積は極めて良好である。台地中央から，南側にかけて調査した各トレンチの土層を検討した結果，以下のような基本土層が設定された。



第３６図
土光遺跡基本土層図

Ⅰ層　暗褐色土層。耕作土であり，やわらかく粘性は少ない。

Ⅱ層　黒色土層。軟質で，Ⅰ層と比較して若干粘質である。

Ⅲ層　黄褐色火山灰層。鬼界カルデラ起源のもので，ＢＰ約6300年の噴出年代が知られている。上半は砂質で，下半はパミスがブロック状に推積している。通称赤ホヤと呼ばれている。

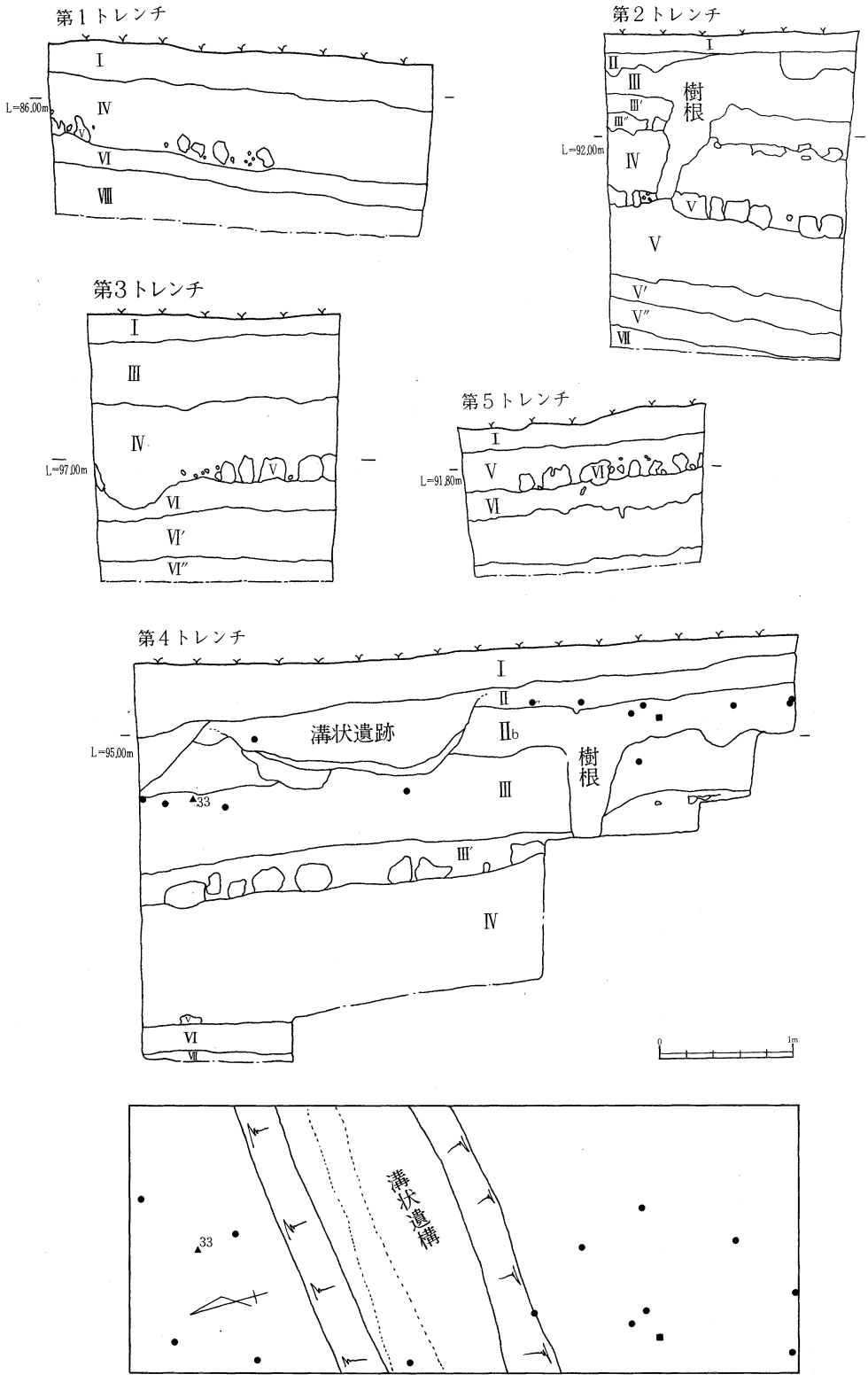
Ⅳ層　黒褐色粘質土層。軟く，粘質である。

Ⅴ層　黄褐色パミス層。ブロック状に薄く堆積している。明確な一枚の層とはならないが，ここでは層として取り扱った。「サツマ」と呼称され，ＢＰ約11000年の年代が知られている。

Ⅵ層　茶褐色土層。硬く，粘質である。チョコ層と呼ばれる。下半は，黄茶褐色を呈する場所もあり，二分も可能である。Ⅵｂとする。

Ⅶ層　黄褐色ヌレシラス。真正なシラスの最上部によく見られる。

上記のように，本遺跡の土層には，各遺跡間を比較しうる鍵層となる火山灰層が二枚存在している。



第37図　第1～5トレンチ平・断面図

第3節　各トレンチの調査

第1トレンチ

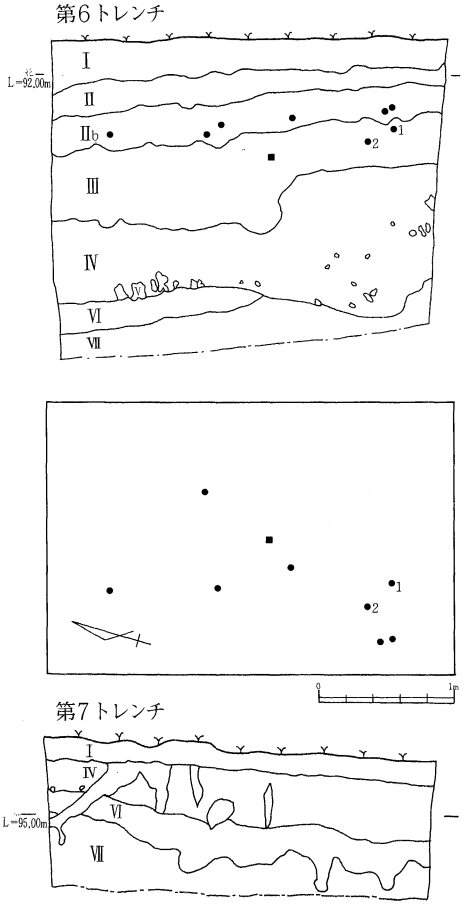
台地の中央に2×3 *m*で設定した。表層（耕作土）の下はⅣ層であり，それより上部は現存しない。削平等によると思われる。遺物は全く出土しなかった。

第2トレンチ

第1トレンチの南側で，以前小さな岡があった近くに設定した。南側にゆるく傾斜がある。土層は基本土層に近いが，Ⅵ層は色調により三分される。表層より磨製ノミ状石器（31）が出土した。蛇紋岩を石材とし，表裏側面とも入念に研磨されている。若干残存しているⅡ層から成川式土器が二点出土した。細片であるため器種は不明に近い。Ⅳ層からは石鏃（32）が1点出土した。先端部を欠損している。

第3トレンチ

調査したトレンチのなかでは最も標高が高い位置にある。Ⅱ層が欠除する。遺物は全く出土しなかった。



第38図　第6・7トレンチ平・断面図

第4トレンチ

台地の南東部に設定した。表層下に溝状遺構を検出したが，性格及び時期は不明である。遺物はⅡ層からⅢ層の上部にかけて出土した。成川式土器の壺形土器片が多かった。33はたんぱく石を素材とした石鏃である。

第5トレンチ

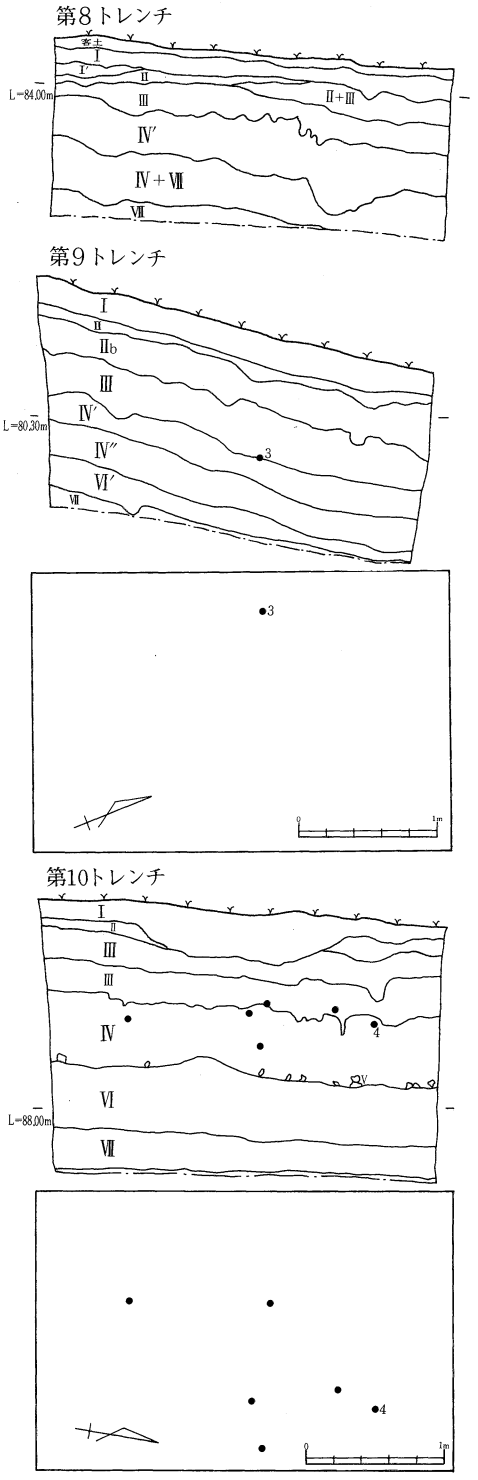
表層の下はⅤ層下半であり，その上部は削平されていた。遺物は出土しなかった。

第6トレンチ

第2トレンチのすぐ南側に設定した。表層の下はⅡ層が安定しており，少数の遺物が出土した。1は成川式土器の甕形土器である。2はⅢ層から出土したもので，表裏両面に貝殻による条痕文があり轟式土器と思われる。外面にはススが付着している。

第7トレンチ

東側に傾斜があり，台地上部平担地の東端に位置する。Ⅳ層上半から上部は削平により現存しない。またⅤ層は明確に認められなかった。遺物は検出されなかった。



第３９図　第８～１０トレンチ平・断面図

第８トレンチ

前トレンチの北側で傾斜面に設定した。傾斜地のため基本土層とは異なる。Ⅱ層黒色土層の下は通常の赤ホヤ層ではなく，二次堆積層と思われる。その下は，茶褐色土層であり，黒褐色粘質土層ではない。しかしながらⅥ層の茶褐色土層とは異なり，やはりⅣ層に対比されると思われる。

また，Ⅴ層及びⅥ層は存在しない。北側に流出したものと思われる。

遺物の出土はなかった。

第９トレンチ

第８トレンチの北東で，さらに傾斜がきびしい地点に設定した。

Ⅲ層は前トレンチと同様に流堆積と思われる。その下は暗褐色土層，そして暗褐色砂質土層となり，Ⅳ層に対比されよう。さらにまたその下は淡茶褐色砂質土層であるが，Ⅵ層に対比される。１点出土した３は，内外両面に貝殻条痕が施されている。口縁は小さい波状となり，貝殻腹縁による刺突文が端部に行なわれている。外面にはススが付着し，焼成はあまり良くない。

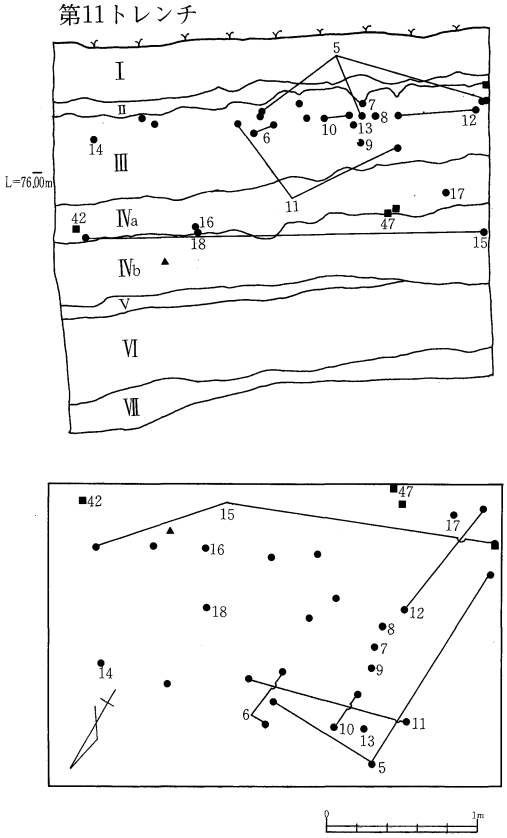
第10トレンチ

第１トレンチの西側で，北西にゆるやかに傾斜している地点に設定した。

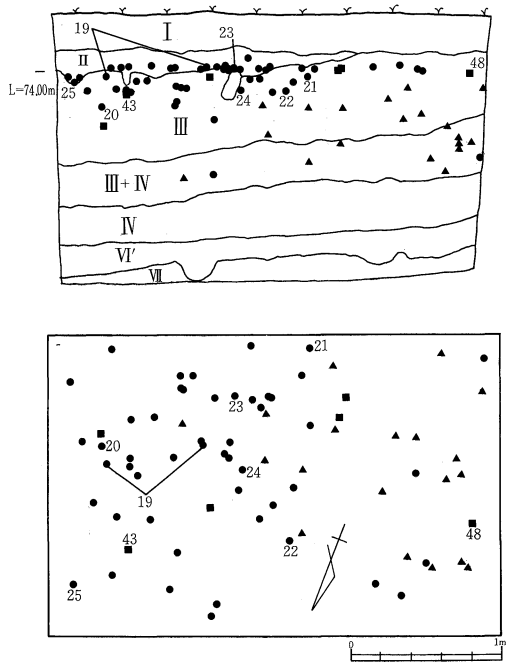
層序は基本土層とほぼ同じであり，各層の堆積状態も良好であった。

遺物は計６点出土し，全てⅣ層からの検出であった。しかしながら細片であるため，形式等は不明に近い。図示していないが，胎土に曇母を多く含み，焼成は良好である。唯一図示できたのは４であり，外面に隨円押型文がみられる。器形等は不明。

第11トレンチ



第12トレンチ



第４０図　第11・12トレンチ平・断面図

第11トレンチ

舌状台地の北側先端部に位置する低段平担部の南東部に設定した。第９トレンチの東下に位置する。層序は基本土層と同じである。遺物はⅢ層上半とⅣ層から出土した。５～14はⅢ層上半より出土したものである。口縁部は外反し，口縁直下に三条の突帯を付ける。胴部には，縦方向の連点文を施し，内面には条痕がみられる。また口唇部には貝殻腹縁の刺突による刻目を付している。さらに口唇部には随円形の張り付けがあり，木の実状のもので押したもの（５）や，貝殻復縁で刺突したもの（６）がある。また，口縁は山形の波状をなすもの（６）もある。外面にはススが付着したものが多い。

15～18及び42・47はⅣ層より出土したものである。15～18はいずれも胴部片であり，沈線と撚糸文によって文様が構成されている。15は撚糸文のかわりに貝殻復縁を押圧したものである。塞ノ神Ａ式と思われる。42は砂岩を利用した磨石で，片側先端に敲打痕が残る。47も砂岩を利用した石皿である。

なおⅢ層及びⅣ層において，各層のなかで土器片の接合がみられた。

第12トレンチ

前トレンチの北側に設定した。Ⅵ層は明確なチョコ層ではなく，礫混茶黒色であり，Ⅵ層に対比されるものである。また，Ⅲ・Ⅳ層も基本土層とは若干異なるように思われ，二次堆積の可能性が高い。

出土遺物は，今回の調査では最も多く，計75点を数える。Ⅱ層下面からⅢ層上半にかけて集中している。19は肥厚する口縁が，内湾しながら開いてキャリパー状になるもので，口縁部には鋭い沈線によって，山形の鋸歯文

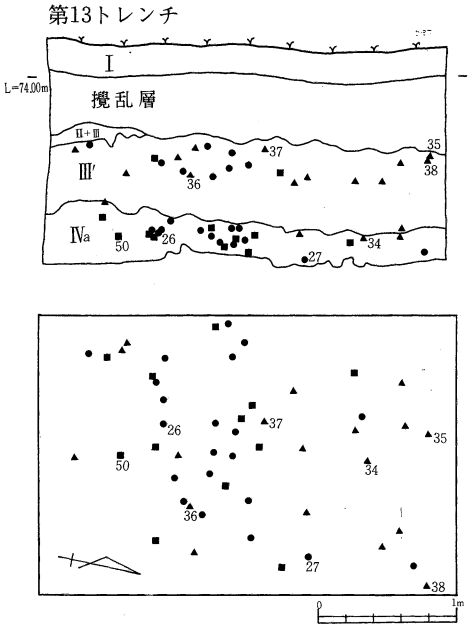
が施こされる。内面は条痕があり，外面にはススが付着している。胎土は砂粒を含む，焼成はあまり良くない。20は口縁部に，ヘラ状刺文具による直線文と鋸歯文が施こされる。内面は条痕があり，焼成は良好である。19・20は大平式土器と思われる。21は外面に貝殻条痕・内面にヘラ磨きが行なわれている。色調は黒褐色，焼成は良好である。22は内外面に貝殻条痕がありまた，外面には粘土紐を貼り付け，その上に貝殻腹縁による，刺突文が施されている。23は内外面とも貝殻条痕がみられ，口縁端部は平たい。外面にはススが付着している。24は突帯の下に，連点文が施されている。内面はヘラ磨き。25は深鉢の底部と思われ，裾部が広がり端部はとがり気味になる。

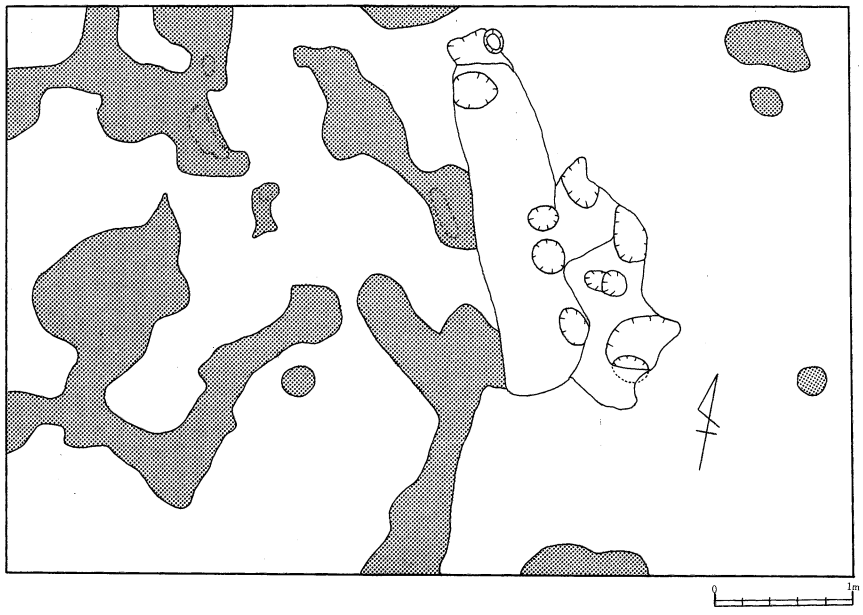
22は春日式土器と思われる。

43は縁辺に敲打痕が残る磨石であり，48は石皿である。両方とも砂岩を石材としている。

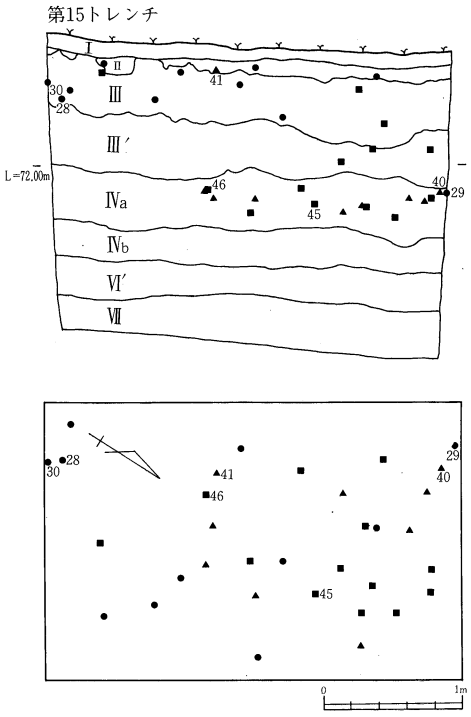
第13トレンチ

表土の下の造成土であった。計51点の遺物がⅢ層及びⅣ層から出土した。26はⅣ層からまとまって検出された。内外面とも条痕が残っているが，ナデによって消されている。





第４１図　第13・14トレンチ平・断面図



第４２図　第15トレンチ平・断面図

焼成はあまり良くない。

27は変形撚糸文が施こされている。胎土には砂粒のほか曇母が含まれ，焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。

Ⅲ層中からは５点の石鏃が出土した。34～36である。34は灰色の黒耀石，35はチャート他は黒色の黒耀石を石材としている。

49・50は砂岩を石材とした石皿である。

第14トレンチ

台地下段平担面の中央部に設定した。表土下のⅢ層赤ホヤ面で，黒褐色の落ち込み部分が確認されたため，広く拡張した。不定形の遺構はトレンチ全面に及び，赤褐色の焼土も局部的にみられた。トレンチ中央に，近代のイモ穴があり，この攪乱部を除却したところピット状の穴が検出された。また，その東側を一部掘り進めた結果，内部には多くの焼土が確認された。しかしながら，今回はトレンチ調査であるため，このまま残して埋めもどした。それ故，性格及び時期は不明である。またこの遺構の広がりも判明していない。

39はⅢ層上面から出土したものである。石材は黒耀石であり，両側縁は鋸歯状に仕上げられている。44は砂岩製の磨石である。

第15トレンチ

台地の末端に設定した。すぐ北側には急傾斜となって前川を臨む。土層は基本土層にほぼ近いものであるが，Ⅴ層サツマがなく，また，Ⅵ層は明確なチョコ層ではなく黒灰色を呈し，Ⅵ層相当のものと思われる等の違いがある。

遺物は計33点出土し，Ⅲ層付近には土器が，Ⅳ層には黒耀石片及び石皿・磨石片等が多く検出された。28は口縁端部の外側に刻み目を付したものであり，内外面ともに貝殻条痕が認められる。29は赤褐色を呈し，内外面には条痕が施されている。30は深鉢の底部と思われ，裾部が広がり端部の断面がほぼ垂直に切れるものである。

40は白色の黒耀石を利用したものであり，41は頁岩を使用し，剝片の形状をそのまま利用したものである。部分的に両側縁を加工し，基部の抉りは小さい。

45・46は砂岩を利用した磨石である。45は，一端に敲打痕が残る。

第4節　ま　と　め

土光遺跡が所在する台地は，標高の高いゆるやかな傾斜面・土光B遺跡と，それよりも低い平担面に所在する土光A遺跡とに分けられていたが，今回の調査で，単なる立地の違いのみでなく，内容的にも分けられることが理解された。

南側傾斜面は，その傾斜した地形のために，土部が削平されているところが少なくなく，若若残存したⅡ層には，わずかに成川式土器等が検出された。また，Ⅲ層及びⅣ層は堆積していても，遺物等の出土はほとんどみられなかった。現在地表面に散布している遺物はⅢ層より上部のものが削平等によって現われたものと思われる。

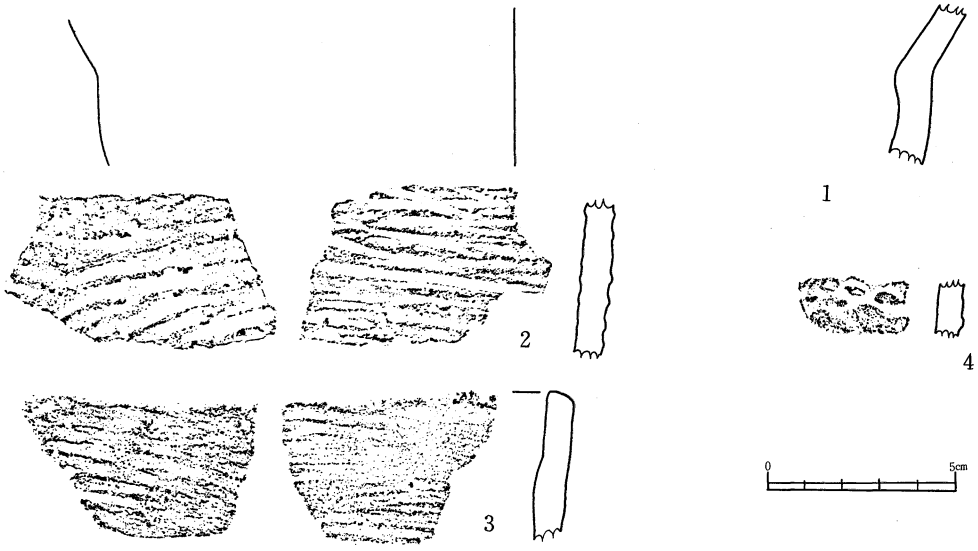
北側平担面はⅢ層以下の遺物が多く検出された。遺物包含層は，Ⅲ層及びⅣ層であり，二枚確認することができた。

Ⅲ層からは，多くの遺物が出土した。土器のなかには，轟式・春日式・大平式等の諸形式のものが確認された。さらに第11トレンチからは，同一形式と思われるものが，まとまって出土した。この土器の口縁部は外反し，口縁直下に三条の突帯を付し，突帯には貝殻腹縁による刺突が口縁方向から行なわれる。口唇部には隨円状の粘土を数ヶ所張り付け，その他の端部には貝殻腹縁の刺突による刻み目がみられる。波状口縁をなすものもある。胴部には隨円形の連点文が施されて，内面には条痕がみられる。この一群の土器に類似するものは，鎌石橋遺跡・野久尾遺跡・片野洞穴等に出土している。本遺跡出土のものも轟式系統のものであろうと思われる。（註1）

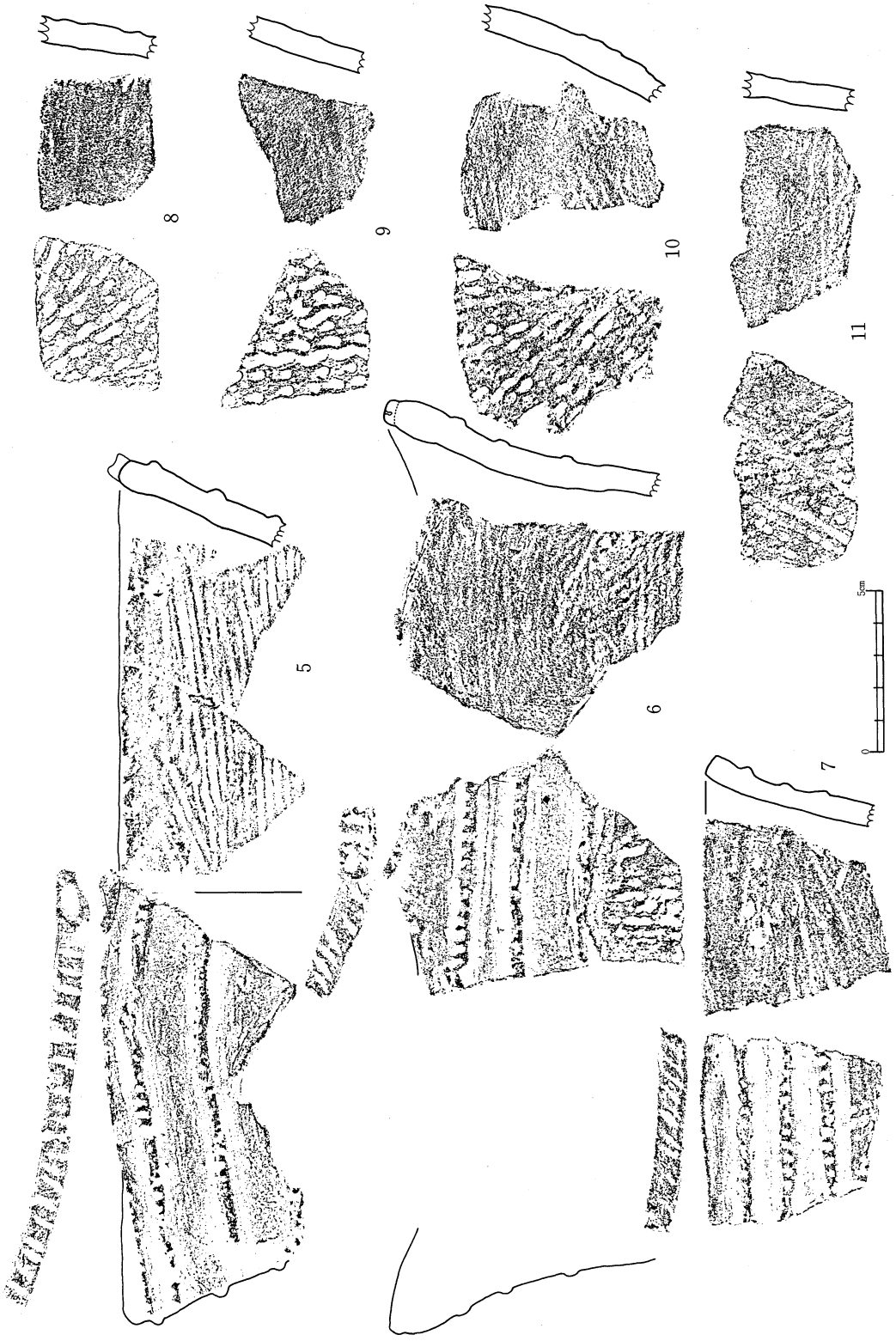
Ⅳ層から出土したものでは，塞ノ神A式土器のほか変形撚糸文が施こされた土器も，細片ではあるが確認された。

さらに石鏃をはじめ，磨石及び石皿も少なからず検出された。

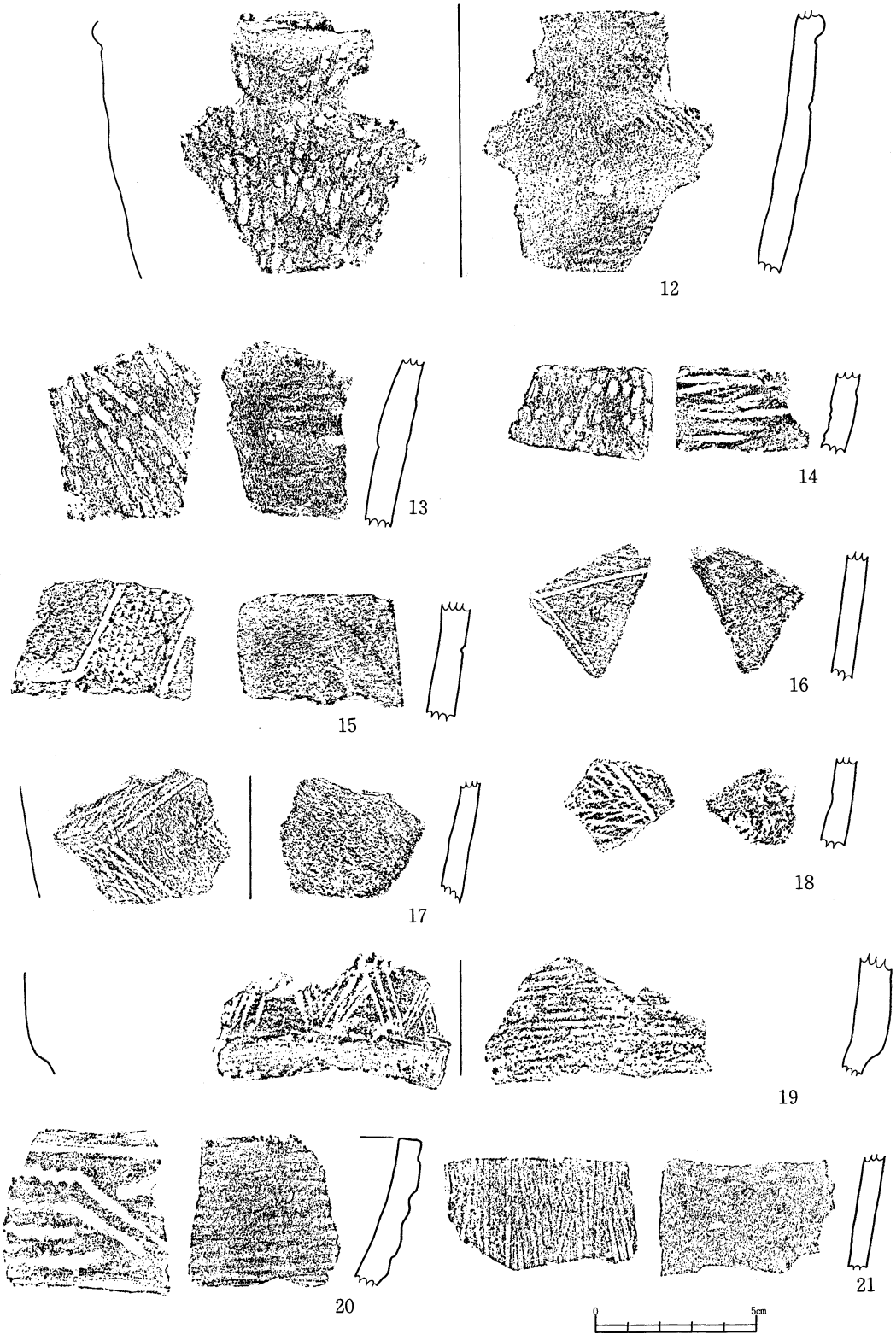
また，南側上部では溝状遺構が確認され，北側平担地の第14トレンチでは，焼土を伴なう性



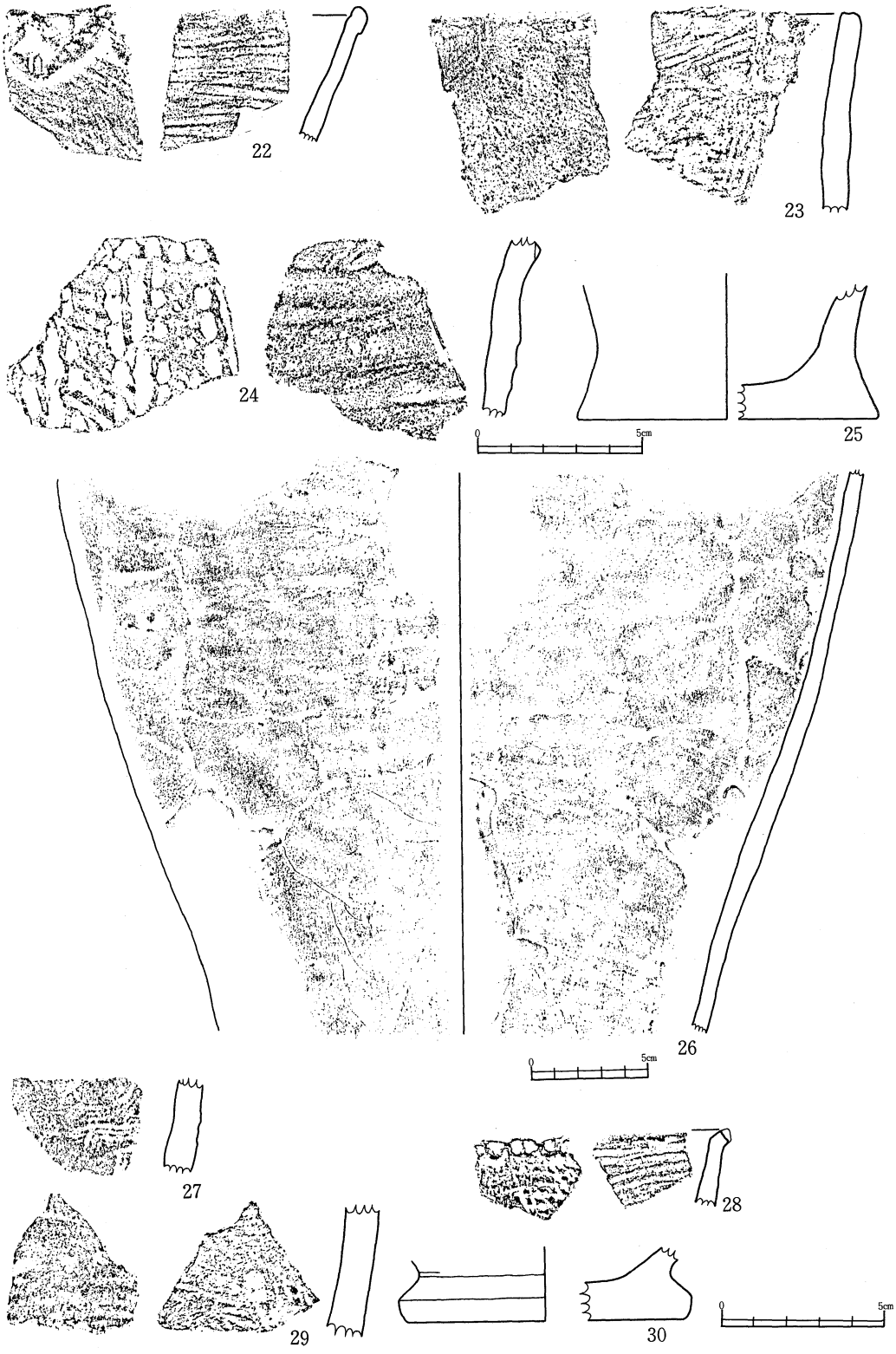
第43図　第6・9・10トレンチ出土土器



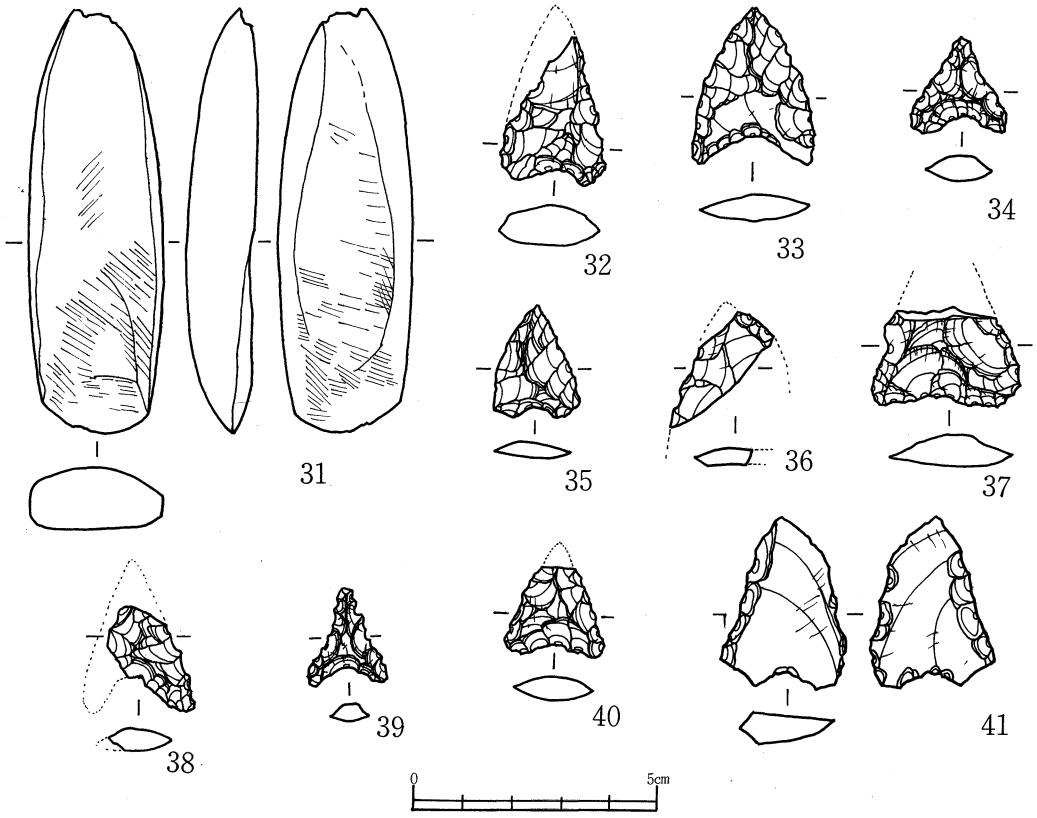
第４４図　第11トレンチ出土土器



第４５図　第11・12トレンチ出土土器



第４６図　第12～15トレンチ出土土器



第４７図　各トレンチ出土石鏃等

格不明の遺構が検出された。いずれも，性格・時期等は不明であった。

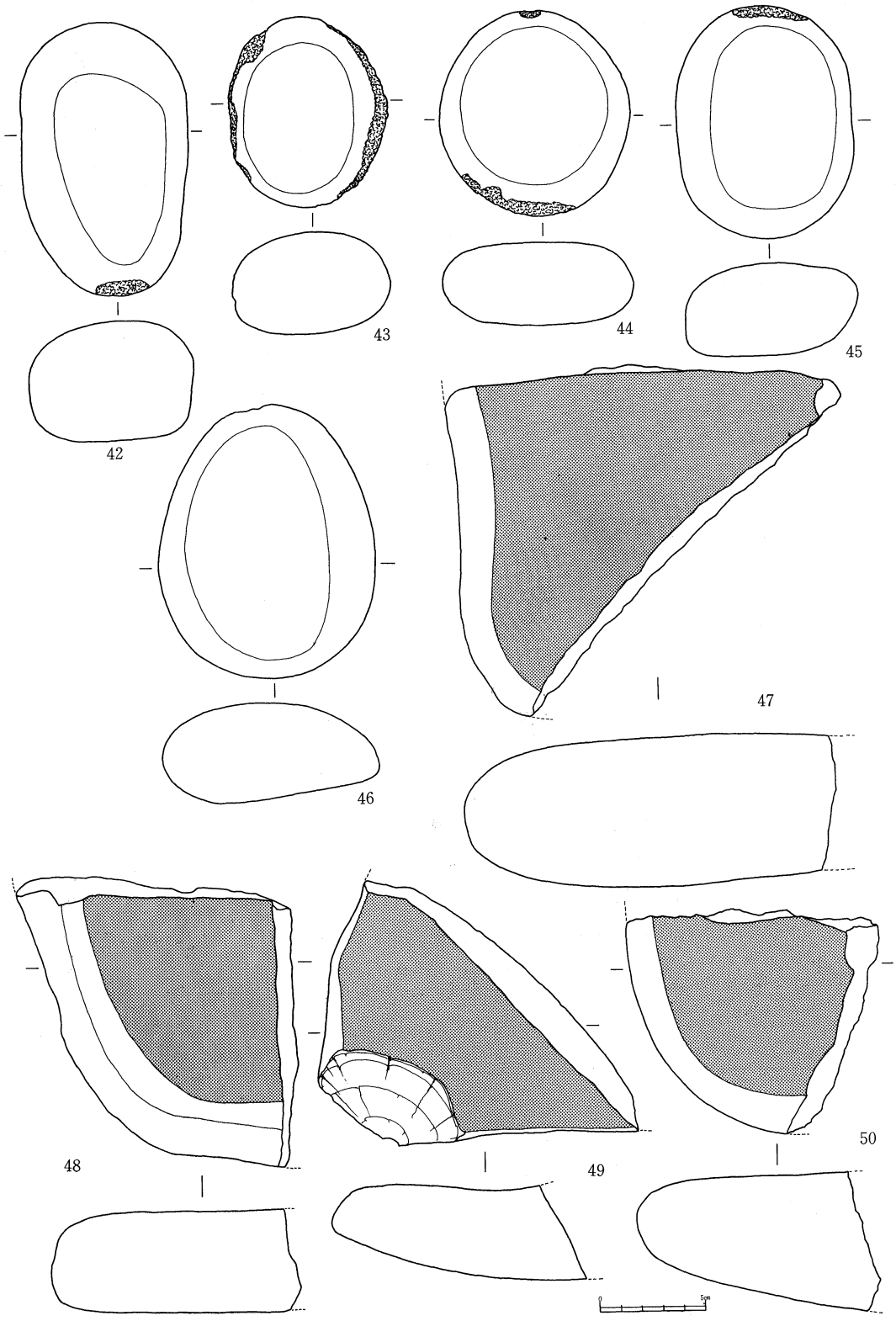
ところで，多くの遺物が出土したⅢ層内では，層中において接合が少なからず可能であった。このことは，その層は真正の堆積ではなく，二次的に移動したという見方が必要であろう。

今回の調査では，台地縁辺に位置する北側平担地に，縄文時代早期及び前期の包含層の存在が明確になり，土光遺跡の性格の一端を明らかにすることができたと思われる。

註(1)河口貞徳氏の御教示による

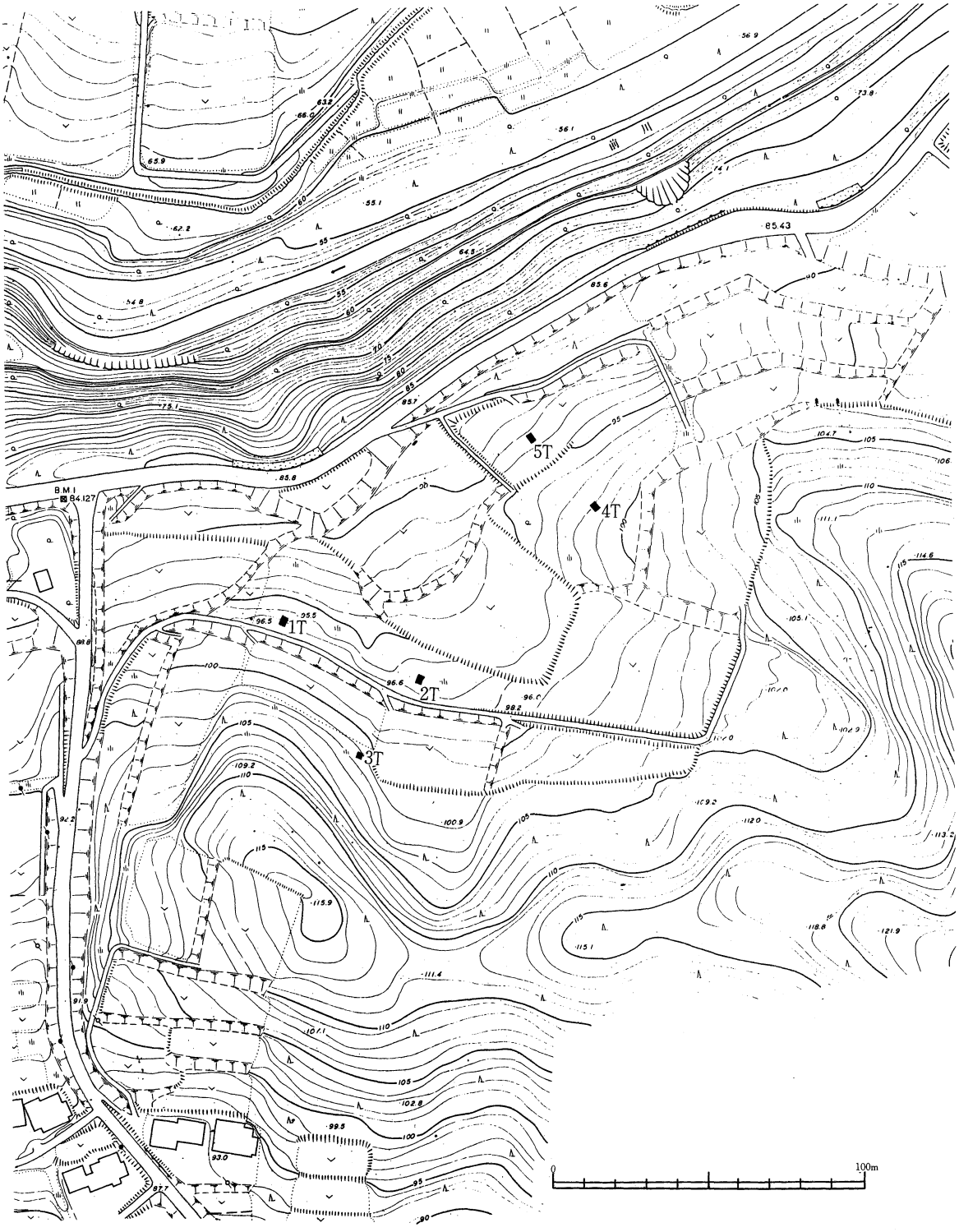
参考文献

河口貞徳ほか　１９８２「鎌石橋遺跡」鹿児島考古　第１６号
酒　匂　義　明　１９７９「野久尾遺跡」志布志町教育委員会
河　口　貞　徳　１９６７「片野洞穴」日本の洞穴遺跡　平凡社



第４８図　各トレンチ出土磨石・石皿

風　穴　遺　跡



第４９図　風穴遺跡トレンチ配置図

第Ⅴ章　風穴遺跡

第1節　調査の概要

風穴遺跡は土光遺跡の東側に所在し，前川に向かってゆるやかに傾斜する丘陵の末端に位置し，北側に前川を臨む。標高は約90～ 100 m あり，中央部は谷状になっている。

傾斜地であるため，東側は削平され，また，中央部は削平と盛土が行なわれている。今回は旧地形が残存し，削平が行なわれていない地点を選び，傾斜及び地形等を考慮して，任意のトレンチを計5本設定した。中央部は盛土が厚く行なわれており，また東側は既にシラス面まで削平されていたため，トレンチは設定しなかった。

調査の結果，良好な土層の堆積のなかに，小量ではあるが縄文時代早期の遺物を検出することができた。遺物には塞ノ神A式等の土器片や，磨石及び石皿が出土した。

第2節　層位

風穴遺跡の土層の堆積は，土光遺跡とほぼ同様であり，さわめて良好な堆積状態を示している。基本土層は次のようになる。

Ⅰ層　黒褐色土層。やわらかく粘性は少ない。

Ⅱ層　暗褐色土層。軟質である。

Ⅲ層　黄褐色火山灰層。径10mm前後の白色軽石が点している。下部には黄色パミスがブロック状に存在する。

Ⅳa層　乳白色粘質土層。やわらかく，粘性は強い。

Ⅳb層　黒褐色粘質土層。硬く，粘質である。

Ⅴ層　黄褐色パミス層。（サツマ）

Ⅵ層　茶褐色粘質土層。硬く，粘性は強い。

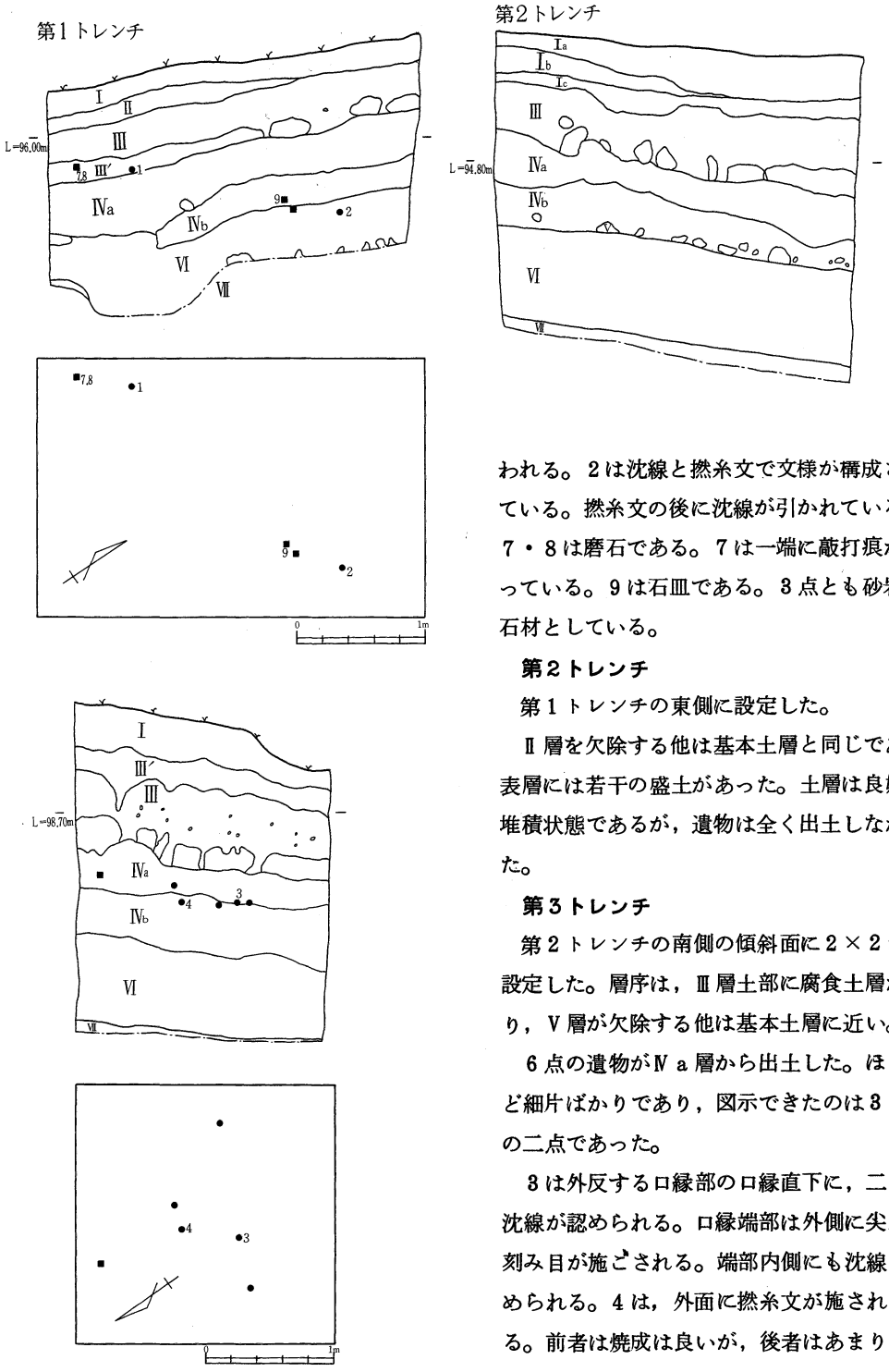
Ⅶ層　ヌレシラス。

第3節　各トレンチの調査

第1トレンチ

谷をはさんで西側の傾斜地に2×3 m の広さで設定した。土層はほぼ基本土層と同じであるが，Ⅴ層の黄褐色パミスは見えない。また，Ⅶ層ヌレシラス上面は部分的に落ち込み，それに伴い，Ⅳb層も部分的に切れている。

遺物はⅣa層を中心に出土している。傾斜地のため，断面図には正確に投影されていない。1の口縁部は，わずかに外反し，口縁端部は厚みをもって，断面形は丸に近い。外面は貝殻腹縁による，刺突文が施される。口唇部及び内部はヘラ磨きが行なわれている。色調は外面が赤褐色，内面が黒褐色を呈し，胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。石坂式系統の土器と思



第５０図　第１～３トレンチ平・断面図

われる。２は沈線と撚糸文で文様が構成されている。撚糸文の後に沈線が引かれている。７・８は磨石である。７は一端に敲打痕が残っている。９は石皿である。３点とも砂岩を石材としている。

第２トレンチ

第１トレンチの東側に設定した。

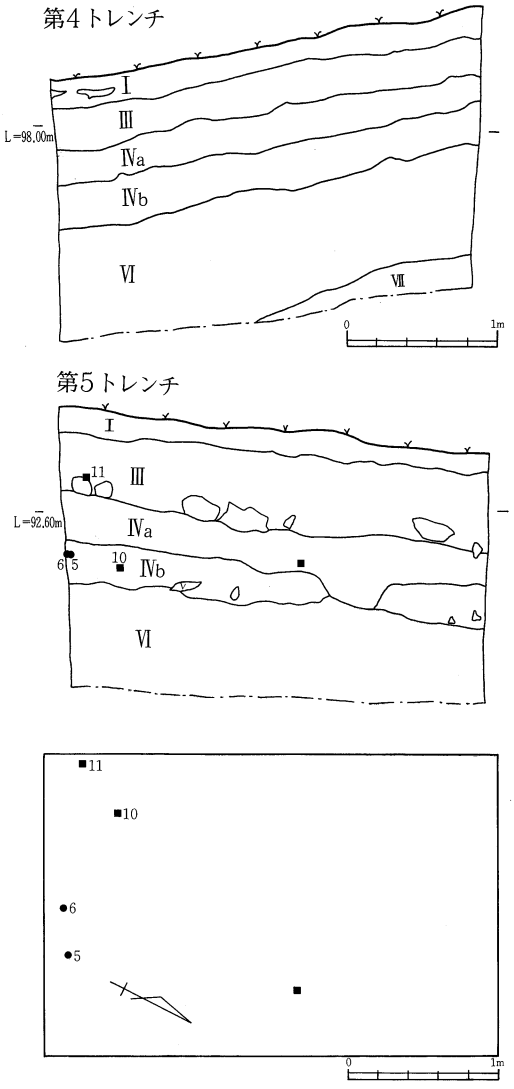
Ⅱ層を欠除する他は基本土層と同じである。表層には若干の盛土があった。土層は良好な堆積状態であるが，遺物は全く出土しなかった。

第３トレンチ

第２トレンチの南側の傾斜面に２×２ｍで設定した。層序は，Ⅲ層土部に腐食土層があり，Ⅴ層が欠除する他は基本土層に近い。

６点の遺物がⅣａ層から出土した。ほとんど細片ばかりであり，図示できたのは３・４の二点であった。

３は外反する口縁部の口縁直下に，二本の沈線が認められる。口縁端部は外側に尖がり，刻み目が施こされる。端部内側にも沈線が認められる。４は，外面に撚糸文が施されている。前者は焼成は良いが，後者はあまり良くない。



第５１図　第４・５トレンチ平・断面図

第４トレンチ

前トレンチと谷状の低地を挾んで対面の地点に設定した。北面部に強く傾斜している。層序はⅡ・Ⅴ層が欠除している。またⅢ層は通常の堆積ではなく，二次堆積と思われる。

遺物は全く出土しなかった。

第５トレンチ

前トレンチより標高が約６ｍ下がる。北にゆるやかに傾斜している。

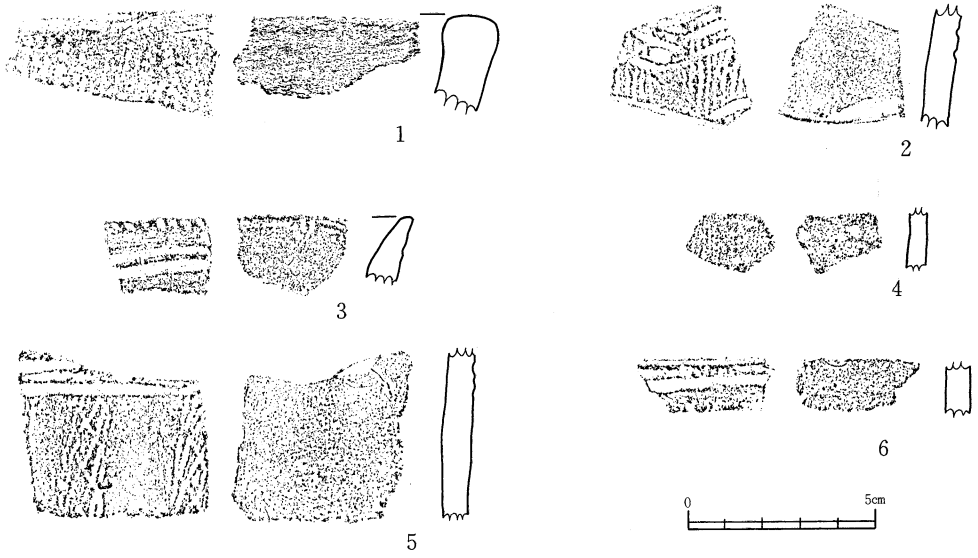
層序はⅡ層を欠くのみで，他は基本土層とほぼ同様である。

遺物はⅢ層から１点，他はⅣａ層から出土している。５は胴部に沈線がめぐり，その下部に間隔を置いて，撚糸文が縦に施される。６は沈線部分のみであるが同一個体と思われる。胎土に砂粒を多く含み，焼成は良い。この土器は塞ノ神Ａ式土器と思われる。10・11は砂岩製の磨石及び石皿片である。10は側面に敲打痕が残っている。11はⅢ層より出土した。

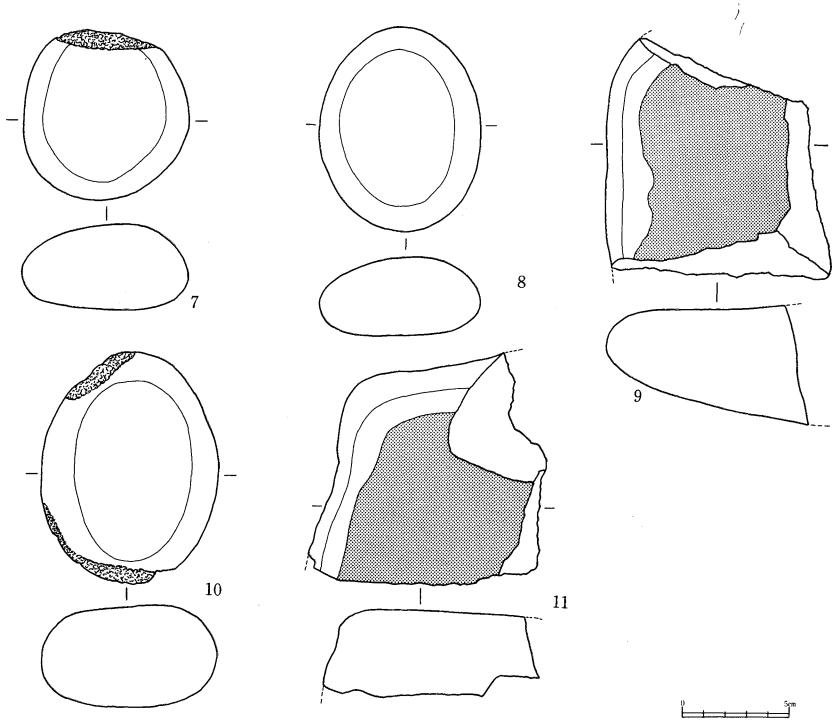
第４節　小　結

今回の調査により，風穴遺跡は縄文時代早期の遺跡であることが理解された。出土遺物は，赤ホヤ層の下位の層より検出され，塞ノ神Ａ式土器・石坂式系統土器が出土した。

また，石器では砂岩製の磨石及び石皿が出土した。しかし，遺物の量は多くなく，細片が多かった。



第５２図　風穴遺跡出土土器

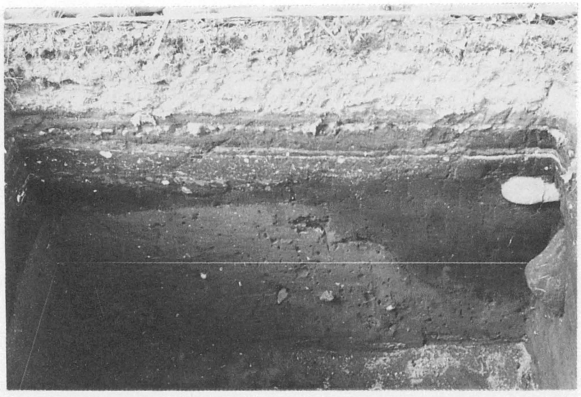


第５３図　風穴遺跡出土磨石・石皿

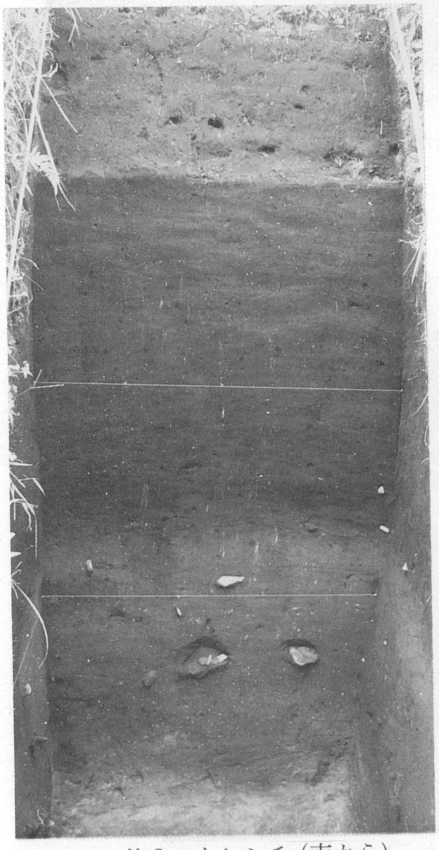
1．倉園Ａ遺跡遠景（南から）

2．倉園Ａ遺跡近景（南から）

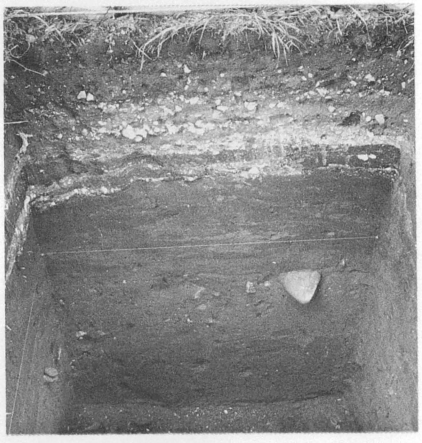
3．遺跡近景（西から）



1．第2Bトレンチ（南から）



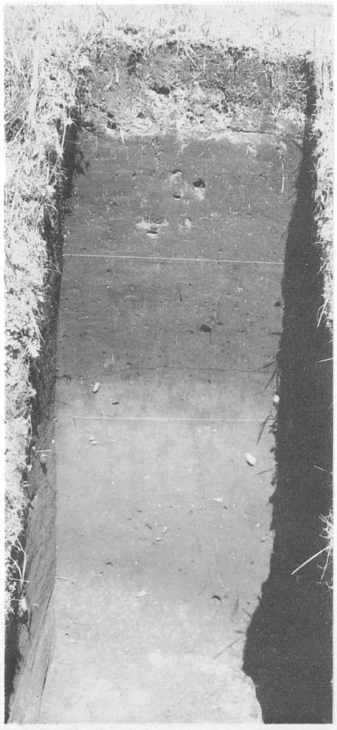
2．第3Aトレンチ（南から）



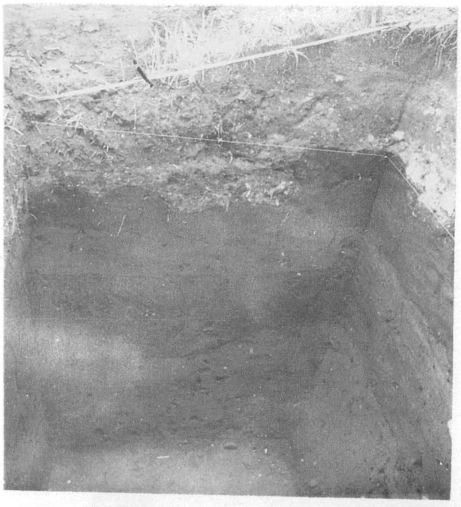
3．第3トレンチ（南から）

1．第3Aトレンチ（西から）

2．第4Bトレンチ（南から）

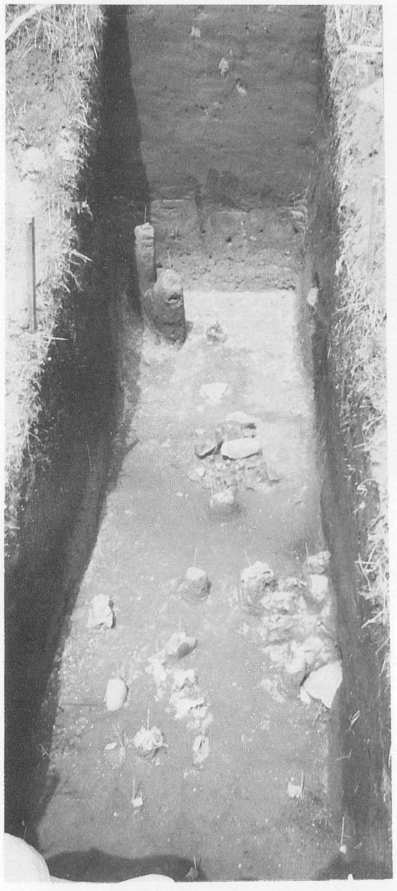


1．第5A トレンチ（南から）



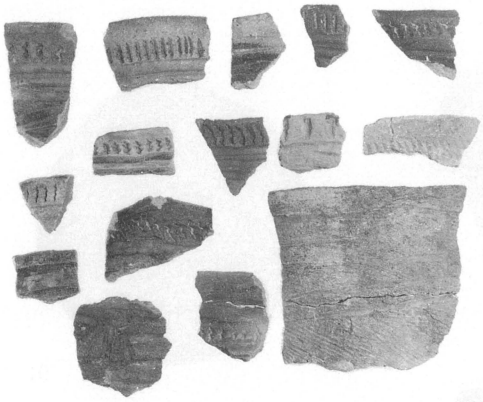
2．第5B トレンチ（西から）

3．第５Ｂトレンチ（南から）

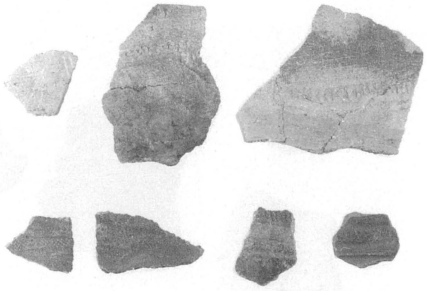


◀1．第6トレンチ(南から)

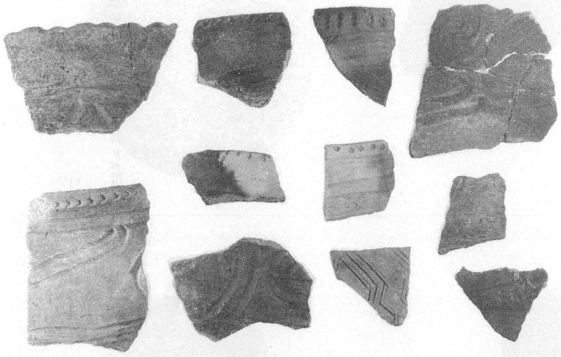
2．第7トレンチ（南から）▶



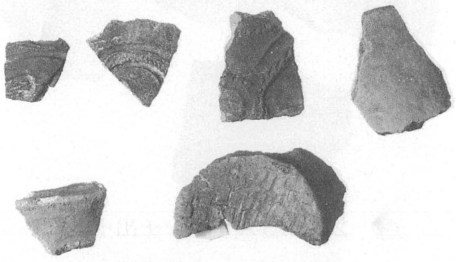
1．第２Ａトレンチ出土遺物



2．第２Ａトレンチ出土遺物

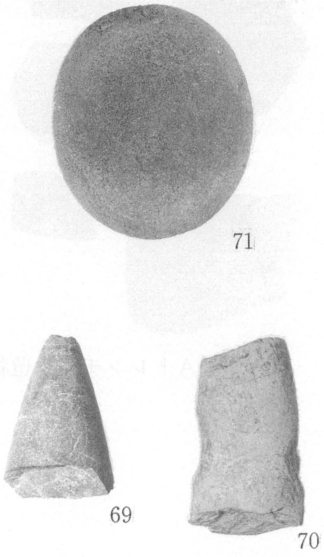


3．第２Ｂトレンチ出土遺物



4．第２Ｂトレンチ出土遺物

5．第２Ｂトレンチ出土遺物



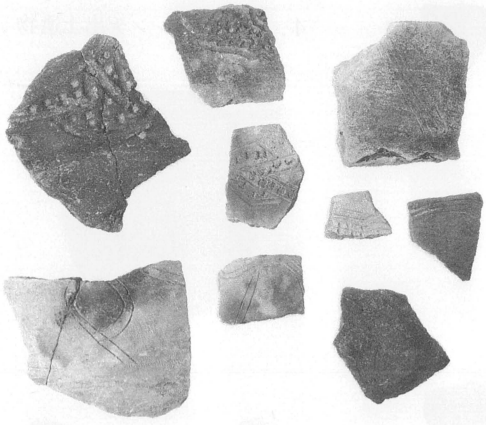
6．第２Ｂトレンチ出土石器

１．第３Ａトレンチ出土遺物

91

２．第３Ａトレンチ出土遺物

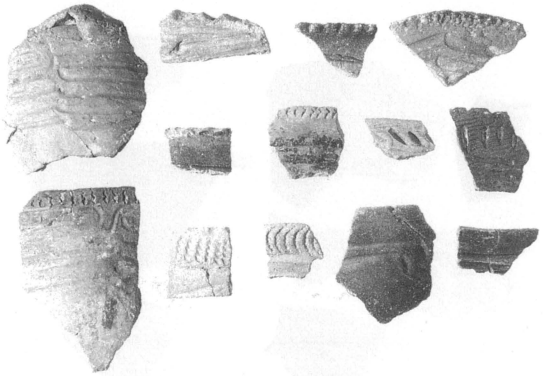
92



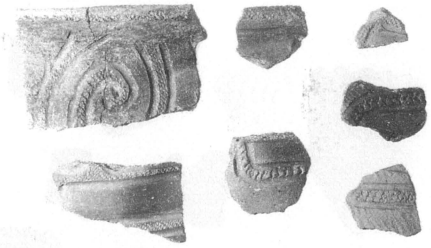
３．第３Ａトレンチ出土遺物

93

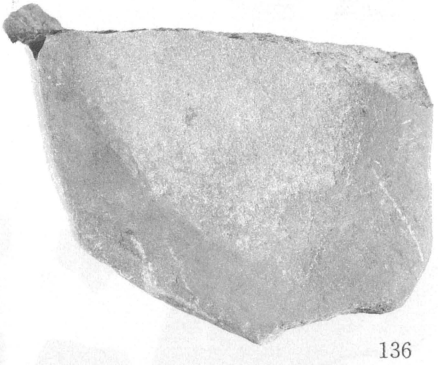
４．第３Ａトレンチ出土石器



1．第３Ｂトレンチ出土土器

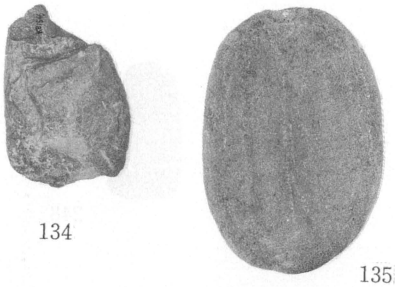


2．第３Ｂトレンチ出土土器



136

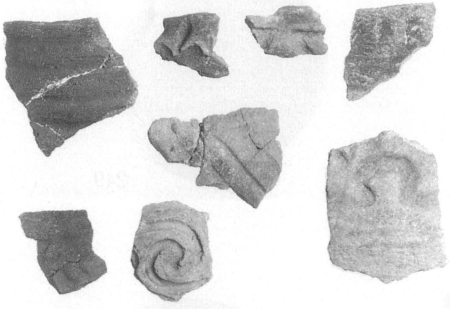
3．第３Ｂトレンチ出土石器



134

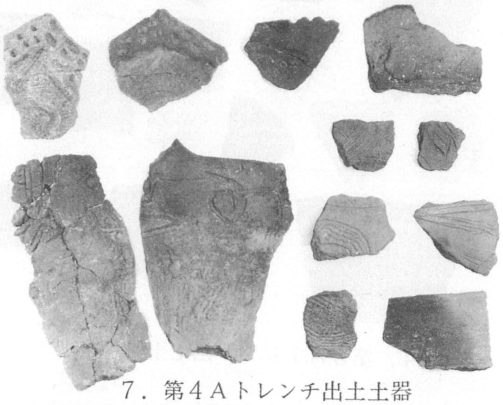
135

4．第３Ｂトレンチ出土石器



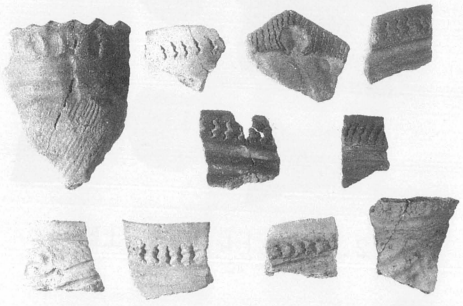
5．第４Ａトレンチ出土土器

6．第４Ａトレンチ出土土器

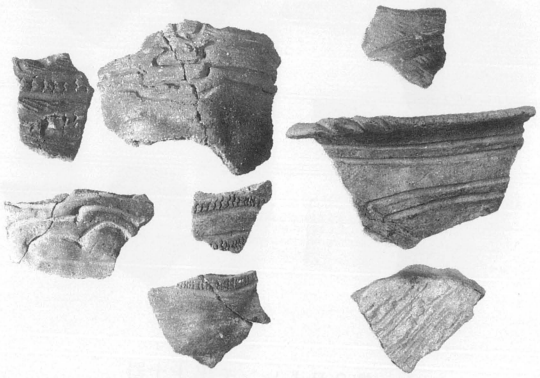


7．第４Ａトレンチ出土土器

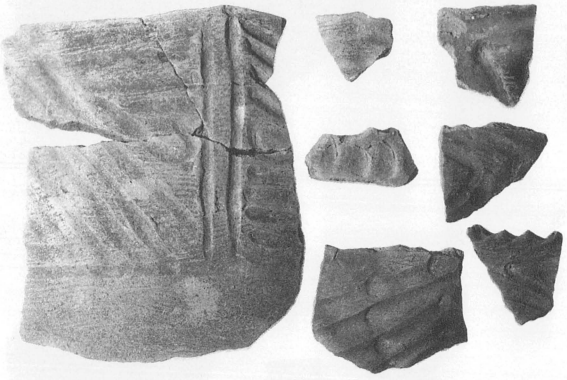
8．第４Ａトレンチ出土石器



1．第４Ｂトレンチ出土土器

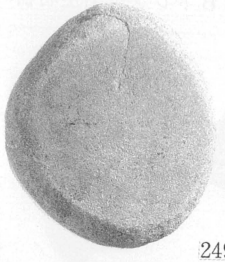


2．第４Ｂトレンチ出土土器

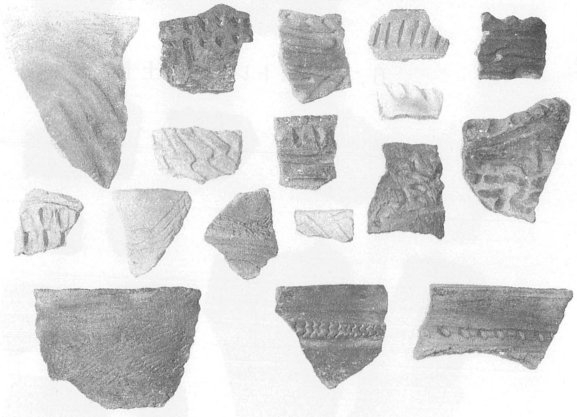


3．第５Ａトレンチ出土土器

248



249

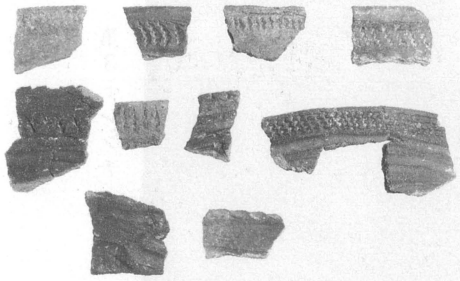


4．第５Ａトレンチ出土土器

250

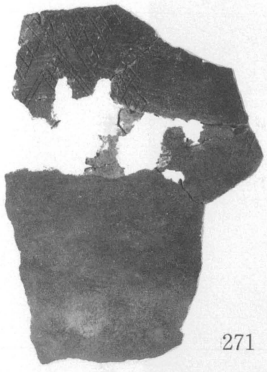
5．第５Ａトレンチ出土石器

図版１０

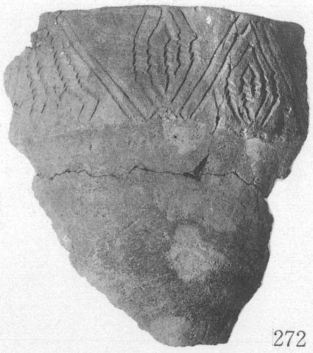


1．第５Ｂトレンチ出土土器

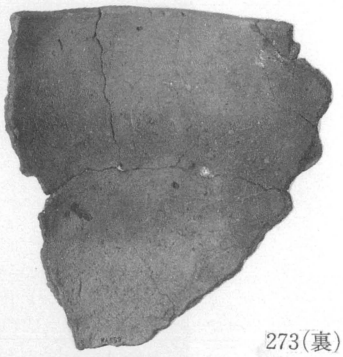
2．第５Ｂトレンチ出土土器



271

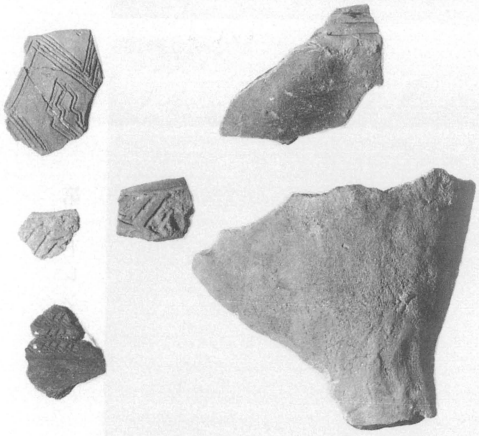


272

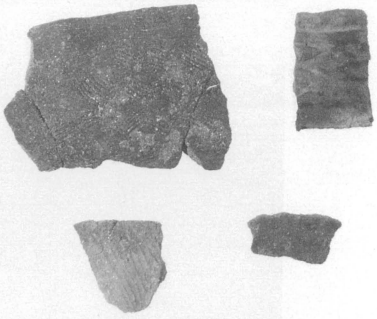


273(裏)

3．第６トレンチ出土土器



4．第６トレンチ出土土器



5．第７トレンチ出土土器

図版１１

第3トレンチ

第12トレンチ

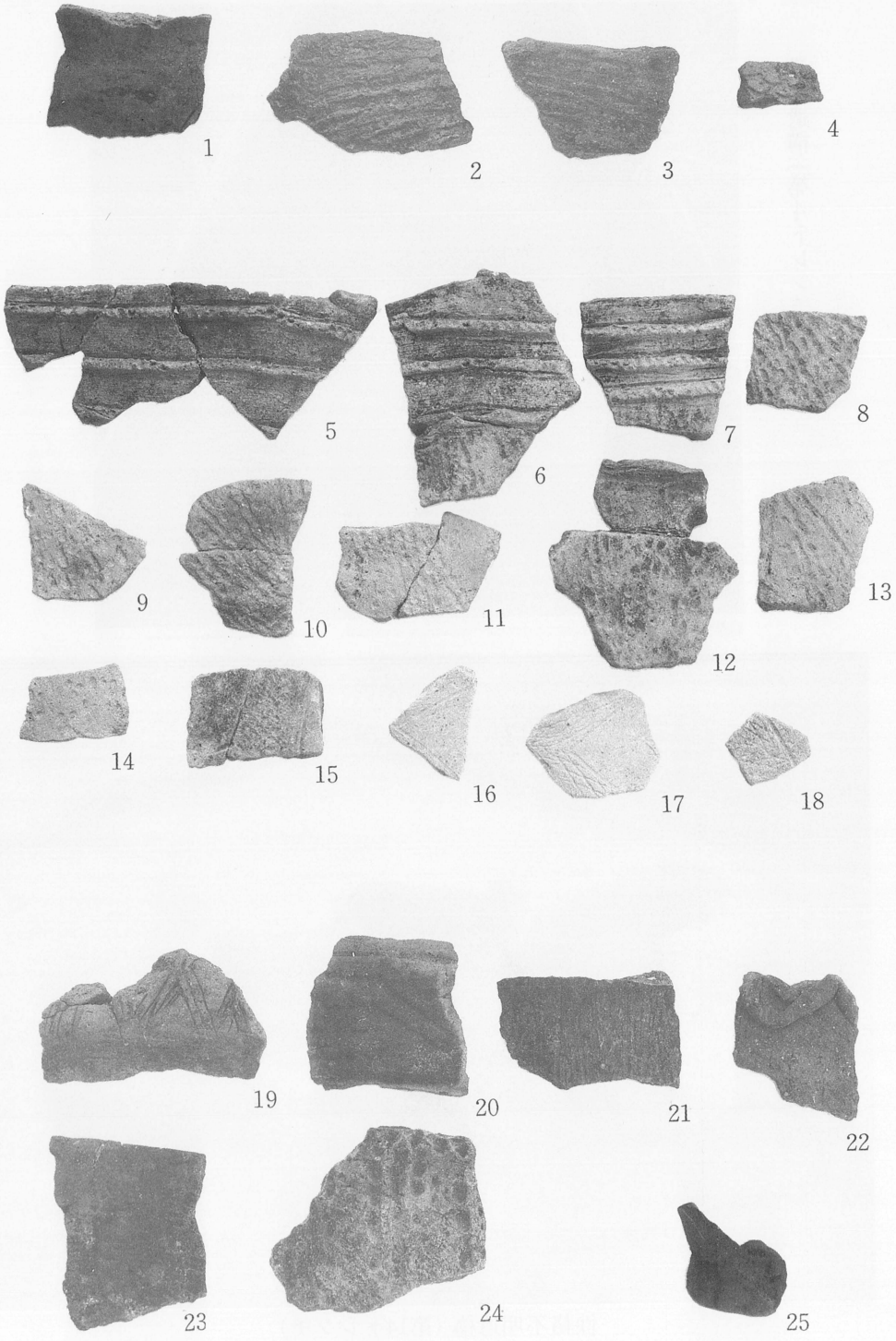
第13トレンチ

土光遺跡各トレンチ土層

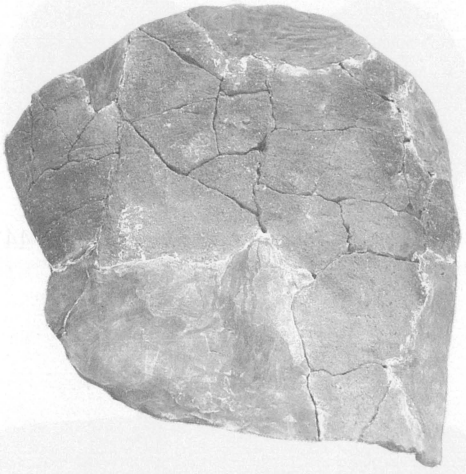
溝状遺構（第4トレンチ）

性格不明遺構（第14トレンチ）

土光遺跡検出遺構



出 土 遺 物



26

27

29

28

30

31

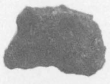
32

33

34

35

36



37

38

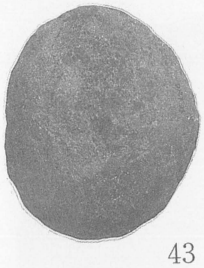
39

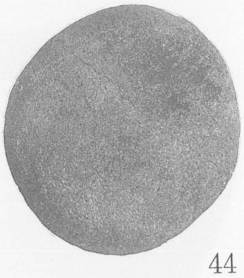
40

41

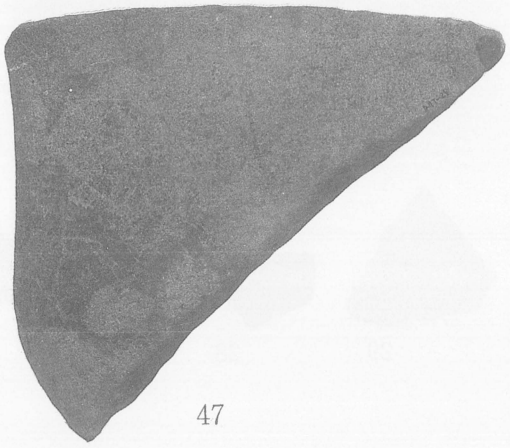
出 土 遺 物

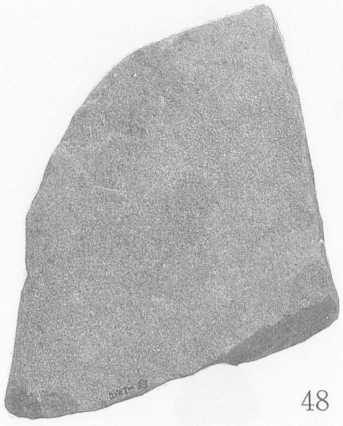
42


43


44

45


47


48

49

50

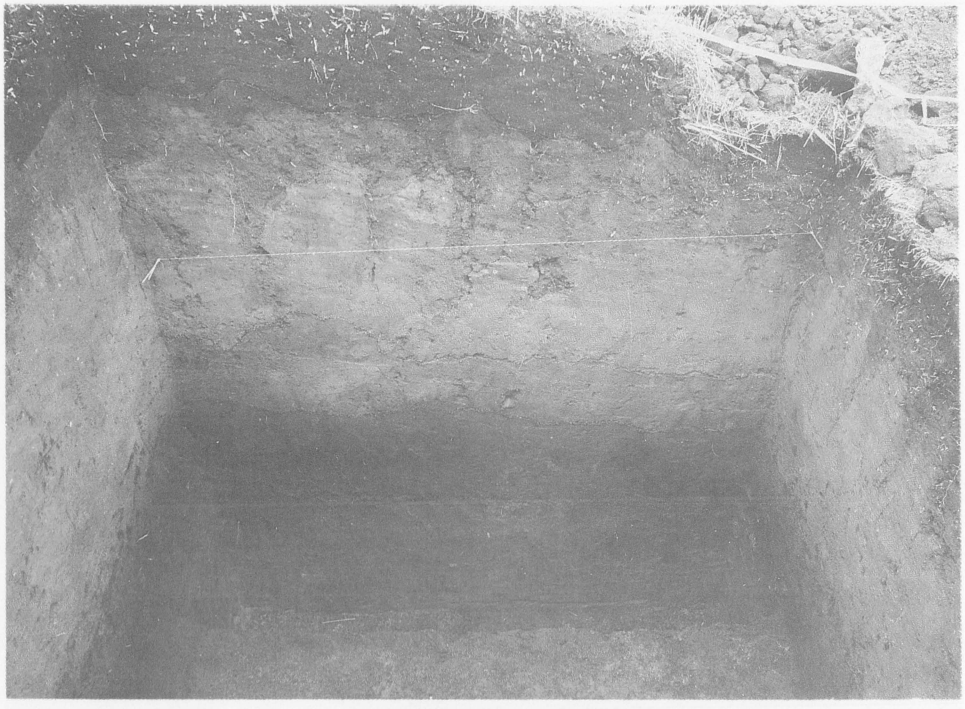
出 土 遺 物

第１～３トレンチ近景

第４・５トレンチ近景

風穴遺跡近景

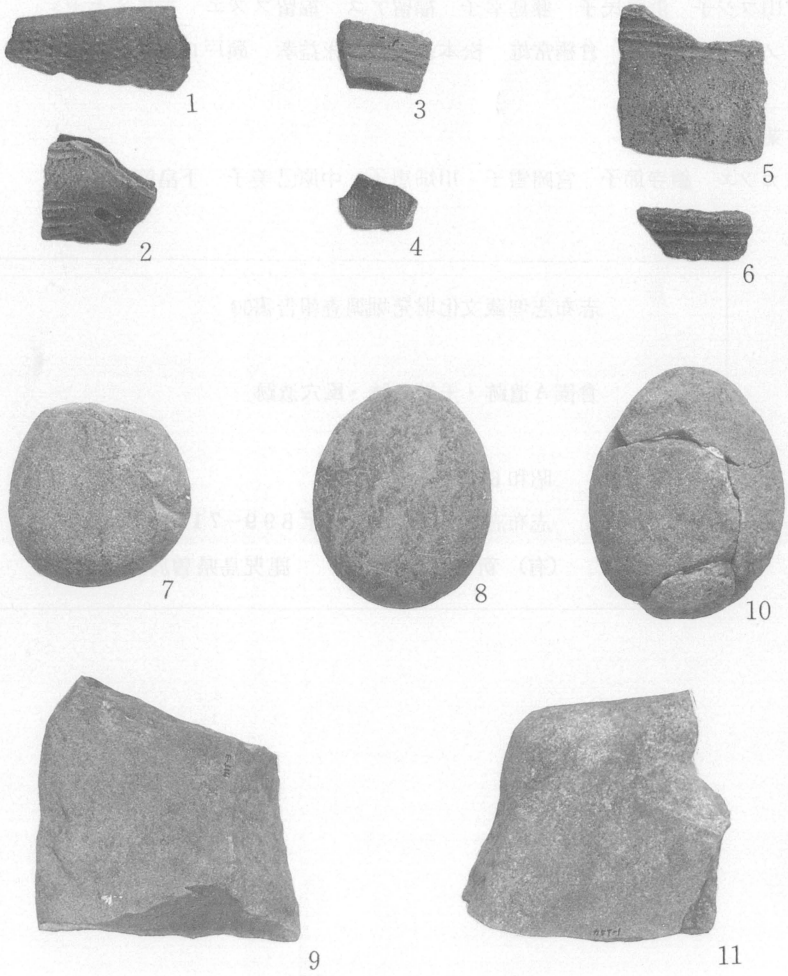
第1トレンチ



第3トレンチ

風穴遺跡各トレンチ土層

第５トレンチ



風穴遺跡土層及び出土遺物

あ　と　が　き

倉園A遺跡，土光遺跡，風穴遺跡の発掘調査報告書もようやく刊行にこぎつけた。

農道の確認調査と畑一枚々の確認調査で，地主の方々や作業員の方々に多大な御迷惑をかけたが，心から協力していただき無事調査を終了することができた。

発掘調査は，確認調査という遺跡保護の立場から充分な成果が得られた。

発掘作業にあたり，作業員として働いてくださった地元の方々，整理作業を担当していただいた文化課収蔵庫の方々に心から感謝の意を表します。

発掘作業員

持永ハツエ　大迫ハツエ　馬越ハヤ子　肥後カズ子　有川ウルカ　馬場シノエ
鬼塚スズエ　黒川ミチエ　安楽フム子　新堀ミヨ子　池添ヒサ子　松本フミ子
西田フジエ　倉橋和江　松元ヨシエ　妹尾マサ　関エミ　酒匂律子　中薗ヨシ子
阿辺山フジ子　浜平民子　藤島幸子　福留アス　福留スズエ　吉井ミヤ子
永吉ノリ　上迫モミ　倉橋常雄　松本義文　持永益孝　瀬戸口望

整理作業員

喜入カツエ　鎮寺節子　宮岡雪子　川畑恵子　中原己美子　下畠節子

志布志埋蔵文化財発掘調査報告書(10)

倉園A遺跡・土光遺跡・風穴遺跡

発行日　昭和60年3月
発　行　志布志町教育委員会　〒899−71　曽於郡志布志町
印刷所　(有) 新生社印刷　鹿児島県曽於郡志布志町